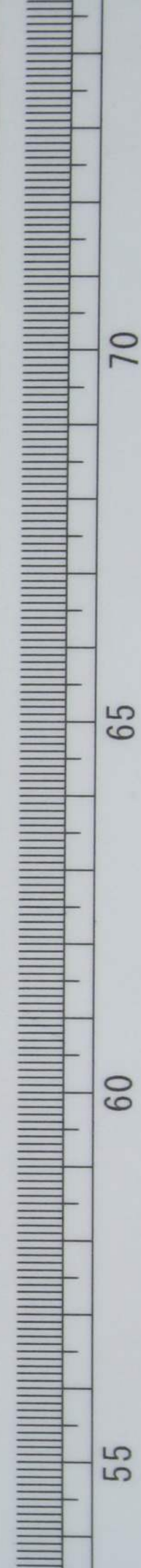


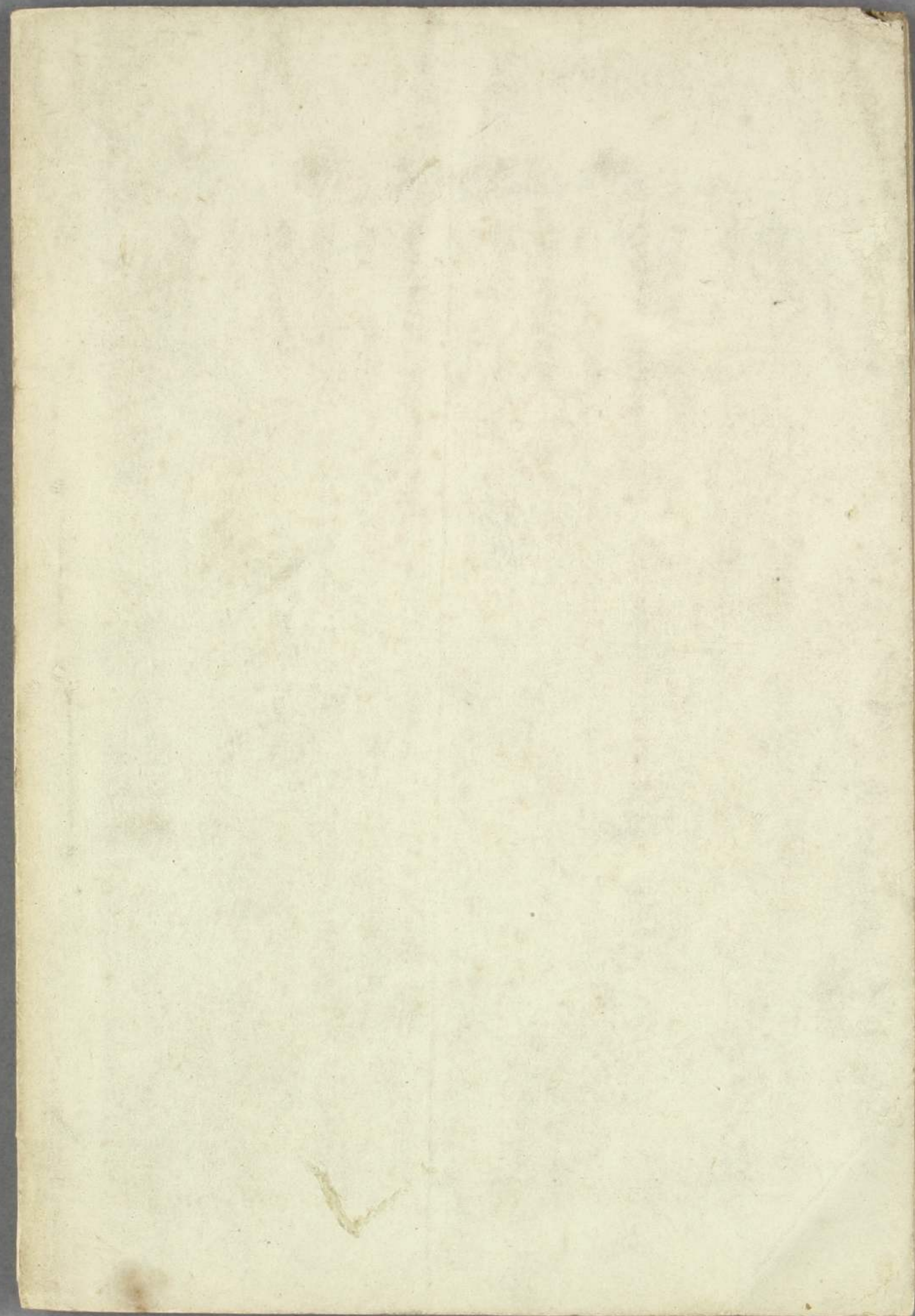


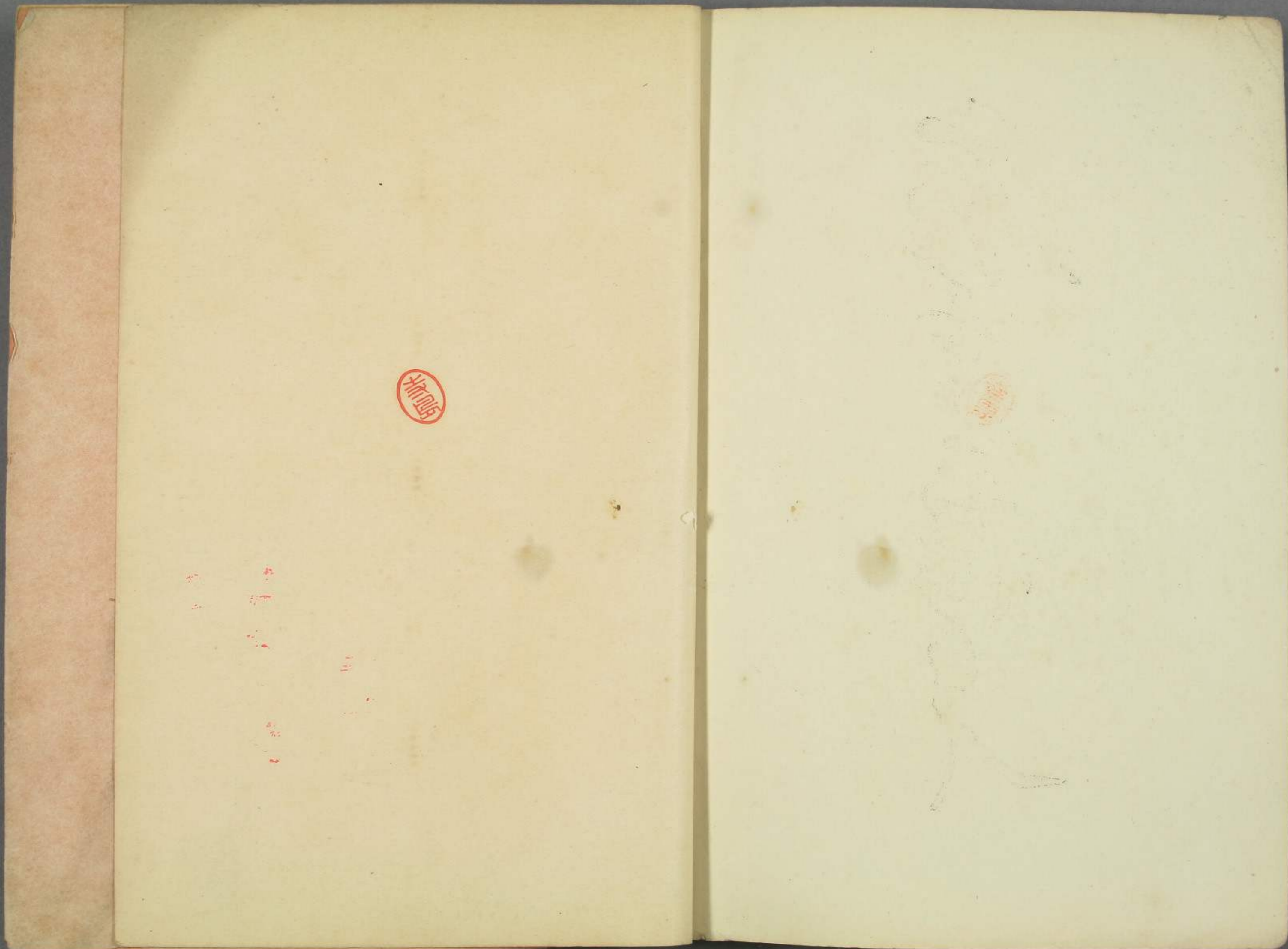
巖舟抄

本間文庫
文庫 14
D 13
1









巖石探身



巖石之搖曳

文學
D13
1

序

これ初め嶺雲と相識らず、七八年前、同郷の學生數十人
と共に、大久保あたりに散策しけるが、中に白哲秀眉の
少年あり。これと語りて文學の事に及びけるに、滔々こ
して盡きず、古今の大家を是非して、議論風生ず。これい
たく喜び、他の郷友を閑却して、獨りこの少年と共に高
丘の上に芳草を名きて坐し、眼下一面の躑躅を俯瞰し
つゝ、共に文學を談したりしが、何ぞ知らむ、これこの少
年は後日文壇に盛名を馳するに至れる嶺雲ならむと
は。

青年文に據りて、文壇の一方に雄視せしころは、これ嶺雲の全盛時代なりき。強弩の餘勢を江湖文學にこめしよりこの方は、嶺雲筆を執ること稀なり。たましく筆を執るも、復た當年の活氣と精采となし。嗚呼嶺雲が文學者としての生活は、已に終を告げたる乎。

嶺雲は多情の才子也。而して粗豪の氣を負ふ。枯坐して書を讀むま堪へず、又願を支へて寒蟬の鳴をなすに堪へず、起つて世に動かむとするも、志大にして才疎に、困頓し、蹉躓し、事、心と違ひ、一事成るなく、徒らに世人に嗤笑せらる。嶺雲の半生も亦憐むべきかな。

嶺雲もご禪を喜びしに非ずや。老莊の書を愛讀せしに非ずや。然るに自から適する所をすて、浮世の功業の途に彷徨するは何事ぞ。思ふま少年の客氣かは未だ失せざる乎。轆軻落魄の間に、毫も素志を失はず。これ其意氣を壯さず。唯顧みて其適する所を知れ。而して文學の爲に一臂の力を揮へ。昨、嶺雲常州の山より出で來りたるに明日これ出で、雲州の山中に入らむとす。行李匆匆、手を握つて歎息するの違なく、青邱が暫時握手又分手、暮雨南陵水寺鐘の感も啻ならず。一窓の春雨、うの舊作に對して、覺えず涙數行下る。これその何の故たるを

文學
D13
1

知らず。嶺雲の文は、已に世評あり。親友たる我あして、今
更に呶々の言を費さんや。

四

明治卅二年三月下浣、梅薰る書窓の下に、

桂濱月下漁郎

序

歌はんか哭さんか哭するは其命の窮にして達せざる
を以てなり。歌ふは文名嘖々として世之を傳ふるを以
てなり。然れども區々文章を以て名を後世に傳へんこ
するか如きは吾徒の素志に非らず。男兒四十未だ事の
成すあらずんば則ち己む思ふに嶺雲余と與に齡而立
に達す其不惑に至るは猶十歳の隔つものあり。十歳の
間短しとせず。吾徒は須らく力めて此間に於て其素志
を貫かざるべからざるなり。然らば則ち未だ以て歌ふ
べからず未だ以て哭すべからず。若し夫れ嶺雲の此集

五

文學
D13
1

を讀で彼を歌ひ彼を哭するが如きあらば是れ固より
吾徒の志に非ざるのみならず又實に嶺雲の期する所
に非ざるべし

六

明治己亥歲春日

笹川臨風識

醉來意氣掃千軍 天下誰成血性文

鐵馬夜馳窮北雪 大旗曉捲極南雲

魯連踏海空存志 安石出山未樹勳

回首百年家國事 張三李四一紛々

辱知 幸 德 秋 水

七

文學
D13
1

問嶺雲兄

昔者武愚耳 今者文弱多

武愚與文弱 優劣果如何

辱知 佐藤 秋 蘋

自序

嶺雲子命數奇、齡三十未た功を成さず、志四方未た家を成さず。半世の苦學、頼に蠹魚の書を蝕せす。雖とも、一代の經綸、徒に海蜃の氣を吐くのみ、志大に才疎、瑟を鼓して空しく、齊王の門に立ち、眼高し手低、珠を懐いて猶ほ崑山の下に哭す。懶放俗に耐へず、狷急多く世と違ふ、處る所毎に嶮巖、遇ふ所常に不平、其滿肚の牢騷と鬱勃と之を墨に灑き、之を筆に驅り、下して字となり、抒へて文となる、其言や危、其辭や憤、境に觸れ、物に觸れ、激すれば即ち發す、元と一時の感を遣るのみ、何ぞ千載に知を

文學
D13
1

待つさいはん、而かも言々心血を瀝み、語々肺肝を吐く、
敢て名山に藏するを欲せさるも、亦醬臙を覆ふに忍び
ず、乃ち焚く當くして焚かさるの稿を哀めて、梨に災す、
必ず世俗に讀まれんことを望まず、讀まれすんば、則ち
之を人間の塵埃に埋まんよりは、急雨迅雷晦冥の夕、此
を將つて仰いて大空に擲ち、之を霹靂の天火に焚盡さ
んのみ。

明治三十二年己亥孟春

嶺雲 田岡生識

嶺雲搖曳

目次

人才の壅塞	一頁
偉人出てよ	五頁
新春の第壹喝	八頁
詩人と人道	十三頁
境遇と靈性	十九頁
神來と狂熱	二十二頁
操觚界の地理的分色	二十四頁
獨造の見識と歴史的發達	二十七頁
小兒と詩人	三十頁
寫實と理想	三十二頁
樂天と厭世	三十四頁
讀書	三十六頁

文學心
D13
1

行	遊	三十九頁
名を成し易き弊	四十一頁
國民詩人	四十三頁
悲劇の快感	四十五頁
西歐文學の趣味	四十六頁
ヒューマニチー	四十六頁
紛々たる所謂文學者	四十八頁
西鶴	五十一頁
小説家と社會の隱微	五十三頁
下流の細民と文士	五十五頁
想化とは何ぞ	五十七頁
今日の漢詩人	五十九頁
理想と自然	六十頁
社會問題	六十二頁
學生の腐敗	六十三頁

今の大學生	六十四頁
青年と近時の徳育	六十五頁
青年と文學	六十六頁
人間到處有青山	六十七頁
鳶飛戾天	六十八頁
壯士歌	六十九頁
批評難	七十頁
東京と大阪	七十頁
文學と宗教	七十二頁
嗚乎文士涙なき歟	七十四頁
所謂小説家	七十五頁
島國的規模	七十七頁
操觚者の腐敗	七十八頁
辯を好むの弊	八十頁
小説と理想	八十一頁

文學
213
1

文學者と其報酬	八十三頁
空想	八十四頁
天と人	八十五頁
文士精力足らず	八十七頁
大不平なれ	八十八頁
文士の徳義	八十九頁
文士の禮讓	九十一頁
書を讀めよ思を鍊れよ	九十二頁
天才と狂熱	九十三頁
文士を海に放たん哉	九十五頁
人身攻撃	九十六頁
田舎の氣風	九十六頁
今の新聞紙	九十七頁
青年の意氣	九十九頁
青年諸卿に傲す	百〇一頁

四

嗚呼新年	一頁
筆を焚くの記	四頁
京を去るの辞	七頁
販を懐ふ	十頁
閑中適意	十三頁
荒灘の月	十九頁
山百合	三十二頁
曳船の聲	二十六頁
夜の景色	二十八頁
盛代の賜歟	二十九頁
波の雫	三十頁
魔言鬼語	三十二頁

嶺雲搖曳目次終

五

文學部
D13
1

嶺雲搖曳

田岡嶺雲 著

人才の壅塞

德川幕府封建の制度は門閥の弊を養成して、上下人爲の分巖に、格卑きものは才あるも用ゐられず、格貴きものは才なきも要路を占むるを得、登門杜絶、人才壅塞せらるるもの三百年。而して其の弊の極まるや發して維新の革命となる。維新の革命は實に多く彼の士以下層の不平の輩によりてなされたり。彼等利器を懐いて草廬に處り、櫪に伏して驥足を伸ばす能はざるの徒、鬱勃满腔の不平、外舶突として來り幕府の紀綱弛廢の痕見れたるに乗じて迸りて、尊王攘夷の説となり終に倒幕復古の大業を成しぬ。幕府覆亡の原因固より諸多と雖も、人才の壅塞亦其一大原因たらずんばならず。幕府倒れ、王政建つ。維新の革命なつて封建門閥の制打破せられ、世襲の風廢せられ、材によつて人を用ひ、人材登用の途開け英俊競ひ進む、明治初政の彬々たる人材を以

文庫
213
1

て満たされたる實に所以あり矣。

維新革命來、茲に三十年、世はまた人材の壅塞を見んとす。尊卑の門閥は既に維新の革命に破れたりと雖ども、今日また舊新を別つの一新門閥をみる。舊進の者前に塞がつて、新進のもの進む能はず。進む能はざるの新進は益々多ふして、前に塞がるの舊進は動かざるに依然。於是乎、新進の進む能はざるものは、相背いて失意の壑中に陥らんとす。新進にして稀れに進むを得るものあらしむるも、これ皆便佞利口の徒のみ、狷介圭角の人の如き、壁を抱いて空しく不遇に哭するあるのみ。蓋し今の世は巧利の世なり、器械的の世なり、唯物の世なり。今の世の風は大才を容るゝ能はず、今の世は則ち俗物の世なり、俗才子の世なり。舊進既に途を杜ぐ、新進にして稀れに進むものあるも、圓滑輕薄の俗才子、小利口に非ざれば則ち得ず。翻々たる俗才子を除いては、大才と雖ども終に其才を奮ふに所なし、大才は時に媚び世に諂ふものに非ず、刀筆の吏たるは小才の事のみ。今の世終に大才を容るゝ地なし。

小才はよく鼠を捕ふるの狸兒たるのみ。大才は深山に哮ゆるの虎の如き乎、一聲よく百獸を懾伏す。今の世狸兒の能にして馴らし易きを知つて、虎の威にして致し難きを措く。小能を見、小技にとる、所謂巧利の世なるもの此の如きのみ。

猫をして怒らしむるも牙を露はし鬚を豎つるのみ。虎を野に放つは天下の至險なり。有爲の大才を抱いて輾轉に沈淪する、これ虎の野にあるなり、畏るべきものは失意の大才なり。彼等意を當世に失ひ、望を當世に絶つ。絶望は人を暴にするなり、自ら其才あるを知り、而して自ら其才あつて而して用ゐられざる所以を知り、而して自ら望の今に繋く可らざるを知るに至らば、彼等寧ろ何事をか爲さざらんや。愚者の暴は憤を酒色に遣りて則ちやまんのみ、才あるもの憤りを洩さんとす、非常の事と雖もまた爲さざるを保する能はず。

維新の革命は實に幾多不平の徒の手によつて成されぬ、家もなく位もなく而かも才ある幾多浪士の經營に成りぬ、今日の弊にして極まらば、今の天下失意の才豈にまた往日の歴史を再びせざらんや。物平を得されは則ち激す、革命なるものは、不平の内に激して之を外に發するの噴孔なり。維新の革命は幕末失意の士の不平の迸發のみ。革命の猛焰は一度積弊を盡き盡して、暫く人材の釣衡を得たり、積弊再びす、今日の弊何を以てか之を拯はん、嗚呼何を以て乎之を拯はん。

沈滯は腐敗を生ず、波瀾は活動を與ふ。嗚呼今の世、人才壅塞するものは、社會に活動せければなり。内閣は依然たる元勳の内閣なり、改進黨は依然として大隈を戴ける

なり、自由黨は依然として板垣を戴けるなり、硯友社は依然として紅葉を領袖とするなり。今の時一大旋風を吹起し、一大波瀾を捲起し、今の社會を一大震蕩せずんば、天下は遂に失意不平の徒を以て満たされん。旋風よ來れ、波瀾よ來れ。汝とともにゆるる腐敗を吹き去れ、汝とともにゆるる沈滞を捲き去れ。

四

三十年の泰平は姑息の風を養ひなし、苟且の俗を養ひなせり。人に口あつて手なく、辯あつて勇なく、粧飾あつて赤心なし。失意不平の徒と雖ども、また往日幕末浪士の熱誠と熱意とある頗る疑ふへし。僅に五斗米を得れば則ち腰を屈するを耻ぢず、啗はすに利を以てすれば拂髯を愧ぢず。昨日朝を攻めし筆を以て今日は野を撃ち、吏を罵りしの口を以て今日は上官に媚ふ。天下不平の徒また小不平あるのみ、食を得ざるに不平し、職を得ざるに不平し、官を得ざるに不平し、願を得ざるに不平す。其不平や小なり、故に反覆表裏を常にせず、此の如きの徒不平ありと雖ども、失意たりと雖ども、以て眞に事をなすに足らざるなり。幕末の士は、死を決して天下後世の爲めに、門閥の積弊を破らんとせり、一身の榮達は寧ろ彼等が企圖せし所に非ず、彼等其一身を犠牲として一大目的に殉せしのみ。今の所謂失意不平の徒亦よく此大決心を有し、大勇氣を有するや否や。既に一身の爲に不平す、何ぞ一身を捨つるの勇あらんや。

嗚呼天下後昆のために身を挺し、命を捨て、今日の積弊を一洗せんとするものは誰れかある、嗚呼今の世に旋風を吹起し、波瀾を捲起するもの天下終に人なき歟。而かも今の世旋風なかるべからず、波瀾なかるべからず。嗚呼々々誰れにか待たん、誰れにか待たん、噫。(二十九年九月稿)

偉人出てよ

社會は腐敗し、人心は倦怠す、偉人出てすんは此沈滞を如何せん。

明治維新、一たび西歐の風を採つてより茲に三十年、物質的文明の弊今日に至つて極まる矣、所謂物質的文明なるものは、外を華耀にして内を闇黒にするものなり、電燈燦爛月光を奪ふて盛裝花の如き滿都の士女を照せども、道義溷濁相背ひて人は獸畜にれもむく、世を擧げて智巧を弄し、實利に鶯す。實利に鶯す、黄金に渴仰して人道を棄つ、智巧を弄す、權許を重しとして陷擠を忌まず、輕佻、風をなし淫靡、俗をなす、廷臣は色に荒み、朋黨節を賣る、請謁畫聽かれ、賄賂公行す、人、利に非されは動かす、利を獲んが爲めには、相欺いて怪しまず、今の世、眞摯なく、熱誠なし、唯黄金あるのみ、唯權詐あるのみ、浮薄、淫靡、權詐、偽善、巧利、今の社會はあらゆる惡

文學
213
1

徳を有し、今の人にはあらゆる悪徳を行ふ、社會の風紀此の如くにしてやますんは我邦家を如何ん。

六

之を政界に見すや、誰れか嘗膽臥薪といふ、好色宰相痴態依然、何の爲めにか租を苛にし、税を倍せる、日比野原頭宏模巍々。累々たる三百の頭顱黄金の爲めに皆其舌を二にす、自由黨の腐敗はもといふに足らず、彼の進歩黨と稱するものも、念頭何ぞ所謂國利民福あらん、夢は大臣の榮華に迷ふ、剛毅敢往死を視る歸するか如く、慷慨悲壯真に國を以て憂とし、民を以て憂となすもの、寥々として曉星にだも若かず。

之を文界に見すや、蠢々たる小學者、小文士、眼孔豆の如く膽氣狹窄、作家に大理想なく、評家に大見識なし、輕佻自ら喜び、皮相自得す、銜識を以て相誇り、穿鑿に相罷る、創見なく、鑑識なし、多情多感、深刻沈痛、真に熱血あり狂熱あるの天才者一人なし。

之を宗教界に見すや、法を説くの口は利をいひ、精進の身にして色を漁す、異端熾に淫祠瀾る、今日また堅實の信仰を有し、堅固の道德を有する一高僧を見ず。

要之するに、今の時世は智巧の世なり、權詐の世なり、皮相の世なり、浮薄の世なり、輕佻の世なり、偽善の世なり、小人物陸跳の世なり、嗚呼今の時大人物出でずんば誰れ

か頽瀾を既倒に回さん。

所謂大人物とは、眞摯至誠の人をいふなり、淋漓たる熱血と熱情とを有し、溢るゝか如き同情を有し、豫言者的の透徹なる眼光を有し、宗教者的の摯實なる熱意を有するの人をいふなり、卓然として毀譽褒貶を顧みず、屹然として貧富貴賤の外に立つの人をいふなり、嗚呼物質的の文明は世を擧つて巧利の人となし、智巧の人となせり、此種の人物、之を天下に求めて得可らず、今の世に憂ふる所は、實に此種の偉人を缺きたるにあり。世運を一轉するは偉人の大手腕を要す、嗚呼今日社會の沈滯、一たび之を決せざる可らず、三十年前幕政の末路腐敗は維新の革新之を決せり、今日の沈滯何を以てか之を決せん、嗚呼偉人の大手腕にまつと多し。

革新は活動なり、熱血は精采を洗ひ出す、古來沈滯の世界、一たび革新を経來れば頓に局面を一新す、己身の病毒は昇汞以て滅すべし、社會の病毒は何を以て滌ふべきか而して革新には大人物を要す、幕政の倒るゝや、山崎闇齋、淺見綱齋之が先をなし、山縣大貳、竹内式部の徒之に踵き、平田篤胤、頼山陽、林子平、蒲生君平、高山彦九郎の徒其勞を助成し、藤田東湖、吉田松蔭等其後をなし、終に維新の革新となれり、佛國ボルボン王家の倒るゝや、ウォルテアーあり、ルーソーあり、モンテスキューあり

七

文庫
D13
1

て其地を爲し、ミラボー、ラヘット之か礎を固め、ロベスピエアーあり、マラあり、ダントンあり、其功を成して九十三年の革新は成れり、偉人なくんば革新成らず。今の日本は漸く輕薄、利口、僞善、權詐の小人物に飽かんとして、偉人をもとむるの呼號漸く高し、偉人の傳記の頃日頻りに世に出づるものは、世人が偉人を懷ふに切あるか爲めにあらずや、今の世に偉人を求めて得ず、姑く古偉人の傳記に藉つて、其渴せるの望を醫せんとするにはあらずや。

嗚呼今の日本が偉人をもとむる抑もこれ何の徴ぞや、何の徴ぞや、嗚呼沈滞せる今の社會は、一大波瀾を簸起して、これに活動を興へざる可からず、偉人出てよ、偉人出てよ。(二十九年八月稿)

新春の第壹喝

青年は活氣あり。進取の靈火洞然として内に燃ゆ。唯直前邁往向上を知て、保守を知らず。未だ世故を知らず、故に猶豫なし、孤疑なき、唯希望の光を望んで勇進するのみ、故に眞摯なり、熱誠あり。故に青年の活氣あり。故に革命の大業多く青年の健兒に屬す。青年は洵に一國の元氣なり、守成に適せずと雖ども、舊物の打破青年に非ら

ざれば能はず。青年血誠の靈火、よく沈滞汚敗の氣を燃やし盡して、之を清粹にす。一國元氣礙滞あれば、青年あつて唯之を疏通し得べきのみ。

明治、年を重ねる茲に三十。初年當時にありて垂髫のもの、猶初老に近からむ。況んや當時青年の活氣、よく維新改革の功をなしたるもの、今や則ち頽然として老へり。老いたる者は儉安を喜ぶ、明治初年の元氣また見るに由なし。一國の元氣まさしに沈滞す。

嗚呼今の時に當て、奮然身を挺して此沈滞を捲き去らん者、唯今の青年にあるのみ。

然るに今の青年をみよ、彼等よく此活氣ある乎。果して進取の靈火ある乎。功利唯物の文明は世を擧げて功利唯物の人とせり、此風の浸染殊に所謂新教育をうけたるの青年に多し、彼等は最も多く功利唯物的教育をうけたり、功利唯物的教育は、人を誘て唯實利にこれ就かしむ。唯實利をこれみる、苟くも實利を收むるに非ざれば爲さず、左顧右眄、唯實利を的とするのみ、献身のと、彼等の解する所に非ず。己れに利あらざれば捨て、知らざる爲ねす。豈に身を殺して仁を爲すの非實利のとなさんや。於是乎、青年の活氣なるもの全く銷耗す、血誠なく直前邁往の勇なし。青年にして既に此の如くんば、一國終に元氣なるものなきなり。

散れたる縵袍をきて狐貉をきるものと立ちて恥ぢざるは青年の意氣なり。彼等唯希望

文學
D13
1

あるのみ、精神的に自ら標置する所あり、故に形骸の事その顧みる所に非ず。往日の書生を見よ、短衣高履揚々として『今の參議は皆書生』を高唱せしに非ずや。今の書生を見よ、その意に介する所は唯邊幅にあり。邊幅飾らすんば世顧みず、唯世に售らんとす、故に今の書生邊幅を飾らざる能はず。且つや、功利的の氣風は人を局促にす。功利唯物の教育によつて、養成せられたるもの、小利口あるのみ、小才子あるのみ、的とする所唯實利にあり、故に苟合ならざる能はず、面従ならざる能はず。巍然として自ら操守して、售れんことを求めざる如きは、彼等の夢想にたも知る所に非らず。既に面従なり、苟合なり。彼等何の血誠かあらむ、何の眞摯かあらむ。今の青年たるものは、青年たる所以を失す。彼等是一種の怪物なり、紅顔にして心には老の波よせたり。怪物や、怪物や、彼等は既に共に進取を談するに足らず、革命をいふに足らず。今や彼の往日青年の人は既に頽然として老いて、而して今日の青年なるもの、また此の如しとせば、嗟呼嗟呼誰と共にかせん。

嗚呼々々明治既に三十年。第二革命の機は既に熟す。山雨來らんとして風滿樓。政治界は吾人の知る所に非ず、宗教界を見すや、文學界を見すや。南山の陽既に殷雷あり霹靂まさに空を劈いて下らんとす。まさに是れ、青年雞聲をさいて蹶起すへきの秋にあらずや。而して今の青年、果してよくこれあり得へき歟。吾人私に之を憂ふ、血誠なく、眞摯なき青年、果して共になすに足るへきものありやを。彼等果して一時の名の爲めにするなき歟、果して一時の利の爲めにするなき歟。

而して吾人の特に杞憂に禁へざるものは、今の文界に於ける所謂新進の文士なり。彼等果して天地を斡旋する底の大手腕あるへき歟。革命は打破なり、打破して向上するなり、彼等果して破壊の敢爲ある歟、向上の大精神ある歟。革命は既に破壊あり、實利的にあらず、献身的なり、彼等果して自らを損して悔いざるの熱誠ある歟。既に献身的なり、身を殺し仁をなす底の大決心を要す、彼等果して之をなすに足るの眞摯ある歟。吾人は今の所謂新進文士について之を疑ふ、彼等果して一時の流行にうかされたるにあらざるべき歟、文界の名をなし易きに乘せんとするにあらざる歟、文筆の事の逸して贏得ることの易きを利せんとするに非ざる歟。今の熱誠なき、摯實なき、實利的の青年にして、果して然るが如きものなければ洵に幸なり。

且夫れ人の情安さを偷み、逸に忤る、激せずんば奮はず、窮せずんば勵まず。今の文壇なるものは、之を諸他のキャリアに比す、安にして逸なり、一度文壇に上るもの、其筆僅に文をなすを得ば即ち可なり、其才僅に書を解するを得ば即ち可なり。必ずしも

文學
D13
1

大主能あるを要せず、必ずしも大見地あるを要せず、幽玄の理想あるを要せず、熱烈の信仰あるを要せず。漫りに寫實の觀察に托し、經驗折衷の學風といふを名として、餌釘剪裁一時を糊塗すれば即ち足る。唯文を爲すと多く、作を出すと多ければ、庸衆何の眼識あらんや、其實を識らすして其名に銜し、其力を知らずして其數に駭き、相争うて其名を喧傳す、名をなすの易き文壇に過ぐるものあらんや。而して僅に名をなせば、文を賣て優に一口を糊すへし、其潤筆の料もとより之を今日西歐の貴に比す可らずといへども、また餓えて死するある往日の文士の如きものあらず。一夜の呻吟以て數金を贏得へし、今の文士の他に比して贅澤なるを見すや、今の時世は寧ろ文士を遇する厚きに過ぎ、また文士を見ると高に過ぎたり。此の如く安にして逸なるの境に處る。文士たるもの何ぞ奮はん、何ぞ勵まん、勵まざるも、奮はざるも、彼等の容易に名をなすへく、彼等は優に衣食し得べし。人此裡に入る、儉安たらさらんとするも得んや。惰慢あらさらんとするも得んや、安逸は沈滞なり、精神的に人を腐敗に導く。今彼等新進文士にして、假令向上の精神あり、献身の決心あらしむるも、猶此微菌に腐蝕せらるゝを免れじ。何ぞ況んや功利唯物の汚氣中に養成せられたるものをや。嗚呼文界革命の大活劇、終に之を今の新進文士に托するに足らざるべき歟。雨後の春草、

地上に抽くもの一に何ぞ多き、而して遂に擲するに足るものなき乎、熱誠なる一人なき乎、眞摯なる一人なき乎、活火内に燃ゆる一人なき乎。嗚呼革命の健兒つひになき乎。然れども、然れども、人、氣運をつくる乎、將たそれ氣運、人をつくる乎。チャールズ一世にはコロムエルあり。革命の氣運既に熟せば、文界將に一人のコロムエルを胎み來らさらんや。文壇に鐵騎を麾いて、幹天旋地するの巨手出てさらんや。今の新進文士遂にいふに足るものなしとせば、吾人は唯望を當來に繋けて、之を仰望す。美人は天の一方にあり、髣髴として形影あり、喚へども未だ來らず、招けども未だ到らず、歳は改まる、氣運は更に一步を進む、氣運果して歳とともに新たまるべき歟。氣運果して吾人の希望を實にするを得る歟。吾人は之を明治三十年の文壇に見ん。(三十年一月稿)

詩人ご人道

人道とは何ぞ、相憐の謂のみ、相憐とは何ぞ、同情の謂のみ。詩人は最も同情に富む者と稱す、詩人人道に冷かなるものなりといふは、吾人の信する能はざる所、詩人に果

213

十四

して人道に冷かなるものあらむ歟、吾人は之を許して眞詩人と稱する能はざるなり。彼等にして人類に相憐を表する能はずといふ、吾人はその眞に山川花鳥に同情するを信する能はず、既に同胞の爲めに泣く能はず、彼等にしてよく眞に戀愛の爲めに泣くといふを信する能はず、彼等にして眞によく戀愛に泣き、花鳥風月に同情せは、何を以てか人類に同情し同胞の爲めに泣く能はざらんや。詩人にして人道に冷かなる、吾人之を稱して眞の詩人に非ずといふも何の不可かこれ有らむや。

今の小説家は最もよく人間の暗黒面を描くを以て誇るものあり、而かもその一人、果してよく社會下層細民の爲めに泣き、其悲惨の境遇を描出して、之を天下に愬へたるものある歟。彼等の奇僻の人間を描くやよし、不具の人間を寫すやよし、然れども飢に叫び寒に泣く悲惨の境遇は、彼等の題目たる能はざるへき歟。戀愛をうつすもよし、失戀を寫すもよし、然れども絶望して溝壑に轉するもの、果して更に悲惨の運命を有するに非ざるへき歟。嗚呼吾人之を知れり、今の所謂詩人文士と稱するもの、輩は、一時の流行を追ふて其流行の趨く所に從て其筆を動かすのみ。彼等内に一點の眞温情あり、一毫の眞同情ありて、鬱勃たる滿腔の感慨抑へんと欲して抑ゆる能はずして終めて、之を筆に下したるものに非ず、彼等のよく失戀に泣き、無能に同情を表するが

如くなるも而かも一點人道に敦きを認め得ざるは豈にこれか爲めのみ。

嗚呼人生の悲惨、彼の下流細民の生涯より甚たしきものある歟、失戀なるものもどより悲惨なり、而れども彼等は唯精神的に絶望の谷に陥れるのみ、未だ貧窟裡の民が精神的肉体的に絶望の暗黒に陥れるか如くならず。彼の不具なるもの、生涯亦もどより悲惨なり、而れども猶肉体的に然るのみ、未だ貧窟民の如く然るにあらず、それ活きんとするは人の皆之を欲する所、而かも彼等は時に自ら死するものすらあるなり、何そや、彼等は絶望の極に陥れる者なり。彼等は生きて生を繋ぐの糧に乏しく、而して既に生を繋ぐの糧に乏し、口腹のものとめこれ急、何を況んや聲色の慾を充すを得んや、彼等はあらゆる快樂なるものを其一身より褫はれたるなり、あらゆる幸福なるものを其一生より奪はれたるなり、希望あれども必ず達するを得ず、需求あれども必ず給するを得ず、それ人希望あるか故に立つ、快樂あるか故に生く、既に希望に達すへきなく、快樂のものとむへきなし、彼等また何のために生くるを欲せんや、何のために世にあるを望まんや、彼等生きて何の用を、生くると雖ども既に死す、寧ろ死して早く身神の寂滅につきて知る莫らんには若かず、彼等何ぞ生を輕せんや、死の更に樂しきを知ればなり、嗚呼人生病に死するものもどより多し、然れども貧のために縊死し投水

文學
213

十六

するものまた決して少々に非ず。彼等の運命か斯くの如く悲惨なり、悲惨なる此の如くにして之か爲めに泣き之か爲めに同情するもの少きは何ぞ、吾人敢て之を天下に責めず、彼の同情に富まざる可らざる詩人文士にして猶今日の如きを見ずや。然れども貧民か天下多數の同情をひかざる抑もまた其所以なくはあらず、蓋し彼等を以て懶惰のために此域に陥れるものとし、而してまた彼等を以て罪惡の府となせはなり。而れども知らずや、彼等か罪惡を犯すに至るものは寧ろ其貧に因して然るものなり、而してまた彼等か此境遇に陥れるものは、其社會の潮流に乗する能はさりしに由るなり。吾人は必ずしも悉く然りとはいはず、而れども其多數は必ず自業の致す所に非ずして境遇のためにこれに陥り、而して自ら好むてなすに非ざるも、必至に迫られて罪惡を犯すものなり。社會の潮流に乗する能はざるもの固より自らに不能なりとはいはず、然れども社會の順風に駕するもの多くこれ僥倖兒のみ、然らすんば玃犴便佞の徒のみ、而して誠實真摯のもの世と共に醒醉する能はずして却て逆流に落つ、假令然らすといへどもまた世波の激動に堪ゆる能はざる弱者のみ、薄運者に非らざれば則ち弱者、弱者は憐むべし、惡むべきに非ず、且や彼等絶望に落ち飢寒に迫らる、彼等か生を好むの情、自ら殺すを能くするも猶飢寒に死する能はず、死せんよりは寧ろ罪

十七

惡を犯さん、清廉高潔の士に非らざるよりは、誰か飢死に瀕して猶凜然として其名を潔くし其節を守るを能くせんや。彼等に食を奪ふて猶彼等に責むるに仁義を以てするは豈に彼等のよくする所ならんや。嗚呼衣食足て後禮節を教ふべきのみ、貧者の罪を犯すや、其責其人にあらずして其貧にあり、彼等をして此罪惡を犯さざる能はざらしむるの運命、寧ろ憐むべくして惡むべきものあるを見ず。嗚呼滔々たる天下、今日白晝に相欺むき、稠人の間に相詐はり靦然、唯たその巧みに法網を潜るか故に、紳士と稱せられ、紳商と稱せらるゝのみ、何ぞひとりかの貧者に責めんや、貧者に責めんや、嗚呼貴紳の食前に供せらるゝ葡萄酒の美酒には僅に幾分の關稅を課せられたるのみ、而して貧民は一日の罷勞をいやすへき一杯の濁醪に高價の稅を拂ふなり。マニラ、ハウェアの葉煙草は一厘の印稅をも課せられざるも、貧者の骨休め一服刻煙草には、彼等は幾何の重稅を拂ふなり。十九世紀は階級を打破したりといふ、而かも富貧の懸絶を以て人爵の差等に代へたるを知らずや。貴の賤を壓すると、富の貧を壓すると、實際に於て何等の相違あるべき乎。代議の政躰布かれたりといふ莫れ、所謂代議士なるものは中等以上の富者の代表者たるのみ、彼等は自己の選舉者に便にせんとをこれ知るのみ。彼等は貧者の爲めに代りて懇ふるあるなきなり。貧者は假令不平あるも、不満あり

文學
D13

るも、其枉屈以て伸ふる所あるなし。天に泣くも天冷々、地に泣くも地冷々、法は彼等の爲めに庇護せず、行政の者は彼等を度外に措く、彼等は恨を呑んで黙せざる可らず。嗚呼誰れか此等の慰者となり、庇護者となり、之に代て天下に懇へ、之に代て懷抱を伸ふべきものだ。

宗教者あり、彼等は此大任を盡くすべきの職責あり、而るも彼等の慈善を名とするも實は己れの宗教に利せんとする私心の其の間に介せるを免れず。彼れ等の多くは偽善者あり、其の名を美にして其の行を匿にす、彼等には以て此れ等の貧者を托すべきに非ず、未來の福田を説て貧者の財囊を絞るか如きは更に酷だし、斷して貧者の味方に非ず。

庶幾くは唯詩人文士あるのみ、もし眞に意を此に注かば憐むべきもの、悲むべきもの泣くべきもの、憤るべきもの、慨すべきもの、皆是れのみ。貧民の爲めに代りて其枉屈を懇へ、更に其悲惨の境遇を描きて天下に示す、血あり涙ある詩人文士、希くは起てこれに従へよ。而れども錢の爲めに文を賣り、錢の爲めに書肆に叩頭するものよくする所にあらず、一身を以て人道の爲めに殉し、毀譽禍福を以て度外に措くの熱誠あるを要す。起て貧者の味方となれ、起て貧者の味方となれ、花鳥と戀愛とのみ必ず

しも汝等か好題目に非ず。社會の最大數を占むる貧者の味方となつて天下に絶叫するまた人間の一大快事に非ずや。

嗚呼我に一萬金あらしめよ、我は先づ東京中に於けるあらゆる貧者乞食の徒、襤褸蓬髮の者を率ゐて、一夜彼の所謂紳士と稱するもの、宴遊の場たるあらゆる紅樓翠閣に上り、彼等をして牛飲飽食せしめ、これが興を助くるに彼の紳士貴顯と稱する人々の宴に侍して、嬌語喃笑するあらゆる絃妓なる者を喚來つて絃歌舞蹈せしめん哉。(廿九年三月稿)

境遇と靈性

言ふ莫れ習、性とあると。言ふ莫れ境遇、人を造ると。境遇もどより人を造るあらん、習もどより性となることあらむ。然れども人はまた其自己を有す、其自己の靈性を有す、這個の自己や、靈性や、之を熱して鎔けず、之を鑢して磨せず、之を槌して碎けず、習や境遇や、よく人を變ふるとはあらむ、而かも此靈性、此自己をも併せ易ふると能はざるなり、故に人に二面あり、習によりてなれる性あり、而してまた生得の靈性あり、境遇によりて造られたる自己あり、而してまた本來の自己あり。然れども此

文學
213

本來の自己や生得の靈性や、常に境遇の我や習性やに蔽はれて深く隠る、隱約として認め易からざるなり。境遇の我や、習性や、日常舉手投足の上に顯はれて吾人の不潔に目睹する所。たゞ吾人の目睹する所たり、故に此境遇の自己や、習性やを捉へて、直ちに之を以て其人の眞實とし、其人の本來とす。殊に知らず、其眞實や其本來やの却て其見難く知り難さの邊にありて存するを。而かも其眞實や其本來やの顯はるゝ猶闇夜の電の如く然り、時に黒雲を擘破して一閃す、認めんとすれば既に隠る、故に甚だ捉へ難きなり。捉へ難しと雖どもこれや却て人の眞實なり、本來なり。故に眞によく人を觀て透徹ならむを要せば、其皮相の習性や、境遇の我やをみると共に、更にまた其内奥の自己、生得の靈性を看ざる可らず、然れどもこれをなすと別に一隻眼を有するものにして、始めて得べきのみ、之をなし得て乃ち人を見る。惡者必ずしも惡ならず、蟾蜍の頭玉を藏す、醜厲恢恠のうち、未だ必ずしも玲瓏無塵の美德を認め得ずむばならず、既に之を認め得、於是乎惡者必ずしも惡むべきを覺せず、否寧ろその此の如きの靈性、此の如きの本質ありて、而して境遇の爲めに味まされ、習性の爲めに晦まされ、不知不識醜厲恢恠の闇中に墮落し去りたるを憐ますむばらざるなり。之を心の上よりして同情といひ、行の上よりして寬恕といふ。此寬恕、此同情、人之を

缺く可からず。而して殊に小説作家を然りとす。夫れ社會の法律なるものは行の蹟を罰するなり、社會の制裁なるものは行の末を咎むるものなり。法律や、制裁やの外に立ちて獨り能く所謂惡者なるものに美德を認めてこれがために一滴の涙をそゞもの文士を措てそれ誰かあるや。法律が之を罪として牢獄に投じ、社會が之を罪として齒ひするを耻づる間に在て、獨り彼等が辯護者となり、彼等が慰藉者となるべきもの、文士を措てそれ誰れかあるや。故に小説作家の人を描くや、表よりして之を寫して足らず、更に裏よりせざる可らず。外よりして足らず、更に内よりせざる可らず。正よりして足らず、更に側よりせざる可らず。徒らに行の末、行の迹を寫して、以て其の人を描き得たりといふも、猶これ其半面を描きたるなり。それ良工の人を畫くや、眉目服飾の外に於てよく、其人の氣象をして紙幅上に活躍せしむ。良作家また然らざる可らず、惟に人間半面の境遇の自己と、習性とを寫して足らず、更に其眼光内奥の靈性、本來の自己とに徹して人間そのものの全眞實を描きて、之を文學の外に躍らしめざる可らず。彼のユーゴーが描き來る諸性格を見ずや、彼は確かに此裡の消息を解せるものなり。よく冷酷氷の如きの人に一點の温かき愛を捕へ、匪徳匿行のものに一點の義氣を捉へ得たるに非ずや。吾人がユーゴーに服するは常に此點にある而已。吾人

文學
D13

は頃日一葉女史が近作『にぎりぬ』を讀みて、女史がかの醜惡卑陋の賣春女の心事を描きて、而してこれに滿腹の同情をそゝぎたるに服す。(二十九年十二月稿)

神來と狂熱

文士筆を提げて紙に臨む、彼の眼中紙なきなり、筆なきなり、紙上筆なく、筆下紙なし。此時文士の滿腔の心血注いてたゞ文にあり、文外既に我あり、何ぞ況むや筆と紙とあらむや。我即ち文なり、文即ち我なり、我と文と一體たり、一枚たり、其間一毫を介む可らず、一髪を容る可らず。我、筆を落すを知らず、而して紙上自ら文を成す之を文士の神來とはいふなり。我其何の處に其文思を得たるかを知らず、而して紙上に落ちて鏗鏘響きあり、之を助くるものありて然るが如し、眞に果して之を助くるものある耶、將たまた我自ら之を成して知らざる耶、蒼々たるもの天なり何の處にか文思を降すべき、茫々たるものは地なり何處にか詩興を湧かさん。天降さず、地に湧かず、我自から爲すにあらずして誰か之を爲さむや。唯、文士の筆を提げて紙に臨むや彼が一心を擧げて文思、他念あるなし。視を收め聽を反し、一身惚兮として三昧の境に入る、此時我自らを忘る、何ぞ我がその何を爲すを知らむや、我は即ち文思、文思

即ち我、我文思を出すといへとも我その我の出だすを知らざるなり。我その我の出だす所たるを知らず、之を以て忽焉として來るが如くあして、その誰れに出で、誰れか之を成すを知らざるなり、故に之を神助なりといひ、天徠なりといふ、而かも我之を出だす也、我之を爲す也、我之を出し、我之を爲すと雖ども、而かも天才の狂熱あるにあらざれば即ち能はず。何ぞや、狂熱は魔力なり、渾身の心血を擧げてよく之を一燒點に集中せしむ、故によく出す也、故によく爲す也。彼憤々たるもの筆を提げて千思、紙に臨むで萬考、故に私意妄動、自己と文思とを渾して、一となすを得ず、文思と自己と、其間に劃然として隔てあり、既に隔てあり、故に筆に隨ふて揮灑文をなす能はず、遲疑猶豫、東塗西抹、僅に一幅の文字をなし來るのみ。彼の天才者のなす所を見ずや、既に渾身の心血を擧げて之を一點に集中するを能くす、故によく自己を忘る、既に自己を忘る、文思即ち我也、我即ち文思なり、變すべくして變じ、止まるべくして止まり、勢を趨ふて順落、險に當りて決撒、或は斷たんとしてまた續く、藕糸の微に通するが如く。或は隠れてまた顯はる、春蛇の草間を走るに似たり。忽ちにして群山萬壑荆門に赴き、忽ちにして意はず峯廻り嶺變ず。或は促節或は緩調、緩なるべくして即ち緩、促なるべくして、即ち促、促なるときは天驥の峻阪を下るが如く、緩ある

文學
213

時は鶯兒の花間に語るが如く。忽ちにして凄風急雨、忽ちにして霽天朗日。一頓一挫。一起一伏、一開一闔、一揚一抑。興、境と詣り、神、氣と合し、變幻自在、神通自由、文の能事是に至て畢る矣。東坡が所謂『我文萬斛の泉の如く、之を取れども竭さず、惟行くべき所にゆき止まるべき所に止まる』といへる、殆むと幾し矣。故に文を爲りて神に入らんとす、たゞ只此狂熱を要す、狂熱ありて而る後始めて自己を忘るべく、興、境と詣り、神、氣と合すべし、而る後始めて意の欲する所に從ひて筆を遣るべし。皇甫仿曰『方其收視反聽、研精殫思、寸心幾嘔、脩髮盡枯、深湛守默、鬼神將通之』と嗚呼これ所謂神來に接するの法なり。輕佻浮薄、才を恃み識を衒ふ今の所謂利口才子なるもの、如何んぞかの神來に接するを得んや、狂熱なる哉狂熱なる哉。唯此狂熱輒ちよく神來を招降すべきのみ、狂熱は文士の咒文なり、狂熱はまた文士の秘鑰なり。(二十八年十二月稿)

操觚界の地理的分色

地、南北を分てば風氣同じからず。風氣同じからざれば、氣質從て相異す。氣質相異あれば、文章調を別にせざるを得ず。支那に就て之をみるも、春秋戰國の時、其文學、

既に鄒魯と荆楚とを以て其致を同じうせず。六朝以來は則ち經義文章より、書畫の末技に至るまで、劃然として南北を別つ、唐の一統と共に、一たび學術上の調和を試みしも、猶地に從うて風を殊にすると依然。これ亦已むを得ざるのみ。晉に支那に於て然るのみならず、歐洲に於て之を見るも亦南歐の文學と北歐の文學と其趣致の混同す可らざるものあるを見るに非ずや。之を要するに南方は多く風土温和、山水秀麗、北方は則ち風物蕭殺、故に北方は其人心沈重に、南方は輕快。輕快故に浮薄に流れ易く、沈重故に迂遠に失し易し。北方は經を守て權を知らず、南方は變に處して正より逸す。南方は變通多く、北方は守株となる、故に北方は保守に傾むき、南方は進取に趨る、南方は化せられ易く、北方は渝ゆるなし、南方は寧ろ利に敏に、北方は義を重す。北方は守成に適し、南方は創業に適す。孔子既に南方之強、北方之強をいふ。北方の強は則ち剛毅持重にあり、南方の強は則ち疾風迅雷の如し。南方は情に富み、北方は意に強し。唾せられて他面をこれに向くる者は北方の人なり、勃然として色を作すは南方の人なり。南方は華を喜び、北方は實を尙ふ。北方は樸、南方は文。一擲千金、豪奢を競ふて意を一時に快にするは南方の華なり、文なり。美田を買ひ、書を藏して、子孫の計をなすは北方の實なり、樸なり。南北の風氣それ相反すると此の如し。文章

文學
D13

また然らざらんや。閑雅雅馴なるは南方なり、峭拔崢嶸なるは北方なり。北方は法度森嚴、南方は詭奇變幻。南方は流麗、北方は簡勁。これ實に免る可からざるの數歟。今これを吾邦今日の操觚界に見る、雜誌に於て、新聞に於て、其特色の南北各一方を代表せる者あるを認む。雜誌に於て『國民の友』と『日本人』と。新聞に於て『國民』と『日本』と。此兩々二者は、鮮明に吾操觚界の地理的分色を表示せるものたり。『日本』と『日本人』は北方の趣致を表し、『國民の友』と『國民』とは南方の好尚を示す。蓋し『國民の友』と『國民新聞』とを主幹せる徳富蘇峰は熊本の人、而して『日本人』の三宅雪嶺は金澤の人、『日本』新聞の陸羯南は青森の人、而して兩者其麾下幾多の俊髦、悉く其主なるものと其色彩を同ふせるもの歟、否らずんば即ち其感化を被るを免る、能はず。於是乎、兩々劃然として南北を分つ。其主義に、其趣味に、其軀裁に、其文章に、各相反せるの特色を發揮せるを見る。『國民』と、『國民の友』は、其主義に於て進取たり、其傾向に於て西歐崇拜たり、其體裁は整然、其文章は直譯風たり。『日本』と『日本人』とは、其主義に於て、保守たり、其傾向に於て、國粹保存たり、其體裁は亂雜に、其文字は漢文調たり。前者は常に時に先んせんとし、俗に容れられんとし、後者は時と睽かんとし、俗に離れんとす。二者共に不偏不黨の名の上に標置すと雖とも、前者は改進黨に近く、

後者は國民協會に近し。前者は儂巧の風あり、後者は悲歌の調を帶ぶ。後者には古武士の面影を認むべく、前者は當世才子の風采を想はしむ。後者の文章は直截森嚴なれども精覈を欠き、前者は流麗通暢なれども冗漫に失す。各其尙ぶ所に偏して、其體をなす。民友社一輩の文は、溪流の谷間を流るゝが如し、曲さに曲折を極むれども雄大の趣に乏し。後者の文は、山峯屹立するに似たり、嚴々たりと雖も紅紫の彩なし。前者は利を視るに敏なり、故に體裁の可成時好に投せんことを力め、後者は俗を顧みず、故に體裁の整雜を問はず。二者の趣向趣味の相反せる此の如し。而して吾人は此を以て我國操觚界の好對となす。(二十九年十月稿)

獨造の見識と歴史的發達

歴史的的研究は、近時學風の長所にしてまた短所なり。吾人は敢て歴史的的研究が學術研究の上に重要ならずとはいはず、然れども吾人は之をなすに於てその何が爲になされざる可らざるかを顧みざる可らず。歴史的的研究なるものは、其歴史的發達の蹟を尋究して今日に於ける吾人の地歩を定むるにある而已。既に今日に於ける吾人の地歩を知り得、吾人は當さに其今日の地歩に於てなさざる可らざる所を盡くして、歴史的發達

文學
213

の連鎖の一環たるべき而已。然るを單に歴史的研究なるものを以て、吾人思想發達の記述を諳じて以て得たりとせば、これ歴史的研究の大弊なり。古人以外に自己を薪出する能はずむば、所謂發達なるもの何くにか存するや。歴史は連続なりと共にまた發達なりとせば、吾人は彼の歴史的研究を唱へて獨造の見地を蔑みするもの、歴史的研究そのものを目的として歴史的研究をなすものにして、這の自己の歴史的發展に關るべきものたるを忘れたるに非ざるかを疑ふ。今日の自己は之を前に紹きて之を後に傳ふべきもの、然れども吾人は之に紹くと共に之を前に増して、之を後に増すものに補けざる可らず。吾人は現在に於けるの我として先哲の思想を尋究すると共に、更に之を自己の思想中に鎔化渾融して、先哲の舊蹟以外に一步を擴めざる可らず。而して夫の歴史的研究を唯一の方法として、獨創を蔑するの論者は、之を做すとの、單に歴史の蹟を尋ねて即ち得べしとせるが如きも、然れども若し自己中に一個獨創の見地既に定まるにわらずば、古今東西の思想を鎔化する事だも亦能はざるを知らずや。自己ある活火あるが故に、其中に鎔融渾化する思想もあれ、獨創なる模型あるが故に、其鎔融したる思想が新模型にも鑄成る、なれ。我に獨創の見地なくして、如何に東西古今の思想を尋究すればとて、そは唯火なきに鎔融せんとするもののみ、型なきに鑄

んとするもののみ。爐邊徒に鐵屑銅片の礫々として横はれるを見ん而已。論者にして歴史的研究そのものが方法にしてまた目的たりといはば知らず、吾人は歴史的發展に一分の力を添ふべきものなりとせば、吾人は獨創の見地を蔑すると論者の如くにして可なる乎。彼等一輩の徒は私に今日を以て思想早洩の時かりと信するものに似たり。果して然る乎、果して然る乎、何ぞ彼等の怯懦なる何ぞ無氣力なる、試みずして之を能はずといふ、嗚呼これ能はざるに非ず、爲さざるものに非ずや。此の如くにしてやまば讀破萬卷徒に術識の用に供するに足るあるのみ、剪裁の勞に甘むるあるのみ。抑々吾人が古今の思想に千載の下猶凜々たる生氣ありといふ者は、我既に定見あり、我が心彼の心と會し、渙然として會釋する所あればなり。我に定見なし、昔人の心如何に凜然たりといふとも、何の所にか悟入あらむ、何の所にか會釋あらむ、此の如くむば昔人の思想は死せんのみ。此の如くにして書を讀まば、徒に文字の糝糠を讀むのみ、言句の皮相を觀るのみ、何の所にか所謂凜然の生氣あらむや。且更に一步を進めて之を論せん乎、所謂歴史的發展なるものは、無意識の發達のみ、時勢は默移す、哲人その時と勢とに化せらる、固より其識る所にわらず。彼は默移の時勢に暗應して其思想を出だす、その思想を出さず、彼に在ては即ち其獨創たるのみ、唯後よりして之

文學
213

を觀る、其時勢に暗應せるが故に、之を稱して歴史的發達をなせりといふのみ。彼の心豈に始よりその我が爲す所の所謂歴史的發達なるものたるを知らむや、彼は唯其自ら信じ自ら考ふる所をいひしのみ。嗚呼歴史的的研究なくば歴史的發達をかるべき乎、獨創なくば極力の研究も所謂發達の上に幾何の價值ある乎。嗚呼滔々たる今日の學風、歴史的的研究を重むずるは可なり、而して之が爲めに獨創の立見を排するに至ては、學風の弊も極まれりといふべし。哲學史は哲學に非ざるべく、文學史は文學に非ざるべし、美術史を研究して畫工たり、彫刻者たらんと欲するものあらば如何に。嗚呼彼の論者の如きものは本を忘れたるなり。獨創は本なり、歴史的的研究は末のみ。本を忘れて末に驚す、吾人は學界の爲めに長大息せざるを得ざるなり。(二十八年十一月稿)

小兒と詩人

小兒天上の月を指して相語る、曰く兎餅を擣くと。彼れまた地上の莖花を指して相語る、曰く春帝の先驅なりと。彼は無心にしていふなり、無意にして、語るなり、そのいふ所、理あるなきなり、いふ時理あるなきなり、感せる所を感せるまゝにいふのみ。而かも其語は堂々たる詩人の言のみ、彼の詩人が千推萬敲左思右索僅に獲べき好句を

、無心に、無意に、唐突に、咄嗟に、其吻頭より語り出だすなり。彼等何の能何の才ありて乎然る。彼等何の才かあらむ、何の能かあらむ、能なく才なきが故に乃ち然るのみ。彼等の腦中一點の理窟なく、胸中一毫の智巧なし、故に物に對して其間に私意を交へず、私心を挾まず、其感するまゝ、其興するまゝに之をいふ。既に理窟なし智巧なし、故にそのいふ所、自からにして純情的なり、美感的なり。彼等自ら知らずといへども彼等は詩人たるなり、詩を語れるなり。たゞに語れるのみならむや、彼等の一舉一動悉く是れ詩なり、其一點の理窟なく、一毫の智巧なき所、只に言に發して詩たるのみならむや、其舉動に現はれて詩たるなり、満肚子よれ詩なり、渾身兒これ詩なり、彼等は詩人の純なるものなり。所謂詩才なるものは此小兒の心を存し得たるをいふのみ。故にいふをさかすや、『詩に別才あり、書に關するに非ず、詩に別趣あり、理に關するにあらず、』と。書によりて琢磨し、理によりて發明するものこれ理窟のみ、智巧のみ、智巧にあらず、理窟にあらず、詩人の心はたゞ彼の小兒の心を存するを要す。詩人の才は即ち小兒の才なり、理窟なきの才あり、智巧なきの才あり、即ち才なきの才あり、書に關せず、理に關せず。否寧ろ書や、理や、此別才を晦まして徑路に誘ふ。詩は智巧を離れ、理窟を離れ、透徹玲瓏。かの嚴儀が所謂、空中の音、相中の色、水

文學
D13

中の月、鏡中の象の如くならざる可らず。寄語す當世の詩人、願くは小兒の昔に復れ、極玲瓏極圓麗、一毫の運意なく、一點の智巧なき小兒一寸の心を存せよと。名を好み利を好み、擾々たる世途に彷徨するは、詩人たるの途に非ざるなり。(廿八年十二月稿)

寫實と理想

畫者の虎を寫生するものあり、一毛の微、一線の細、猶之を苟くもせず、寫し畢へて其形酷だ虎に肖たるなり、肖たるとは則ち肖たり、而かも其虎終に死したる虎に過ぎざるのみ。或は之れを危巖の下に居き、或は之に點するに半輪の寒月を以てし、其鬚を豎たしめ、其眼を瞋らしめ、其背毛を逆立せしめ、而る後虎に生氣あり、畫に活趣あり、猛虎一聲月に哮て山震ひ樹撼くの景、即ち躍々として畫幀の外に動く。此の如くにして初めて良工の苦心をみるべく、妙畫の靈活をみるべきのみ。もしこれに反して寫實に止まり、寫生にしてやましめば、其形似はあらむ。其酷肖はあらむ、而かも其形似其酷肖遂に猶寫真に輸すべきのみ。畫の寫真の上高く一地步を占むる所以の者は、其形似を描くと共に、其神を傳ふればなり。虎兒の相好を寫し其毛鬚を寫し其斑文を寫すと共に、猛獐なる虎の神を紙幅に活躍せしめざる可らず。之を活躍せしめんが爲

めには、唯眞を寫し生を寫して足らず、之に配するに或は寒空半輪の月を以てし、或は寒巖疎竹を以てす。要は寫眞を其自描として、之に理想の生彩を加へざる可らず。寫眞は形を寫す所以なり、理想は神を傳ふる所以なり。實を寫さずば豚狗は以て猛虎たり難し、實を寫して虎たりと雖も、神を傳へずば其虎は則ち死虎のみ。嘗に畫に於て然るのみならず、吾人は小説に於てまた其の然るをみる。寫實もとより可なり、然れども寫實にして小説の能事畢れりとせば則ち不可。作家は寫實を材として理想の樓閣を築かざる可らず。寫實をとり來て之を理想の猛火中に鎔化せざる可らず。理想は摸型なり、實際を鎔化して新たに鑄る。理想は建築者なり、實際を材として樓閣を造る。言ふ莫れ沒理想と。沒理想とは理想なきにあらざるなり、理想の最大なるなり、最大なり故にみる可らざるなり。理想は鹽素なり、よく海に入るの汚穢を純化す。理想は化金藥なり、一たびそ、げば實際の鐵鑛悉く化して金となる。理想は明礬なり、一たび投すれば渣滓悉く沈んで實際の濁水を清徹ならしむ。世上のあらゆる實際は、作家の理想中に入りて初めて純化し美化す、純化し美化す、始めて之を其作に用ゆべし。所謂大作家とは大理想を有する者なり、實際の汚濁を純化し美化するの化力強きものあり。かの寫實を以て小説の能事畢れりとするもの、如きは、死虎を描くもののみ。

文學
D13

豈にいふに足らむや。(二十八年十二月稿)

樂天と厭世

鴈雛々として鳴く、鴈それ悲しむ乎。鶯間關として語る、鶯それ樂しむ乎。樂歟、悲歟、吾鳥にわらず、何ぞ鳥の心を知らむや。樂しむものは樂歟、悲しむものは非樂、吾鳥の事に關はらず、其悲と樂と吾に於て何かあらむや。而して人また悲と樂とあるなり彼之を語りて我之をさく、我彼にわらずといへども我よく彼の心を知る。その樂しむものは是にして悲しむものは非なる歟、之を非といひ、之を是といふも、我は則ち彼の心にわらず、非なるもその悲しむを如何、是なるも樂む能はざるを如何せんや。悲と樂とは情なり、理は枉ぐべし、情は變ず可らず。悲しむも之を奈何せん、樂しむも之を奈何せん。怪なる哉近時の事をいふ者、樂天は是にして厭世は非なりと。厭世果して非にして樂天果して是なる歟。而かも世相を哀觀せるもの我得て之を如何かすべき、人生を樂觀せる者我得て之を如何かすべき。是なりといふも哀觀せるものは樂觀する能はず、非なりといふも樂觀するものは哀觀する能はず。是歟、非歟、非歟、是歟、是なるも非なるも、樂天も其情なり、厭世も其情なり、之を奈何せんや、之を奈何せんや。

嶺 雲 搖 曳

樂 天 と 厭 世

況むや、其是と非と、非と是と、終に定論すべきなきをや。何が故に厭世を非といふ乎、樂天を是といふ乎。哀觀するものは哀觀を是とし、樂觀するものは樂觀を是といはむのみ。彼の非とする所は此の是とする所、此の非とする所は彼の是とする所、果して何れを是といひ、何れを非といはむ歟。彼に在ては彼是なり、此に在ては此是なり、此の是と彼の是と、何れを是とし何れを是にわらずといはむや。是にわらずといふと雖も、彼に在て是ならば之を奈何せん、是なりといふと雖も、彼に在て非なりとせば之を奈何せん。彼も亦一是非、此も亦一是非、誰れか其何れか是にして何れか非なるを知らむや。知れりといふと雖ども、而かも彼も亦是とする所を是とし、非とする所を非とするに過ぎざるのみ。是非紛々何の定まる所かあらむや。何者か敢て哀觀を非とし、樂觀を是とする。樂觀は健全にして哀觀は病的なりといふ歟。悲と樂と等しく是れ情なり、何れを健とし何れを病とせむ、樂しむものよりせば哀むもの病か、而かも哀むものよりせば、何ぞまた樂の病たらざるを知らむや。哀觀するを怯といふ乎、然らば木石の頑々たる之を勇といはむ乎。彼の樂觀するもの強て強を怯へる乎、頼む所ある乎、然らずむば痴呆か。痴呆は感ずる所なしといふに足らず。感ずる所あるもの猶樂觀すといふ、彼は宗教の慰藉を頼むのみ、然らずんば情を矯めて故らに樂觀を怯

ふて強しとするのみ。粧へるものもと哀しめるあり、頼む所あるもの畢竟また哀めるのみ、哀めるに非ずんば安心といひ、立命といふ畢竟何の用ぞ。唯哀や即ち苦なり、故に頼む所により、粧ふ所により、姑く其苦を避け、強て勇に誇る而已。頼む所を離れ、矯むる所を去て、而して世相を直覺し、人生を直感すれば、人生の倏忽、浮世の茫々、哀観する所なくして得むや、かの詩人や多く情に強し、理によりて制する能はず、意によりて矯むる能はず、彼等は多く情のまゝに動く、彼等に厭世の者多き豈に怪しむに足らむや。宗教の安心により哲理の立命により僅に繃縫せる樂天の粉箔を剥落し盡くさば、天下痴呆者と頑々冷々感なく情なき木石一輩の徒を除きて、誰れか哀観せざるものぞ。ア、彼の詩人の厭世を非とするの輩よ、何が故に樂天を是とし厭世を非とするぞ。哀観するを病的なりといふ、樂觀するを健全なりといふぞ。諺々煦々樂しむことは、汝が樂しむに任ず。敢て隣人の疝痛を自ら病むで、他を是非するを休めよ。(二十八年十二月稿)

讀 書

讀書は智識の食あり。人は肉體に於て飯肉を要すると共に、精神に於て讀書を要す。

膾羹は有形の血となりて身體の營養をなせば、讀書は無形の血となりて精神を營養す。肉に食を缺く可からざるが如く、精神も亦食を要す、飯肉をやむるとあらば胃飢ぬん。讀書を能めば神餒ぬん。消化すべきものなりと雖も、胃は空なるに作用せず。思索すべきものなりと雖も、精神は空なるに知識を造り出す能はず。飯肉の材料を給して胃は血と肉とを作り、精神は讀書に材料を得て知識を作る。人は見聞によるの外智識の資給を讀書に仰がざるを得ず、而して見聞の境能く戸牖の外に到り難しとすれば、人間の知識は其大半を擧げて之を讀書に歸せざるを得ず。それ主として文士に要する所は知識の外に出でず、彼等は想像すといふ、而かも想像の羽翮を以てするも、猶知識の外に逸し出づる能はず、所謂想像に豊富なりとは豊富なる知識を材として組成せられたるに外ならむや。且夫れ文士にして書を讀まざれば、其思想偏狭に失す。そもく人は多く一國の國粹中に養成さる、國粹もとより可、然れども文士の廣く材をもとめんとするや他國の粹亦味はざる可からず、これもとより讀書によらざれば得可からざる所。然れども讀書に法あり。讀書は活讀を要す、死讀を願はず。何をか活讀といひ、何をか死讀といふ。章を尋ね句を摘み、文字の末に拘泥するもの豈に死讀にあらずや。眼直ちに著者真意の存する所を看破し、文字章句の外に於て能く其真意に直參するも

文學
D13
1

の、豈に活讀にはあらずや。活讀の者は眞意に參し、死讀の者は文字に拘す。已に文字に拘す、萬卷の書を讀破して贏け得る所心力を耗盡するの事あるのみ。眞意に參するものは、一卷の書を讀めば即ち一卷の知識を添へ得。活讀のもの讀むとの少きを憂へず、死讀のもの偏に讀むとの多きを憂ふ。死讀のもの讀むと多しと雖も知識に一毫の重みを加へず、讀まざるの勝れるには若かず。活讀のもの讀むと少しとも常に知識に培養す、少しと雖も何ぞ憂へむ。且つや多讀は常に人をして皮相術識のものたらしむ。それ汗牛充棟天下書籍の多き、徧く之を讀まんと難し、而して讀むと多からむを望む、勢讀むとの速なるを要せざるを得ず、眼に讀みて心に讀まず、我心古人の心と默契してその讀み得たる所を以て我知識に融化する能はず。我思想に幾分の大を添ふる能はずして、従てその讀み得たる所は唯に術識の具として拔萃せられ、臚列せられて、典故とせられ憑據とせらるゝに過ぎざるのみ。吾人は多讀を願はず、唯精讀を欲す、讀む所唯哲人不朽の大作にて則ち足る、潜思咀嚼一言を味ひ一句を味ふ。一言にして一言の味あり、一句にして一句の味あり、反覆玩味これと默契しこれと融化す、此時此際、其讀む所、既に古人のものたらずして我たり。印せられたるの死文字に非ずして我の活思想たり。古人舊套の語も、一たび吾腦中に入れば、一點化吾創見となりて流れ來りて便ち鮮研を覺ゆ。嗚呼讀書を以て術識の具とするは今日の學弊なり、死讀は迂儒のこと、もといふに足らずと雖も、猶書籍に忠なり。術識を以て博士の名號を繋ぐとするものの如きに至ては書籍を私せんとするの徒のみ。嗚呼天下讀書の子、書を讀まば須らく活讀せよ、精讀せよ、讀書は名を釣るの爲めにも非ず、また字義を覺ゆる爲にもあらず。讀書は我を大にするが爲めのみ。(二十八年十月稿)

行 游

昔は大史公徧ねく名山大澤の間に周遊して而して史記の著あり、故に史記の文或は汪洋或は崢嶸、意の到る所筆も亦到る、曲折紆餘備さに其變を窮む。山川の風光のよく人の高情を暢べ、逸興を振ふ、信にはかる可からざるものあり。洪濤瀾汗として萬里際涯なし、目を窮むれば空水一碧、水か空か、空か水か、髣髴として辨す可からず、既にして緋を纈りたる夕陽忽焉として水に入れば、淡靄漸く岸邊の柳を抹して、漁家の燈光點々螢に似たり。東方漸く明く、一輪の玉蟾海上に躍れば、銀屑水面に碎けて激々澌々、此時高樓の上髪を散じて浩歌すれば心氣快暢。或は亦雲を躡むで萬丈の峭嶒に上る、上りて嶺上の寺觀を尋ねて泊す、月黒く風冷かに空山聞として唯溪聲の淙

々あるのみ。試みに空を仰げば天を去る尺五、長嘯兩三聲すれば満天の星斗爛々として衣袖に落ちんとす、倏然として神澄み心定まる、身は既にこれ火食のものに非ず。嗚呼々々自然の人を靈化する信に此の如し。由來自然は一大文章、上に日月星辰あり、下に山川花木あり、風雲露霞、燦として章を成す、而かも人世俗累多く仙縁了し難し、親しく造化の美に接すること得可からず。唯行游の事あり、人をして暫く塵寰より脱して自然に放浪するを得せしむ。それ美は人を靈化す、美に感じ、美にうたるゝの時、吾人の胸中豈に一點の俗情を容れんや、高潔純清渾身是れ美、主我を忘了して全く天地の美中に融化し去らる、此時言ふに言なく、語るに語なし。季吟が芳野に遊びて唯『これはこれほど計り』といひ、芭蕉が松島に唯『松島や松島や』といひ、樂翁が獨り月に對して、『我身さへ月の中なる心地す』といひ、バイロンは『余は既に我としてあらず、我は既に景中の一部となる』といひし、何れか此の時の境界にあらざらむ。而かも此の如しと雖も、其美は深く我腦中に印せられて長く忘るゝ能はず。興に觸るれば忽然として當日の光景を眼前に現し來り、戛然聲を出して詩となる、天外より落つるものの如く然り、之を神來とはいふ。詩人美を歌はむとす、須らく悠々たる行遊を要す。芭蕉が東海道の一度もせぬ人は俳諧を爲し得ずといひしも、まことに此意にあら

ずや。今の文士徒らに名利に汲々するを休めて、俗情を擲却すること一日、試みに山青く水白きの邊に遊べ、而して歸來毫をかむで硯に對せよ、煙霞の筆頭に湧き來るを覺ゆん。(二十八年十月稿)

名を成し易き弊

古人嘗て人間の三不幸を數へて、少年にして及第するを以て其一に入れたりき。年にして名を爲すは驕慢の心を長ぜしむる所以なり。驕慢の心既に生ず進歩茲に止まらむ。蓋し人自尊の心なきはあらず、既に自尊の心あり、而して他和して而して之を揚げばこれ其自尊の心を成さしむるなり。自尊の心既に成る、慢心從て生ず、慢心は安心を致し、安心は怠慢を誘ふ。古來より神童必ずしも大人たらざる所以のものは實に此に存す。天才と雖も飽まで之を鞭撻し、之を誘導し、激勵せしめ、感奮せしめ、始めて天才の天才たる所以を成すべきのみ。今や世間、名を爲し易きこと文士より甚だしきはなし、朝に一文を草すれば夕に所謂大家となる。世上の愚衆なるや眞に實力を見る能はずして之を買被る。此の如くにして文士の眞忽ちに天に朝し、兩肩揚々として風を切る。世上よりは珍重せられ、自らも得々す、嗚呼文士の名を成し易きこと此

の如し。是に於て乎、世上幾多の青年、一攫功名を夢想しつゝ、筆を擲りて無病呻吟、一篇の新體詩を作り出し、一篇の小説を編み來りて、會々文學雜誌の掲録を得るあり、乃公得意假號に頭を惱まし、落款に意匠を凝らし、天晴自稱文學者となり澄し、此の如くにして幾多有望の青年は、自己の伎倆、自己の使命の何の所に存するを忘れて、徒に文壇の虚名を攫まんとし、その器量以外に手を出したるが爲め、失敗し失望したるもの果して幾何ぞ。嗚呼有望の青年をして、方途を誤らしむるものは文壇の名を成し易きの弊なり。而して今日文壇の名を成し易きは、猶今日我國文運の幼稚なるを證するものにして、讀書界猶真に玉石を鑑識するの炬眼なき所以なり。玉石混淆故に庸劣のもの、猶真の天才者に伍して其地歩を保つを僥倖す。讀書界既に低し、名を成し易し、庸劣のもの競ひ進んで、天才のものも亦其才を慢して安んじ易し。此の如くにして所謂大文學者なるもの何の時にか出でんや。大文學者は出づるに時なくして、却て有爲の青年を驅て自己の伎倆、自己の器量とを忘れて、徒らに文壇の虚名に狂奔せしむ。豈に寧ろ國家の大患にあらざらむや。人各、其材を異にす、其材の異なるに従て其業を異にすべし。而して少年自ら其材のある所を知らず、客氣徒らに世の流行に伴ふて文壇に僥倖せんとし、幾多國家無用の廢材を造り出す。嗚呼今日文士名を成し易

きの弊は、唯に人の子たるものを賊するのみならず、更にまた國家百年の大計に毒するものなり。今日の勢にして變ずるなくむば、或は有識者をして文學の害毒を説くに至らしめんもまた知る可からず。綢繆今日にあり。嗚呼吾人は今日如何にして吾國讀書界の鑑識を高うせむや。文士をして世に媚ふるなく、世を從へしめよ、世に造らるゝなく、世を造らしめよ。回顧すれば十五六年前、嘗て政界の名をなし易きか爲めに、世上の青年をして政治に狂奔せしめ、而して其廢材今日の壯士なるものとなれり、文界廢材の前途果して何者とかならむ、前途を思へば關心に禁へず。(二十九年一月稿)

國民詩人

逆境に處るの人にして始めて眞摯の語あり、國逆運に遭遇するの時に於て、始めて鬱勃たる國民の聲を聞き得べし。人順境にあれば則ち輕佻に陥り易し、故に其言肺腑より出でず、國順運にあれば、國民皆花鳥風月に浮かれて、其詩熱情を少く。我先づ涙を灑いで以て人を泣かしむべし、眞摯の語に非ざれば人を感せしむる能はざるが如く、熱情より出でたる國民の聲に非ざれば、以て高壯なる國民的の詩を爲す能はじ。我の支那と事あるや、我既に必勝を期して彼に對す、宜なり、一大詩人の出で、國民の叫

びたらざりしや。吾人は信ず、日本に國民大詩人出で來るの日は蓋し我國が或一大優等國と戰を開きて逆運に際會するの時にあるべしと。四千萬國民の血燃ゆる情熱し、神氣激昂抑ゆるを欲して抑ゆる能はず、多情多感の士あり此間に出で、四千萬人の熱情を其一身に鍾め、四千萬人の恨悶をその一枝の筆によせ、切齒涙を揮て絶叫す、此時に於て始めて所謂國民詩人なるものを見るべきのみ、彼の征清の事の如きは未だ以て國民鬱勃の情を歌ふの大詩人を出すに足らず。(二十八年三月稿)

日本文學の短所

日本文學の長所は、その輕妙なるにあり、その和樂なるにあり、而してその短所も、亦こゝにあり。その穩和ある風候と、その優美ある山水とは、其間に住するの生靈を化して、優美なる、穩和なるものとはなしぬ。況むや、三千載を鎖國の桃源中に眠食したるより、吹きすさぶ浮世の荒き風には、當りたるもなきお坊ちゃん育ちとなりて、苦艱と辛酸といふものは、嘗て知るとなかりき。隨て悲絶痛絶の觀念を養成するに所なく、また悲感の快感を曉ると能はず。故に、其間に發達せし文學なるものに、悲痛の分子少なきは怪しむに足らず。日本文學中に眞の悲劇なるものなきも亦之が爲

めにして、從來の小説劇曲中、心中物若干を除きては、大破裂を以て終りたるもの果して幾何かある。哭泣なきにわらず、而かもその泣くは兒童の泣くと等しく、常に嘻々歡聲のうちに其局を結ばざるもの殆ど無し。嗚呼輕妙と和樂とは、日本文學の長所なりと雖も、長所を長所として墨守せば、則ち短所たらしむ。それ吾民族は由來同化の力に富む、何ぞ速にかの大陸的偉大の理想と、西洋文學深刻の筆意とを同化して、更に日本文學の光輝を發揮せざる。(二十八年四月稿)

悲劇の快感

悲劇の快感は、未だ世海の風浪に觸れしとなき孩兒の解する所に非らず、人生崎嶇の行路難中に漂泊せしものにして始めてこれ有り。人生の辛酸を味ひしものにして始めて辛酸の眞味を知る。他の辛酸に艱むものを見ては、同情の感油然として湧き出づ。同情なるものは、人間がその倫理的理想に、一步を近け得たりと感ずる、満足の一快感なり。故に悲劇の快感を味ふを得るものは、唯倫理的理想の多少發達し、且多少世上の苦酸を嘗めたるものたらざれば能はず。故に之を感ずるものは、寧ろ厭世的人に多くして、樂世の人はその慘澹に堪へざるものあらむ。日本文學が喜劇的和樂文學

に富みて、悲劇的の深刻に於ては缺くる所あるも、蓋し亦此理による。(二十八年四月稿)

西歐文學の趣味

吾人は、一にも、二にも、歐風を崇拜する西洋心醉者に非らず、然れども短所は短所なり、長所は長所なり。西歐の文學は、その觀察の精緻なる、理想の雄大なる、結構の宏壯なる、その痛刻悲惋の筆意とに於て、たしかに吾に一籌を贏れり。それ發達なるものは、他の短を捨て、その長を取り、これを我が長と渾融せしむるの上に於てあり。吾人は我國の趣味に於いて缺くるの所に、彼の長を取り來りて、之を補はざる可からず。將來の文學は、今日のまゝにして安すべきに非らず、奮へよや青年文學者。(二十八年四月稿)

ヒューマニター

社會の表面をのみ見れば、花は咲き月は麗かに朱門の内肥馬高く嘶き、高樓の上絃歌湧く、人生の悲慘なるもの、苦痛なるもの、此輩は知らず。然れども更に翻て、會半社

面の暗黒に見よ。寒夜屋なくして霜牙ゆる原頭に單衣にて眠るものあり。三日食を得ず、兒は涸れたる乳房に飢を泣くの一家あり。病めども醫を得ず、藥を得ず、而して職に離れて賃せる屋を追はるゝものあり。天下彼等を唾棄し、擯斥して顧みざるあり。彼等の此境遇に陥れる、或は自らの罪にして憐むを要せざるものあらむ。然れども彼等の大半は、優勝劣敗の社會の大勢に敗れて然るに至りたるもの、彼等の所謂罪惡なるものを犯すに至るは寧ろ然るに至りて後にこれあるなり。嗚呼文明といふ莫れ、開化といふ莫れ。電氣燈は徹宵夜業の臉重く頭痛むの人を照らさす。葡萄の美酒、血紅般々朱門の膳羞に上れども、貧窟裡衰死の人の血を補はず。寧ろ文明といひ、開化といひ、細民の職を奪うて之を機械に與へて、彼等をして飢饉で死せしむるのみ。人間悲慘なるもの多しと雖も、試みに貧窟に入りて、かの目光うるみ鬚髮蓬々、顔は土灰の如く而かも煤色を帯び、四肢は水腫して蒼白、滿身の塵垢を蔽ふに幾片の襤褸を以てしたるものを見れば、誰れか慄然として戦き、慄然としておそれざらんや。嗚呼今の小説家はよく悲慘を描くに誇るものなり、何ぞ更に進んで此悲慘の極を描かざるや。嗚呼今の世界正理ありといふ莫れ、公道ありといふ莫れ、強は弱を凌ぎ、富は貧を凌ぐ今猶昔の如きなり。代議の政躰といふ莫れ、猶富者强者の寡人の政治のみ。公平を

る判官わりといふ莫れ、彼等は猶其枉屈を訴ふべき地なきに非らずや。世人皆暖かく衣、飽くまで食ふ。酒樓の上、絃歌絶ゆることなく、媚を賣るの佳人錦繡を襲ぬ。而かも寒夜路側兒女にたすけられ、破琴を弾じて哀を乞ふ替たる女には、人飽くまでも其彈奏を貪りさいて、而も一文錢をも投するなくして過ぎ去る。嗚呼彼等悲惨の生涯誰れに頼て乎其不平を訴へんや、彼等の多くは無文訴ふるに筆を以てする能はず、懇ふるに舌を以てする能はず。彼等は滿腔鬱勃の不滿を吞て地下に入るなり。法律ありと雖も以て其枉屈を伸べず、倫理なるものありと雖も、惠を彼等の上に垂れず。ア、ア、彼等に代りて彼等の筆となり、彼等の舌となり、絶叫絶喚、上は九天に懇へ下は九地に訴へて、彼等が爲めに其鬱塞を開かしむるもの文學者に非ずして將た誰ぞや。嗚呼今の文學者マ、事の如き戀愛に筆を勞するをやめて此活境を捉へ來れ、此活相を捉へ來れ、捉へ來りて之に滿腔の心血と、萬斛の熱涙を濺いで、彼等が爲に盡し彼等が爲に泣けよ。詩人の題目は必ずしも花鳥風月にあらじ。作家の材料常に必ずしも戀愛のみにあらじ。誰か之をなすものぞ、誰か之をなすものぞ。(廿九年一月稿)

紛々たる所謂文學者を如何かすべき

昔者紀の貫之歌の徳を稱して、目に見ぬ鬼神をも泣せつべしといへり。文學あるもの、徳、蓋し隠にして大なるものあらん。吾人は敢て文學者なるものの任の貴うして重きものたるを疑はず。然れどもこれ唯大詩人、大作家、大詞人に就て之をいふべきのみ。今日の紛々たる所謂文學者の如き、斗筭碌々の徒。彼等は紙を食て生を繋く蠹魚のみ。墨を噴て身を保つ烏賊のみ。彼等は蝸牛の涎に似たる沒意義の文字をつらねて、自ら得たりとなす。吾日本の穀潰のみ。彼等の爲す所、嘗に當世に益なきのみならず、寧ろ害あるのみ。吾人は文學なるものが必ずしも實用的ならざるを知る。文學なるもの、心靈の飢をいやす糧にして、形而下上に生産的ならざる、よく之を知る。然れども、今の所謂文學者の爲す所は、唯に形而下上に不生産的なるのみならず。また心靈上にも何の資をも煩たざるなり。彼等は唯文學なるものの、肉体的の劬勞なくして、且つ早く名をなし易きを見て、これに就きしのみ。彼等は文學を道樂とせんとする懶骨のみ。彼等は文學なるものの、別に人間に對する一大使命あることを知らず。彼等は唯文學を玩はんとす。故に彼等豈に其富と、名とを擧げて、詩神に殉するの大決心あらんや。彼等は唯一時の名を僥倖し、苟且の安逸を偷まんと欲して、所謂文學者となれりしのみ。書を名山に藏して千歳の知己を待つ、彼等豈に之を能くせんや。

一瓢一箪の飲食に安んじて、身を文に委ぬる、彼等豈に之を能くせんや。彼等は一時の喝采に意を注ぐのみ、幾金の潤筆料に心を奪はるゝのみ。故に書肆の鼻息を窺ひ、世好の趨向を知らんとするに急。彼等の爲す所これのみ。故に彼等の心に操守なく、風潮を趁うて走る。彼等は詩の爲めに詩を作らず、書肆の爲めに作り、世好の爲めに作る。看よや昨年來悲慘小説、青樓小説の一時に行はるゝや、彼等は競うて之に騁せて、一も二も皆強て其境を狹斜にかり、局を悲慘に結ばんとせり。立案の牽強、結構の不自然は寧ろ彼等の顧みる所に非ずして、唯世評に懸念し、名聲に痛心するのみ。彼等は私の爲に文學者たるあり。詩を私にせんとする者なり。詩神を蔑にせんとする者也。此の如き所謂文學者なる者が美に向つて何の貢獻する所ぞ詩神に向つて何の貢獻する所ぞ。此の如き文學者は僞文學者なり、此の如き者の胸に生れたる文學は僞文學なり。然るに文學者を以て自ら居り、自ら高く世俗に標置せんとす。寧ろ憫笑に堪へんや。天下何の世何の時か文學を少くべけんや。然れども僞文學、僞文學者は寧ろ亡きの勝れるに如かず。國家當に多事、今日は元祿の當時を追うて、優遊緩舞すべきの日にあらず。王朝の古を慕うて、櫻かざして日を送るべきにもあらず。僞文學者よ去れ。今の日本は汝の如き穀潰の謔言に耳をかすの違あるの時にあらず。汝の如き懶骨に玩はるゝの翳日月

あるの時にあらず。僞文學者よ退け。僞文學者よ地を拂へよ。(二十九年十二月稿)

西 鶴

混々として盡きざると千斛の泉の如き奇想、忽ちにして激して飛雪を噴き、忽にして漚して靜淵鬚眉を鑑むべく、忽にして急瀨となり、忽ちにして懸瀑となり、變幻自在端倪す可からず、捕捉す可からず、其文は則ち遒勁飄逸天馬の如く、飄雲の如く、その當時の言語をそのまゝに用ゐたる爲めに乎、語格上に於ては或は缺くる所あき非ずと雖も、其詞の深刻人を動かす所も實にこれあるに由るとすれば、また深く尤むるに足らず、實に西鶴は元祿の一奇才ある哉。彼が想を卑猥ありといふ乎、之をいふものは唯に西鶴が文をのみ讀むもの、更に深くその言外の意に到らざるもの、其外を見て未だ其内を察せず、以て共に西鶴を語るに足らず。彼は哄然として大噓す、然れども、知らずや彼が笑は常に幾行の悲涙を以て終るを。彼は世を嘲り人を罵る、然れども、知らずやその之を嘲り之を罵るは、更に大に之を愛し之を憂ふればなり。彼は冷々として世表に立つ者に非ず、寧ろ多情多恨大に泣き大に感ずる熱血の人なり。彼れ口を開けば即ち色と戀とをいふ、然れども、其色は是空の色なり、その戀や無常の戀

なり。彼は色を好めといはず、色は常に是空なりと説く。彼は戀せよといはず、戀は常に無常なりと説く。彼は人世のあらゆる快樂をも味ひ、あらゆる辛酸をも嘗めぬ。味ひ盡し嘗め盡して彼は人情の内奥に達せり。彼は人生の秘密に徹せり。彼は坐禪黙思によれるにもあらず、修道精進によれるにもあらず、彼は唯實歷の力によりて、萬卷の讀書、千日の工夫を以て破り得ざる關門を透過して、道念ならぬ道念を得たり。彼は迷へり、更に迷に迷へり、更に迷の迷に迷へり、飽くまでも飽くまでも迷ひ迷ひて、百尺竿頭一步を轉ずる所、遽然として彼は覺めたり、豁然として彼は悟りぬ、大迷の後に大悟あり、大惑の後に大覺あり、覺めては昨夜の夢のさま可笑かるべく、悟りては疇昔の迷の所作如何に笑止なるべき、悟りて大笑し、覺めて大喝す、覺めて後の大喝は涙あるの大喝なり、悟りて後の大笑は意味あるの大笑なり。其皮売の刺棘を以て蜜の如き甘さある栗實をすつ可からず。西鶴の皮相を以て西鶴を斷するものは、真に西鶴の知己といふ可からず。つぶさに人世の委曲を経盡して、人世の外に出で、更に再び人世の委曲に交はれる者は西鶴なり、水凍りて氷となれども、氷の更に水より冷たさを知らば、以て西鶴の眞面目を知るに幾し。彼の憤々たる近眼者流は、以て西鶴が道念を見るに足らむや、道念を視る能はずして徒らに其言語文字を見るの。み

故に猥褻なり野卑なりとして一向に之を擯斥して、更に其眞意の那邊にあるを辨せず、惑むべき哉。嗚呼胸中一點卑猥の想あるもの、彼等は以て真に元祿文學の趣味を解する能はじ。あらゆる俗世の塵懷を其頭腦より驅り去り、無心の行雲を觀すること更に十年、虚氣平心高く其神を天外に游ばしむるに非ざるよりは、以て此等の書の妙を語るに足らず。咄。(二十八年六月稿)

小説と社會の隱微

近時風俗の壞敗豈にいふに恐びんや、奢侈淫靡其極に達し、賭博公に行はれて、花牌を弄せざるものは所謂紳士に似ずとし、附托請謁盛に行はれて白晝權門に出入して愧ぢとせず。學者にして僧侶と女を争ふものあり、高利貸をなすものあり、書肆と結托して利を圖るものあり。文學者にして財を騙るものあり、強談を以て金を奪ふものあり、賭博を以て其片商賣とするものあり。劇評家は黄金によりて其評を上下し、新聞記者は好惡によりて其筆を二三にす。色を漁するの僧徒あり、利を争ふの宣教師あり、神道の名の下に淫祠の人心を盡はすあり。社會の裏面觀去り觀來れば、人をして嘔吐三石ならしめんとす。嗚呼々々人心の萎靡腐敗何ぞ怪しむに足らむや、此時に於て苟

も志ある者の眼が社會の裏面に注がれたる亦怪しむに足らむや、見よ二三年來新聞紙が如何に社會裏面の隱微を發かんとするに勉めたるかを。(假令其間これによりてまた利を貪らむとするもの二三なきにしもあらざりしと雖も)而して頃日に至りて吾人は小説界に於て亦此傾向あるを認む、『都』に於ける欠伸が『女喰ひ』、『四の緒』に於ける眉山が『左褻』、『國民之友』の夏期附録に於ける眉山が『うらおもて』、『緑雨』が『靚面』、『文藝俱樂部』に於ける乙羽が『人鬼』等、看來れば何れも社會裏面の惡徳に對する嫌惡の叫喚の聲にあらざらむや。かのトルストイがクレエツェロワの一曲痛罵骨を刺す所、吾人をして忸怩寧ろ特に日本國民の爲めにまか云ひしに非ずやの感あらしむ。嗚命暴露せよ、暴露せよ、益、社會の裏面を暴露せよ、所謂社會の惡徳は既に法律以外に逸す、これを責め、これを呵し、これを嘲り、之を罵り、翻然として自ら悔い自ら悔めしむるものは豈に天下操觚者の任に非ずや。然れども啻に其惡を發き、其醜を露すのみを以て能事畢れりといふ可からず、人心染み易し、唯に其醜惡を發露するのみにしてやまば、寧ろ天下の人を胥めて醜惡の淵に曳入るるものなり。吾人は筆底血あり涙あり、外に笑ふて内に泣き、外に憤りて内に悲む熱情の文士に須つと多し。吾人は天下の文士が大に社會の罪惡を暴露し來ると共に、更に大に其同情の涙を揮て人道の爲めに泣

き、道義の爲めに憤り、絶叫大呼して警世の曉鐘となり、懲惡の震雷たらんことを望む。然れども吾人は敢て美文を以て人を教へよといはず、唯自ら悔いしめよといふ、大なる理想を内に懷きて以て寫實せよ、燃ゆるが如き同情を注ぎて以て暴露せよ。(二十八年九月稿)

下流の細民と文士

十九世紀の所謂文明開化なる者は富者に厚きの文明也、自由の名の下に貴賤の階級を打破せりと雖も、貧富の隔絶はこれによりて益、太甚しきを加へたり。唯物文明の進歩に伴ふ器械の精巧は、勞働者より其職を奪ひ、文華の發達に伴ふ奢侈の風は、窮乏者を擠して彌、塗炭に苦ましむ。富む者は彌、富み、貧む者は彌、貧す、富む者は常に樂しみ、貧む者は常に苦しむ。朱門の家、馬常に肥へて、菜色の丐徒累々途に滿つ。肉食の者腹常に便々、冬の短きを消遣の途あきに苦しむ、而して陋屋の裡、眼凹み頬落ちたる人、秋夜の長きを猶は作業の捗りしからざるにあらざり。今の文明は中流以上の徒を惡徳に陥るゝと共に、下流社會のものを擠して悲惨の谷に落す。今日の下流社會餓へて而して死せん乎、否らざれば盜みて食はざる可からず、盜みて食ふもとより罪

なり、然れども人常に伯夷の潔なし、正を守りて餓死せんよりは罪名を受けて生きざる能はず。下流社會の罪惡之を安逸の餘に出づる上流の惡德に比すれば其の情や憫むべし、而かも人之を罰して假さず、而かも吞舟の魚を逸して上流社會が汚行淫風をどがめず、嗚呼人の眼は到底明のみをみて暗をみる能はざる乎。且つや貧窶なるもの必ずしも悉く怠慢より來らず、かの罪惡なるもの必ずしも常に自動的ならず、而かも一たび窮乏の淵に沈めば再び浮む瀨にあふと難く、一たび牢獄の人となれば、世は常に之を忘れずしてこれに齒するを愧づ。嗚呼々々天下最も其運命の悲慘にして、其生涯の最も憫むべきものは彼の下流社會の徒にあらずや。而して此悲慘の運命を歌ひ、この憫むべきの生涯を描く、豈に詩人文士の事にあらざらむや。世は既に才子佳人相思の纖巧なる小説に飽けり、俠客烈婦の講談めきたる物語に倦めり、人は漸く人生問題に傾頭して神靈の秘密に聞かんとするの今日、作家たるもの滿腔の同情を彼等悲慘の運命の上に注ぎ、渾身の熱血を其腕下の筆に瀉ぎて、彼等憫むべきの生涯を描き、彼等不告の民の爲めに痛哭し、大息し、彼等に代りて何ぞ奮て天下に懇ふるを爲さる。ユーゴーが筆底雷震ひ濤湧く所以のものは、彼が常に此等不告の民の爲めに憤り、彼等の運命の悲慘に泣きて人道を絶叫するの聲によるにあらずや。近時ユーゴーを説く者

漸く多く、(數年前に在りて思軒が譯せしものは、ユーゴーが見聞の一瑣話に過ぎざりしのみ)無腸道人は『日本』に『九十三年』の梗概を、鈴浦漁人は『ノーツルダム塔』を概論し、而して又氏の大著『悲^{レ、ミザラシ}慘』は櫻痴居士の筆によりて『アナ無慙の浮世』なる戯曲に譯し出されんとすと聞く。嗚呼一葉の落つるを以て、天下の秋をトし得べくむば、此等の事世人の漸く意をかの人生問題とともに、社會問題に傾注し來りしを知り得べきに非ずや。然れども先づ自ら動きて而る後人を動かすべし、我先づ涙下りて而る後能く人を泣かしむべしとせば、今の貧窶者に代りて天下に懇へんとするもの、必ず眼中萬斛の涙あり、胸中萬斛の血あるものにして始めて得べし、輕薄なる幫間者流の作家、淺膚なる才子肌の文士に、其純潔を瀆さしむ可からず。嗚呼誰れかこれをなすものぞ、嗚呼誰れかこれをなすものぞ。(二十八年九月稿)

想 化 是 何 ぞ

想化とは個象を詩化するなり、理想を個象に寓するなり。所謂神韻なる者は個象の裡に想を認むるの處に存す。單に個象を具體的に描き出したりとて、直に之を以て想化といふ可らず。詩人は哲學者と等しく或直覺的の見地を有す、詩人個象に對す、無意

識なりと雖も、其の直覺的の見地を個象に寓す。是れ即ち想化なり。蓋し理想は主觀に存して客象に存せず、客象は即ち個象なり。誰詩人其主觀の直覺的見地の眼を以て之を視る、而して其主觀の理想を個象に凸現して、而して自ら識らざるか故に、理想なるものを以て個象の根柢に潜めるものを觀取するとなす、實は主觀を客象に寓せたるのみ。古來哲學者が絶對といひ理想といふ、客象豈に此の如きものあらむや、個象は相對のみ絶對にあらず、普遍にあらず、我を以て個象に對す既に相對なり、何の處にか所謂絶對あらん、普遍あらん。唯我「忘我」する時に即ち絶對あり、普遍あり。古來哲學者が絶對を認むといひ、相對を認むといふ。唯此主觀の忘我の心理の狀態を客象に凸現せるのみ。哲學者冥想凝思の際、其極忽然として「忘我」す、此時彼れ絶對を認め得たりといひ、理想を認め得たりといふのみ。既に忘我の境なり、故に理窟を絶す、故に唯之を具躰に現すべし、抽象に現す可らず。彼の禪語に詩的のもの多きは忘我の境之を具躰に表したるに由るのみ。既に想化なる者は詩人無意識に之をなす、故に唯之を具躰的に表す可くして抽象的にす可らず、抽象的にせんには必ず意識的なるを要す。故に眞の想化なるものは具躰のみあつて抽象なし、抽象は想化に非ず、想化は理想を具躰の個象に寓す、故に幽遠なり、故に神韻あり。唯單に個象を個象に

て具躰に表したりとて何の所にか想化あらんや、何の所にか神韻あらんや。所謂神韻なるものは此理想を觀取する直覺的の見地のみ、吾人は今の所謂理想派と稱するものが、理想を以て理窟とし、抽象するを以て想化とする、誤れるの甚たしきものなりと信す。(二十九年五月稿)

今日の漢詩人

古より詞人輕佻なりと稱す、今日に於ても吾人同一嘆す。見よ今日の漢詩人蠢々として少なきに非ず。而かも彼等の一人果して眞の素養あるものある乎、眞の定見を有するものある乎、眞の主張を有するものある乎。彼等は唯に其詩語の上に於て釘釘補綴僅に句をなし章をなして氣魄なく神情なきが如く、彼等の人物に於てもまた輕佻なり、浮薄なり。陽には苟合阿附、而して實は相妬み相忌み相排擠す。心事の陋惡むべきものあり。彼の槐南の如き、彼は劇秦美新の楊雄の徒のみ。長上の鼻息を仰ぎ上に媚び下に驕る。乃父の餘威を藉りて盟社に主たるも其德既にいふに足らずして、其學も甚だ邁れたるものあるを見ず、見ざること此の如くにして猶詩人中の泰斗たりとせば、所謂漢詩人一輩の徳と學と言を待たずして明かなるに非ずや。今日の詩人に杜甫が沈痛

と、李白が飄逸と、東坡が濶達と、これらの數者決して求めて得べからず。彼等は輕佻なり、彼等は偏狹なり、彼等は阿媚なり。彼等が詩の氣魄なく神韻なきまた宜ならずや。此等鷄群の中に就き、獨り嶄然として頭角を抜く孤鶴たるものを愚庵とす。彼の詩杳然として火食人の語にあらず。枯淡簡樸詞短うして意永し、言外の情趣搖曳たり。殊に五言絶句の如きに至りては、宛として唐人の口吻なり。彼れ蔬筍の徒なりと雖ども、而かも詩理路に陥らず、これ蓋し彼が悟道に得る所多かるべしと雖ども、またその詩人として一種の天才を有するを見るなり。近世の詩壇、吾人の服する所唯此人あるのみ。此人と青崖とを除けば他はいふに足らず。吾人は此に至りてまた彼の多情多恨熱誠熱血の詩人故中野逍遙を懷起せずんばあらず。彼れ猶未だ圓熟蔗境に到らざりしと雖ども、情炎燃ゆるが如く、眞の詩人的性情を有する詩人たりしもの、唯此人ありしのみ。今や亡し噫。(廿九年六月稿)

理想と自然

理想とは必ずしも抽象の理窟の謂にあらず、理想とは亦理性によりて得たる斷定の謂にあらず、理想とは直覺的の見地なり。之を抽象的に分解せんと試むる者は哲學者な

り、之を具體的に表彰せんとするものは詩人なり。具體的に表彰するが故に詩人は之を感情に訴ふ、故に實なり故に美あり。抽象的に分解せんとす、故に哲學者は之を理想に訴ふ、故に虚なり故に理なり、故に理想は必ずしも美にあらず、必ずしも理にあらず、必ずしも虚にあらず、必ずしも實にあらず、唯直覺的に之を觀するのみ。故に理想の高下は天分の高下による、天分高き者は理想も高く、天分卑き者は理想も卑し。等しく同一自然に對するなり、而して其着眼、見地相異なるを免れざる所以の者は、實に天分の差之を然らしむるなり。天分の高き者は、卑近の中猶高遠を認むべく、卑き者は高遠の中猶卑近を觀るを免れず。且つや理想既に直覺的の見地たるを以ての故に、高さを有する者自ら識らず、卑さを有する者亦自ら識らず、無意識にして之をなす。之を抽象し之を理性に訴ふるに於て始めて意識あり、若し之を直ちに具體的に表彰することをせん乎、彼れ自ら其理想の何の邊にあるを識らずして其觀たるまゝ、を以て之を爲さん。自ら識らずといふも理想のなきにはあらず、大詩人果して没理想の、唯理想の理として現はれざるのみ。理想を表彰せりと雖も、する者彼れ自らも亦識らず、自ら識らずして其理想を自然に寓す、既に理の現はるゝなし故に、其自然に寓して表彰せる理想、唯之を直覺すべくして理解す可からず、心悟すべくして知解す可から

す。故に大理想は理想なきには非ず理なきなり。今の詩人文士は則ち理を以て理想と誤る、蓋し彼等の天分大なる直覺の能力を有せざるや、直ちに自然と相抱く能はず、僅に推理の綱繩をたどりて或見地に達し、而して之を其作に表彰せんとす。而して其自らの既に抽象的に之を會得せるや、これを表彰するに當て具體的にする能はず、推理理解の架橋以て漸く理想と自然との鴻溝を通ずるを得るのみ。而して美は虚にあらす理性に訴ふ可からず、實にして而して情感に訴ふべきもの、故に美の度は推理に反比す。今の理想派と稱する文士の作の興趣を欲き津味に乏しき實に之が爲めのみ。而してまた早く世上の厭倦を來たせんとするも實にこれに職由す。寄語す今の文士理窟を離れよ推理を排せよ、而して大觀想せよ。大理想自ら其中にあらむ。(廿九年四月稿)

社會問題

維新の革命とともに、貴賤の門閥的階級は破れたり。而して功利的文明の風盛にして、貧富の生計的階級は、自からまことに成らんとす。若し門閥の階級にして打破せざる可らずとせば、富閥もまた打破を要するは一也。昔者、政權は貴き者之を握れり、今や政權は漸く富閥のものに左右する所とならんとす。嗚呼富閥も是れ門閥と等しく、一

個の閥閥也。富閥門閥其非理なるに於て一也。而して富閥政權を左右するは、猶門閥者の政權を左右すると、其專制的たるに於ては一也。今日吾國に於て、富豪漸く勢力を増長し來らんとするは、大に憂ふべき事也。貧富の懸絶漸く大ならんとするは大に憂ふべき事也。門閥自由の敵ならば、富閥も亦自由の敵也。門閥平權の敵ならば、富閥も亦平權の敵也。維新の革命をなしたる吾國民は、更に第二の革命を富閥の上に加へざる可らざる也。彼の同盟罷工の如き、もと舉動不穩とはいへ、亦富者專横の上に打撃を加ふるの一法也。吾人は寧ろ彼の罷工者に同情する者也。日本鐵道機關方の同盟罷工の如き、確に會社の非たるは言をまたざる也。(卅一年三月稿)

學生の腐敗

最も高潔に最も意氣に富むべき青年にして、今や其腐敗いふに堪へざるものあらんとす。在京の學生に、賭博のために刑を受くるもの多きは今更いはず、大學及び高等學校の學生にして、狹斜の地に足を入るゝもの二百名を超ゆるといふに非ずや。新潟にては師範黌の學生、劇を演じたりといふに非ずや。是に至りて青年の高潔はいづくにかある、青年の意氣は何くにかある、懦弱婦女の態を學ぶ豈に痛慨に堪へんや。近來

13

學校の紛擾をさくこと頗る減す。是れ實に慶すべきに似たりと雖も、然れども、此れ確かに青年の元氣銷耗を證するものなり。學生の紛擾や、喜ぶべきの事にあらずと雖も、然れども、此あるは猶學生に元氣あるなり。膽氣あるなり。青年は寧ろ這般の元氣と膽氣とあらざる可らずして、今や却て教官學生一堂に會して優倡の爲をなす。此を師弟間の和氣として祝す可き歟。吾人は這般の事あらんよりは、寧ろ反抗的精神ある舉動を喜ぶ。蓋し是れ青年の青年たる所以なれば也。(卅一年三月稿)

今の大學生

大學は、學問至高の府なり。其學生は、宜しく當さに天下學生の模範たるべきなり。而して其無氣力實に驚くべきものあり。彼等の氣障なる風采、氣取りたる言語、既に人をして嘔吐を催さしむべし。而して徒らに博聞を衒へども之を叩きて見識の聞くべきなく、折衷を知つて獨創を知らず。彼等蠢魚にだも若かす、前人の糟粕を嘗むるのみ。彼等鸚鵡と擇ばず、師説の唾餘を拾ふのみ。彼等業を卒へば、ち地方に行きて村夫子に身を終る歟、若しくは刀筆の吏に甘んじて、高等官七等に隨喜するのみ。斯學の爲めに獻身して、窮苦辭せざらんとするもの、果して人ある歟。書を名山に藏して千載の知己を待たんとする、果して人ある歟。天下民人のため、闕に伏して當局の非政を劾する、果して其人ある歟。正義を踏み、人道に頼り、血を踐んで怖れざる、果して其人ある歟。於戲輕薄なる、皮相なる、阿世曲學なる、世智辯給なる、圓轉滑脱ある、今の大學生は、所謂當世才子の標本のみ。豪放磊落、意氣あり熱血ある、彼等のよく解する所にあらず。書生風紀の敗類最も慨すべし。大學生の無氣力は、更に大に慨すべきなり。(三十一年一月稿)

青年と近時の德育

青年の意氣を銷耗せしむるものは、近時の奢侈の風也、近時の淫靡の風也。而して就中形式的の德育は、害の過甚なるもの也。近時の所謂德育は、唯學生を柔順ならしめんとする也。學生を畫一的模型に陶冶せんとする也、青年奔逸の氣を抑損する也、青年を卑屈にする也、唯尊影に叩頭するのみを以て、愛國と信せしむる也、勅語の捧讀を謹聽するのみを忠君と信せしむる也、青年をして盲從せしむる也、僞愛國者たらしむる也、僞忠君者たらしむる也。此れ實に近時德育の大弊にして、青年の意氣を銷耗せしむる害の過甚なるもの也。夫れ青年は發達すべき者也、發達すべき者は最も自

由に馳騁せしめざる可らざる也。みだりに之を羈約し、之を束縛す可らず。而るに、今の德育は、忠君愛國の皮相の形式に盲從せしめんとする者也。德育は躬行實踐也、精神の上に感化するを要す。徒らに尊影の膜拜と、勅語の捧讀とを以て唯一の德育とするが如きは、青年を賊するもの也。青年の意氣を銷耗す、罪焉より大なるは莫き也。吾人は似而非なる者を憎むこと大也(卅一年三月稿)

青年と文學

吾人は、もとより文學を有害の者なりとはいはず。然れども、青年にして徒らに力を文を鍊り辭を修むるの上のみ殫すが如きは、吾人は害を見て其利を見ざる也。古聖これをいふ、學而有餘力則學文と。夫れ青年は、修養の時代あり、素養の時代也、蘊蓄の時代也。學問に於て夜以て日に繼ぐべきの時代也。而して文學は、精神の娛樂以外、實用に何等の益なき者也。勢力の餘裕ありて、始めて事に茲に従ふべき而已。蘊蓄修養の時代に於てすべき者にあらざる也。全力を此に注いで文學を弄するが如きは、青年の宜しくなす可き所に非ざる也。一時文運の盛なるや、青年少壯の士、修養猶足らず、素養猶足らず、蘊蓄猶足らずして、一時の風潮に靡けられて想を文筆の上に勞

するもの多々なるに至りしは、吾人の痛慨に堪へざる所。力を積むと多からざれば、以て大に成し難し。よし其畢生の目的にして文筆にありとするも、青年の時は唯修養すべきのみ、素養すべきのみ、蘊蓄すべき而已。青年貴重の光陰を以て、其文字上に想を構へ、思を鍊るに徒費すべきにあらす。一時の風潮に唆かされ、其材を顧みず、其能を顧みずして、文筆に狂奔するもの不可なるは勿論、其材あり其能ありとするも、青年は毅然として唯其學ぶ所に睚むべきのみ。小説を作り、新躰詩を作る、餘力ありて之をなすは、吾人之を咎めず、唯青年有爲の材を抱いて、有爲の日時を含英咀華の工夫に費すが如きは、吾人の與せざる所也。(卅一年三月稿)

人間到處有青山

新作家の、風を聞て起るもの、今日より多きはなし。敢て卿等新作家に問ふ。卿等、果して、卿等の名も、位も、富も、卿等の生命までも犠牲にして、詩神に殉せんとするの大決心あるか、知己を千載にまつの大自信ある歟。富貴に淫せず、權勢に媚びざる底の大精神ある歟。卿等は、果して、一時の名譽を僥倖せんかために、作家たらんとするにあらざるなき乎、果して安逸にして名をなし易きがために、作家たらんとする

13

にあらざるなき乎。卿等はよく此の問に對して、決然として否と答ふるを得る乎、脚蹠するなき乎、猶豫するあるなき乎。卿等眞に美の爲めに美を歌ひ、詩の爲めに詩を作る乎。之有らば則ち可なり、もしなき乎、卿等は速かに其筆を焚けよ、其墨を折れよ。僞文學者として、瞬時の名譽に拘々たらんよりは、人間到處有青山、天下爲すべきの事多し、功名豈に唾手してとるを得ざらんや。卿等猶春秋に富まん。去れ、去れ、文壇を去れ。天高く、地濶し、男兒四方の志、豈に必ずしも局促たる一小文壇に於てせんや、一小文壇に於てせんや。(二十九年十二月稿)

鳶飛戾天

今の文壇は猜忌、嫉妬、狹量、怨詛、排擠、讒謗の文壇なり。所謂文學者なるもの眼孔豆の如き、局量芥子粒に似たり。卿等は廣濶の天地。何を苦しんで歎、自ら跼促す。人間今の所謂文學者たらんとまた難い哉。女々しからずんば文學者たる可からず。執念からざれば文學者たるを得可からず。狹量ならざれば文學者たる可からず。嗚呼男兒自ら男兒の事あり、男兒何を苦しんで歎、今の所謂文學者なるものたらんや、人間快心の事、數へ來れば頗る多し。東西を連衡して西歐と覇を天下に争ふ、快心の事に

嶺 雲 搖 曳

鳶 飛 戾 天

非ずや。支那に入て今の狄人種に恨を吞む明朝の遺臣の後を嘯集して、清朝を革命する、また快心の事に非ずや。劍に仗て起ち、馬尼拉の獨立軍に投じて、西班牙の羈束を脱せしむる、快心ならずとせんや。印度に入て土人を説き、軍を起して英國に反抗せしむる、また快心ならずや。土耳其の可汗を輔けて、露を脅かし、全歐をして再び弦月旗の下に懾服せしむる、豈に亦快心ならずとせんや。布哇に入て、前女王を奉じて義を唱へ、今の共和政府を顛覆するこれも亦快心の事のみ。男兒到る處、路自らにしてあり。人生五十、長しといふ可らず。快心の事をなし得ば、死して憾なし。徒らに此今の文壇に筆を執て、拘々促々醉生夢死せんよりは、何ぞ寧ろ功名を一世に博せんとはせざる。昔者ハンニバルの鐵馬アルプスの險に躍るや、いふ、終に路なき乎、可なり吾之を開かん (I will find a way or make one)と。男兒此慨あり、何事か成らざらん。嗚呼、猜忌、嫉妬、反目、排擠の今の文壇は、男兒の處るに屑きの處にあらざるなり。(二十九年十二月稿)

壯士歌

蓬頭弊衣の破れ壯士が、夜間街頭、人旁午の間に立ち、手を口に翳して歌ひ出すもの

もとより知名の士の作れるにもあらず、才識の人の爲れるにもあらず。而かも其詞悲壯、其調激越、また聞くに足るものあり。嗚呼今日滔々たる新體詩家あるもの、作、之に對して果して能く遜色なきを得る者幾何ぞ、嘆また嘆。(二十八年四月稿)

批評難

昔者、韓非子說難を説く、評家また批評難を唱へすんばあらず。評家己れの信する所に從て論ず。而かも之を褒むれば則ち諂ふとせられ、之を貶せば則ち作家の怨を買ふ意見合するものに同じ、意見合はざるものを駁すれば、則ち黨同伐異すとせらる、勵まさんが爲めに之を揚ぐれば、作家慢す、奮はさんが爲めに之を抑ゆれば作家憤る。批評の難說難に譲らず、天下評家たる亦難い哉。(廿九年九月稿)

東京と大阪

今東京を出で、静岡を過ぎり、濱松を経て、而して既に名古屋に至らば、言語風俗頓に面目に異にするものあるを見ん。蓋し參以東の東京の感化之に及び、尾以西は大阪の感化之に及び、實に我國は東と西とに各一大中心を有して、其言語風俗劃然として

二大系をなすを見る。今地圖をとり來て遠と參との國境線を延長して、我國を東西の兩大部に分てば、線以東は則ち東京を中心として之に屬し、以西は大阪を中心として之に屬す。東京と大阪とは各東西に鎮して我國の二大中心たるものたるあり。而して其風尚の負かに相異なるものを見る。東京の政治の都たるが如く、大阪は商業の市なり。東京は文華の中心にして、大阪は工業の地なり。而して大阪は京畿優柔の風をうけて、東京は昔日東夷剽悍の俗を存す。此は關八州任俠の面影を今にのこして、人氣寛濶に、短慮に、淡泊に、憤易くしてまた涙に脆ろし。彼は浪花津の昔より馴養せる財利の計に敏ければ、人氣倭諛言に巧みにして情に薄く、憤易からざれどもまた涙に乏し。從て大阪は實用を尙ふ、東京は華文を喜ぶ。故に世俗的なり、美の如きは彼等の解する所にあらず。食倒れの語の明かに之を證するが如く、唯物質的に心神を満足さすを知るのみ。文學の彼地に榮ざるものもとより其人なきによるなきに非ずと雖ども文學の事の商業と相容れずして、職として大阪の人士文學を解する能はざるに由らざらんばあらず。故に吾人は敢て大阪に文學の盛に興らざるを咎めずと雖ども、彼地に在る文士の作の、一種の俗臭を帯ぶるを見る毎に顰蹙せずんばあらず。概して之をいへば大阪に在る文士の作は、一種の俗氣を帯びて清楚瀟洒の趣に乏し。蓋し大阪人士の

實用を尙び、世俗的なる、從て其の嗜好野卑に傾るざる能はず、此野卑なる嗜好に投じて、此俗氣ある風俗を寫さんとす、此俗土に生れざるの人たらしむるも、尙其作俗氣を帯びざる能はず。南翠、霞亭の筆の如何に俗了せられたるかを見よ。而して彼俗氣紛々たる京阪の間に生れたるもの、來つて東京にありと雖ども、猶上方贅六的の俗臭を筆頭より滌ひ去ると能はず。青軒、仰天等の筆の、猶一種のいやみあるを見よ。上方贅六は由來文學を解し得るものに非ず。いやみあり、ダレ氣味あり、銅臭あり、俗氣あり、氣魄なく、活氣なく、優柔媚嫵にして婦女的あるものを上方文學の特徴となす。吾人は寧ろ此の如きの文學を厭ふ。(二十九年十一月稿)

文學と宗教

人間に宗教あるは、人間に弱點あるを露はすものたり。人は到底安心の地、立命の處なかる可らず。而して人は安心を理に獲る能はず、立命を抽象に求むる能はず。立命安心は終に之を情に訴へざる可らず、具體に頼らざる可らず。宗教なるものは真理の跡を粧ふに信仰の羽毛を以てせるものたり。此信仰あるが故に宗教あるあり、宗教にして信仰を除かば、其赤裸々の處、却て是れ一個の哲學見地に外あるなからむのみ。

宗教はこれ哲學見地を具體的にせるのみ。故に人間に宗教あるは人間の弱點なり。然れども情は辨せざるが故に熱し易く、信仰は盲なるが故に執し易し。執し易く、熱し易し、此を以て乎、宗教的信仰は熱誠あり眞摯なり。而して之を今の社會に觀る、輕佻皮相浮薄は今日の通情なり。果して文學は時勢を反映する歟。今の文學はまた、輕佻なり、皮相あり、文士の狂熱なく、熱誠なく、大理想なく、大主張なく、俗と共に醒醉し、時と共に浮沈す。嗚呼今の社會は宗教を要し、今の文士は大信仰を要す。吾人は敢て宗教を信せよとはいはず、敢て迷信なれとはいはず。吾人は今の社會今の文士の應病の與藥として、宗教的眞摯熱誠の大信仰を處方せんことを欲せずんばならず。且つやそれ宗教は具體せる一個の哲學的見地なり、詩も亦具體せる一個の理想なり。詩人も直觀し、宗師も直觀す。宗教も情に訴へ、詩も情に訴ふ、詩は愉ばし、宗教は諭す。その諭すと、愉ばすとは異なれども、其人に教ふる所あるは一なり。詩と宗教とは同胎孖生のみ。詩は以て宗教の見地を其理想として謠ふ可く、詩人的の感情また宗教的の感情と相容る。吾人は敢て當世に抹香臭き宗教小説を獎勵せんと欲するに非ずと雖も、吾人は今の文士が、其道念を養ひ、眞摯に熱意あるに至らんが爲めには、宗教的信仰のまた益なきにあらざるを信す。(二十九年十月稿)

嗚呼文士涙なき歟

嶺 雲 搖 曳

日比野原頭何の官省ぞ、飛甍彩閣高樓屹として雲を抜く。墻外縹緲の老媪あり、其躰羸れ其容枯槁す、土を掘りて草を摘む、草を摘むといふと雖も、士女の行樂と同じからず、摘み得し幾束の草は、之を以て粥に和して其一杯の量をまさんとするのみ。嗚呼二橋々畔絃歌常に湧く、高帽の人、美髯の人、美酒に飽き梁肉に飽くも、未だ此等菜色の氓に一錢を施すをせず。豈に雷に然るのみならむや、此等の細民は、其終日勞役の疲勞を慰すべき一杯の濁酒にも、將た一服の煙草にも、幾許の重税を拂はざる可からずして、三鞭の美酒マニラの卷莢には何の課せられたるものなきにわらずや。軍備可なり國力擴張よし、然れども細民は口腹にこれ急にして其子を教育するとすら能はざるものあるを知らずや。玻璃の碎片を買ひて業とする一婦あり、伴ふ所の兒女甚だ多し、これに其多福を慶すれば則ち曰ふ、此等の兒女を教育し悉く有用の材とあすを得べくして、始めて兒女の多さを慶すべし、妾等一家の如き、兒を生めども僅にこれに食を與ふるに急なるのみと。嗚呼國は富み兵は強きに至るも、此等の貧兒を一生無智の不幸に終らしめばこれ何の效ぞ。嗚呼々々累々たる三百の頭顱席を議政の院に

所 謂 小 説 家

所謂小説家

列ぬ、彼等果して何事をか議し何をか爲すや。彼等は中等社會を代表するのみ、もと貧者の味方に非ず、誰か此等貧者の爲めに其枉屈を伸ぶべきものぞ、文士あり矣、詩人あり矣。由來文士詩人同情に富むと稱す、文士詩人何ぞ此等貧者に代りて其苦悶の叫聲を洩して大に天地に愴へざる。春色に酔ひ、花鳥に浮かれ、自然を吟じ、戀愛を歌ふ。なすは卿等の爲すに任す。而も卿等の眼中此悲惨の光景の映するあるなき歟、卿等の眼光もまた光をのみ見て暗黒にみる能はざる歟、或は之をみるも以て卿等の心を動かすに足らざる歟。嗚呼文士涙なき歟、嗚呼文士涙なき歟。(廿九年四月稿)

今の小説家、熱血なし、熱情なし。彼等社會の暗黒面を描寫せんとすといふ、而して彼等は眞に暗黒の裡に呻吟するものに向つて同情を表して然るにあらざるなり、流行を趁ふのみ、時好に投せんとするのみ。彼等の或者は癡狂院を訪ひ、監獄に就き、以て實狀を視んとすといふ。然れどもこれ畢竟場當りをとらんが爲めに然かるのみ、彼等眞に癡狂を憐れみ、罪囚を憐れんで然らんや。今の小説家は所謂通がらんとするものなり、彼等は淺薄なり、膚受あり、本領なく主張なし、時好を趁うて通がるを以て

自己の能事畢れりとなすのみ。嗚呼今の小説家の暗黒を寫すやよし、悲慘を描くやよし。然れども内に一點の温情なく、眼に一滴の涙なくして之を爲す、豈に以て人を動かすに足るものあらんや。自ら泣きて以て人を泣かしむべし、萬斛の熱血と、熱涙とを瀝盡し、滴盡し、之を墨に和して始めて暗黒面を描くに足るべきのみ、悲慘を寫すに足るべきのみ、毫頭の塲當り何ぞいふに足らんや。今の小説家の多くは是れ所謂當世才子なり、利口なり、小才の利きたるなり、小才を以て筆を舞さんとするものなり、本領なきものなり、故に世評に齷齪たるものなり、故に常に時好に投せんとす。一度或者の好評を博したるものあるを見ては、忽ち之を摸せんとするなり、之に倣はんとするなり、靡然として之に適く。故に紅葉勢を持すれば皆寫實を主とし、鏡花等一度勢を得れば忽ち寫想を重んず、翩々として特操なきこと此の如し。故に寫實するにも、寫想するにも、彼等は常に一片私心を挾む。彼等は眞に其が爲す所に熱せず、其爲す所に忠なる能はざる固より其所のみ。既に其爲す所に熱する能はず忠なる能はず、故に假令彼等は暗黒を寫し悲慘を描くといふと雖も、豈によく熱誠眞摯、眞に此等の爲めに泣き、此等の爲めに同情するものならんや。況んや熱血を瀝盡し、熱涙を滴盡するをや。輕薄なる小説家を掃盡せよ、浮薄なる文士を攘盡せよ。日本の文壇は永く彼

等の跳梁に任すべきに非ず、噫。(廿九年四月稿)

島國的規模

四圍の境遇は人を爲るといひ、居はよく氣をうつすといふ。或意味に於て人間の智識なるものは殆んど全く經驗より得、而して人間の稟性は遺傳に影響せらるゝと多しとせば、上下三千歳の間此彈丸黒子の一孤島に局促したる我國民の氣象の大經營大企圖に缺けたる豈に怪しむを須るんや。況んや温和の氣候沃饒の地味は人をして自ら懦弱に傾かしむ、我國民の強忍克己の人たる能はず。是を以て我國民の事業にして規模の窄甕の如くならざるもの殆んど稀なり。さなきだに皮相淺薄の民維新來西歐文明の糟粕に酔ふて、功利の俗風をなし、眼前に迷ふて遠圖なく、小利に眩して大計を忘る、文士一時の虛名に惹せて、千歳の知己を待つ能はず、學者浮華の術識を喜んで、堅實の素養に勉むる能はず。是を以て時に媚びんとすれば則ち俗に阿る、よく流俗の表に卓抜して、千古に不朽たらしめんとするものなし、一時の名を獲ば足る、一時の喝采を博せば足る、何ぞ勞に堪へ難を凌ぎて、精力を殫すを思はんや。學者は片々たる小冊子の論文に得々し、文士は狹窄なる觀察に安むす。而かも大理想なく大識力なし。

文士の観察は人生の奥秘に徹せず、人道の大義に到らず、豆の如き眼孔に得たるの寫實に安んじて、別に靈妙の幽玄あるを知らず。學者の所爲は釘釘補綴にありて、徒らに西人の説を敷衍し、折衷するにあるのみ。古今の人未だ觀破せざる所を觀破し、天下の人未だ道破し得ざる所を道破する底の別隻眼を具へず、僅に抄引と引據とによりて、瞞着繃縫するあるのみ。天下偉人物なく、大手腕をなし、之れ有るは小才子小利口のみ。小才子小利口とする所浮華に非されば則ち皮相、小成に安んじて苟安を偷ひ、豈によく眇然たる島國的の規模を脱せんや。嗚呼日本の學術、文學は終に此小器用此小手先の利きたるを以て得たりとしてやむべき乎。日本は終に摯實堅忍の學者と、熱誠沈痛の文士とを見る能はざるべき乎。天理教蓮門教等の淫祠全然倒れすんば國民の眞の敬虔心を見る可らず、浮華皮相の學風やますんは天下學問を學問として研究する眞の學者を出す能はず、輕薄虛榮の習失せずんば品格高尚なる眞の文學出せず。嗚呼誰か島國的規模の金剛圈を打破して、吾國民を踏天踞地の齷齪に拯ふものぞ。(廿九年九月稿)

操觚者の腐敗

文明なりといふ、開化なりといふ、燦々爛々すこに人目を駭かすに足るなり。然れ

どもこれ外見のみ、これ皮相のみ、社會道德の壞敗人心の淫靡今日に過ぐるものあらんや。煌々たる電燈の影、罪過は到る處に行はれ、所謂紳士紳商なるもの、多數は詐僞者なり、賭博者也、法網を潜りて罪惡を行ひつゝあるもの、み。監獄は如何に改築せらるゝも、刑法は如何に修正せらるゝも、法に觸れざらん限り、罪を犯さざらん限りに於て罪惡は行はれつゝあるなり。道德は敗れゆくなり。社會の狀態此の如き時に當て、よく其間に卓立して波瀾を既倒に回へし、大厦を將覆に撐ふるものこれ操觚者の任に非ずや。操觚者は社會を導かざる可らず、社會を率ゐざる可らず、社會の啓發者となり、社會の誘掖者とならざる可らず、社會の師たり、社會の友たらざる可らず。社會罪あらば之を鞭撻し、社會過あらば之を訓戒すべし。法律以外に於て社會の綱紀を掌どり、社會の道德を支ふべきもの、これ操觚者の任に非ずや。社會濁らば之と共に濁り、天下醉へば之と共に醉ふ。今の新聞記者の如き果して眞に操觚の任を盡すといふべき乎。今日の新聞記者の職を以て一種の蕩樂商賣なりといふ。此の如きは蓋し新聞記者なる者の品位を侮りたるの言に非ざる乎。然れども木朽ちざれば虫入らず、天下をしていふと此の如くならしむる豈に大に其故なからむや。吾人は茲に新聞記者なるもの、裏面を許くを散てせず、敢てせざるに非ず、煩はしきに堪へざればなり。

唯吾人は新聞あるものが一種の強奪道具となり、又一種の提灯持となるの多きをいふてやまんののみ。吾人は敢て諄々として教へよとはいはず、然れども苟くも操觚の任に従はんとす、其心事公明正大權威に屈せず、富貴に溺れず、獨立獨行卓然として我欲する所を行ふ底の人物たらんことを望む。吾人は今日社會の腐敗と共に益々之を感ずると切なり。操觚者よ汝の腐敗を滌へ。(廿九年五月稿)

辯を好むの弊

今の文士辯を好むかな、甲難乙辯切りに其論を闘はず。其相自ら高うせんとし、學を尙はんとするの弊や、往々にして枝葉に涉り、末節に趨る、其大旨を捨て、言句を相尤む苟くも一言一字の嫌あり、即ち博引洽據其過を剜肉削骨せずんはやまず。而して相答へ相辯する愈、多くして愈、末葉に涉る、其大本の主旨の如きは、杳として彼等相忘る、なり。嗚呼これ今日の文士辯を好むの弊、而して其由る所寛恕の心なきに來る。彼等は他を擠して而して自ら快とす、たゞ他の過失なからむとをこれ恐る、故に微瑕輕疵彼の眼に免る、能はず。彼をして若し一片寛容の心あり、言句の皮相を徹して眞に其眞意に參せしめば、彼我の説く所また一揆に出づるものなくんばあらず。唯相辯する事

いよ／＼繁くして相睨くこと彌々遠し、召いて還す可らざるに至るのみ。古より哲人多し、而して其説く所を異にす、然れども之を約すれば則ち一に歸す、相論する所猶言句の末のみ。由來好辯は學者の弊か。昔は戰國の時、給辯の士四方に遊説して相辯難す、囂々として耳に聒しきや、始皇天下を一統するに及むで、悉く書を焚き學者を抗にせりき。吾人も始皇の暴に與みせず、而かも今日文士好辯の風をみるに及んでは、私に悉く天下の書を燔殺し、悉く天下の學者を坑殺せんことを思はずんばあらず。(廿九年七月稿)

小説と理想

今の作家に理想の乏しきをいふ、必ずしも抽象の理窟を其作中に設けよといふに非ず。吾人は唯其理想を其製作に寓せよといふのみ。何をか其理想を其製作に寓するといふ。其理想を其製作の性格の動作と自との間に自ら現はれしむるのみ、現はれしむるといふ猶不可、自らにして現はるゝならざる可らず。何をか自ら現はしむるといふ、何をか自らにして現はるゝといふ。自らにして現はれしむる者の作家の心猶私ありて然らしめんとす、故に猶理窟の圭角其の作中にあらはるゝを免る可らず。自らにして現は

るゝものは、作家自ら猶識らずして結象せる理想其作中に隱約す。自ら識らず故に私なし、渾然として理路のもとむべきなくして、我之に對して肅然襟を正うせんとするものあるなり。作家既に道義の觀念もなく、哲理的思想なくして、強いて其作を高うせんと欲してこれに理想を寓せんとす。故にせしむるの迹ありて抽象に陥らざるを得ず、之に反して理想高ければ其言ふ所自らにして高し、強いて理想の現れんことを望まずして理想自らにして現はる。故に眞に高さ小説の製作を望まば、先づ其作家自ら高からざる可らず。作家の高からむことを望む、必ずしも其作中に高尚なる理窟を説かんことを望むに非ず、作家の渾身既に理想の結象たらんことを望むのみ、故に吾人が今の作家に望む所は、作家が哲理的道義的の道念を修養せんとこれのみ。哲理的道義的の道念の抽象的のものにして、美術上の製作の上には避くべきものたること固より論なし。故に吾人は作家か直ちに之を其作の上に現はさんことを欲せずと雖も、然れども其抽象なるが爲めに作家が此道念を涵養するを嫌ふをなさず。吾人は飽くまでも文士の製作中に抽象の理窟あることを嫌ふと共に、また吾人は飽くまでも道念の涵養を今の作家に慫慂するに難からず。(廿九年七月稿)

文學者と其報酬

今の作家は寧ろ過大の報酬を得る者たり、彼等は其自己の有する價值よりも過大の名譽と、僅か費せる勞力よりも過大の阿賭物とを博し得るものたるなり。小説家といへば、僅か四五枚の斷篇を草するも直ちに批評家の筆に上り、文學者といへば、支離の文を草するも猶幾何の黄金を得、而して其製作によりて得る所の阿賭物、長さも十日短きは一宵を徹したるものにて、其爲す所を易くして獲る所は多し。誰か今日文學者は虐待せらるゝといふものぞ。而して易ければ則ち惰る。今日の文士に不朽の名作なきもの資性の然らしむる所、得んと欲して得ざるものあるなきに非ざるも、また其境遇の安逸これが累をなすものなくんばあらず。天下の庸衆豈に眞に知らんや、書肆豈にまた眞に具眼せんや、文苟くも章をなせば其稿は一枚幾金に換へられ、而して世も亦之を讀む。人の性逸を好む、誰か故に刻心鏤腸の苦をなすものあらむや。今の文士たるもの大志なし抱負をなし、死後千載の名は生前一飽の快に若かずとす、一時を瞞着して幾何の阿賭を得ば則ち能事畢れりとするなり。一文成れば剗剗に附し、一章成れば梓に上す。彼の文士名譽を急ぎて然るにあらず、彼等素と大志なく儉安に忸る、彼

等は唯幾何の黄白をみるに急なるのみ。此弊の由て來る所を釋ぬ、則ち文士の報酬の過大なるに歸せずんばならず、既に大志なく抱負なし而して好過此の如し、文士たるもの豈に一時の安逸を儉まざらんや、一時の安逸を儉む、何の時にか發憤奮勵を爲さん。嗚呼文士窮して而して文始めて工なるものは、窮によつて憤を發すればなり。文の興は一時の發作なり、文士窮なれば則ち發憤す、發憤すれば則ち詩興横溢す、文始めて工をみるべし。安逸の人を殺すや、天才者と雖も之を免れず。彼等をして窮せしめよ、一たび憤を發す、天地なく四方なく人我なし、彼の唯一枝の筆を見るのみ、筆すら猶見ず、彼は直ちに筆となれるのみ、縦横渾灑、筆を落して一氣呵成。彼れ自ら識らずして名篇大作往々にして此時に成る。嗚呼今日我國の文學者に名篇鉅作なき、寧ろ文士好遇の累なるのみ、噫。(廿九年七月稿)

空 想

誰れか詩は空想なりといふ、眞詩人に空想なし。詩人の忽然興にうたれて筆を揮ふや、彼は熱す、彼は狂す、此時彼か想像する所、彼に在ては實有なり、空中の樓閣猶彼は此時此處にあり、此處にありて觀る、彼は實に其精神を其想ふ所に遊ばして、其想像

する所彼に在ては目睹るなり、耳聞くなり、我其處にありて其事を親らするなり。悲しきを想へば眞に其悲しきに泣き、喜ばしきを想へば眞に其喜ばしきに樂む。故に其筆を下して語をなすや、生命あり、熱血あり、活氣あり。唯彼の輕佻なるものは眞に空想す。彼は其想はんと欲する所を直に筆に下す、其心情冷々氷の如し、徒らに言語の末に赴かんとす、形愈々整ふて其詩愈々死す、儼へられたるは死したる言と文とのみ。氣魄なし活氣なし。死したるの言と語と、徒らに人の欠伸を促すあらんのみ、之を要するに眞詩人は心游す、心所想の境と一致す、故に彼にありては空想を空想なりとせず、故に空想なし。故に人を動かす。庸詩人の腦中私念のみ。直ちに其想ふ所に到る能はず。彼自らも空想すとす、之を信ずとすれば實有たりと雖も空想たらんのみ、況んや空想を空想とするをや。既に自ら信せず、人焉んぞ動かされんや。故に曰く眞詩は空想なし、眞詩人は空想せずと。滔々たる今の小説家、詩人、一二を除きては悉く空想するもののみ、庸作家庸詩人のみ、其巻を終ふる能はざる者、實にこれが爲めのみ。(廿九年七月稿)

天 と 人

物に對して感興禁する能はず、抑へんと欲して得ず、塞がんと欲して得ず、而して我感興する所を將て直に之をいふ、媚びず、忌まず、直ちに自己の胸臆を吐露して他を顧みるに違わらず。天才の人即ち是れなり。我れに於て感興なし、強て自ら感興をつくりて強て落筆す、他にもとむる所あり、媚ぶる所あり、これを人間の才となす。人の才たり故に既にもとむる所あり、媚ぶる所あり、故に落筆、躊躇あり、逡巡あり。天才のもの一氣に渾灑し去るに似ず。故に前後安排整然を缺かずと雖ども、而かも活動なし。天才のものは反之、感興禁せず、已むを得ずして落筆す、故に既に落筆顧眄なし、直往す。我自らその何をいふを知らずして而して之をいふ、故に其いふ所安排の整を失することはあり、而かも一種の氣魄生動す。人の才のものは其材を現世に求めて、而かも私意を用ゐて之を純化せんとするが故に自然ならず。天の才のものは其材を天外に得て、而して生意あり、現世のものにあらずして而かも自然なり。これを才の天人の別とす。今の小説家人の才あるものは多し、柳浪、水蔭等一輩の徒これのみ。彼等既に人の才たり、故に強ひて材を求めて時好に媚びんとす、故に彼の結構は安排整然たり、性格は現實を寫さんとす、而かも生意なし。天の才あるもの、露伴、一葉等これのみ。もとめず媚びず。感興する所をとつて直ちに落筆す、故に性格實際

に遠くして、而かも之を讀むの間知らず、識らず我宛然其性格の眼前に活動するを覺ゆ。自然といふを休めよ、不自然といふをやめよ、天才の筆に入れば不自然と雖ども自然なり、人の才あるものには自然も不自然たり。所謂自然と不自然とは材にあらずして筆にあり、筆にあらずして其天分にあり。天分の別る、所之を如何せんや、之を如何せんや。(廿九年六月稿)

文士精力足らず

今の文士精力足らざる哉。彼等の大作をなす能はざるを見ずや、彼等の稿の往々に完を告ぐるに及はすして中途に廢するあるを見ずや。吾人は必ずしも長篇を以て上乘のものなりとするに非ず、また興索きて猶強ひて筆を援けとはいはず。興はもとより一時なり、然れ共興の來れば文士即ち一詩想を髣髴に得たるなり、而して吾人か之を筆に上すは唯此一時の興によりて得たる髣髴の詩想を捉へて演繹するに過ぎず。故に興既に來り、詩想既に得、一時の興は忽として去るも何ぞ詩想これと共に去らんや。興索きて筆も亦此に止まるといはゞこれ精力足らざるあり。何者の狡猾兒か興索きたるを辭柄として以て自己精力の足らざるの失を蔽はんとする。而して又文の巧拙は必ず

しも其長短によらざるともより論なしと雖も、然れども短きものは其勞や少、長きものは其難、常に短篇零章の易きにのみ就て、大作雄篇の難を避くるもの、またこれ精力の足らざるによらずして何ぞ。我國民の由來浮謀にして堅忍の力に乏しき、一時に銳にして久しきを持する能はず。今日我國文士の精力足らざるものまた此弊に坐するによらずんはあらず。且彼等の興の早く竭くると稱し、また長篇に指を染むる能はざるもの、また彼等素養の足らざるの致す所たるなき能はず。其囊大ならされは以て大に盛る能はず、大なる素養なきもの何ぞ大なる興を來たすを得ん。根柢からざれば葉繁らず、堅實なる素養なきもの何ぞ大作をなし得ん。小才と器用とによりて塗抹僅に文をなす輩の、精力早く殫くる何ぞ怪むを須めん。而してまた彼等が名を競ひ利に走りて漫りに多作するも、力分るれば則ち堅からず、これも亦精力殫き易きの所以たらざる能はず。嗚呼今日の文士に寄語す、多作する勿れ、小成に安んずる勿れ。修養せよ、堅忍なれ、庶幾くは以て大に爲すあるに足らん歟。(廿九年八月稿)

大不平なれ

小事に忿々し、つまらぬ事に慷慨するは小丈夫の事、吾人は敢て然れといはず、然れども、吾人は今日の文學者に大作なきは、大不平なきによるものなるを信ず。大理想ありて後に大不平あり、現實世界に安むる彼等小成樂天家は何をか知らむや、彼等畢竟大理想なきなり、故に大不平なきなり。そもく現實の世界は人間の世界なり、到底純潔雪の如くなる能はず、常に勢利の俗塵に汚さる。詩人は美を謳はんとするもの。彼は美神の靈化を被りて、其心清きと玉に似たり。玉の如きの心豈に一點の俗塵だもこれに觸るゝを屑しとせむや。彼の理想は常に此現實と支吾す、是に於て撞着あり、衝突あり、其心悶々抑々んと欲して抑ゆる能はず、是に於て乎大不平あり、鬱勃の氣訴ふるに所なく、迸發して詩となる、故に詩に熱血ありて能く人を動かす。故に大詩人は常に現實に向ひて大不平ならざるを得ず。大不平なきの詩人は猶ほ是れ俗界の小人の、大不平なれや、大不平ならざる能はざるものたれや。(廿八年五月稿)

文士の徳義

昔者、春秋の時晋、楚と戦ふ。晋の將郤至三たび楚子の卒に遇ふ。郤至も楚子を識る、楚子を見れば必ず下り、胄と免いで趨風す。楚子工尹襄をして之に問ふに弓を以てせしむ、郤至客を見て胄を免いで命を承け之を謝し使者を肅するもの三たび、使者

を肅して退けり。それ戦は事の最も急なるもの、而して古は此間に立ちて猶禮讓此の如くそれ慇懃ありき。今の時文士の文壇に立ち事を相論するや、彼等も猜忌の目を以て相みる、瑕を抉り、疵を剔く、唯他の過なからむことをこれ恐るゝなり。枝葉に涉り末節を執りて相争ふ、甚だしきは私行を許さず、人身攻撃に涉る者すらあり。嗚呼、此の如くにして文士の徳義なる者は何くにかある。文士の胸襟は洒々落落霽天光日の如くならんを要す。何ぞ今の文士の偏狹にして寛裕ならざるや。文士の筆鋒を交ふるは公の事のみ、眞理の爲めに相争ふなり、敢て私の怨の爲めに然るにあらざるなり。然るに相忌み、相猜み、非難につぐに罵言を以てするが如きは、私を以て公に混するなり。既に眞理の爲めにして私怨の爲めにせず、其争ふや正なり、公なり、須らく相譲り相謙し、辭禮を篤うして相對すべきのみ。今の文士の行の如きは昔の相戦ふものだにも若かず。猶これをしも堂々たる文士といふ歟。熊と八との喧嘩を以てするも、一たび怒れば四拳雨打、而かも鬪やめば渙然として意釋け膝を交へて談笑舊の如し。今の文士洒然たること、よく熊と八との如きものすらある歟。今の文士なるもの、其量豆の如く小に、渾身猜忌の念を以て満たさる、名は眞理の爲めにすといふも、實は私の怨の爲めに争ふなり、確執して相下らず、會々洒然として磊落なるものあるが如きも、

其内心猶憤怒の修羅を燃やして其聲を鋭ふに過ぎざるのみ。嗚呼今日論争の盛なるもとより斯學の爲めに祝すべきや論なし、然れども私の鬱憤を晴らさんが爲めに、故らに難を構ふるをもとむるが如きは文士の徳義にあらず、噫。(廿九年一月稿)

文士の禮讓

誰れか文士に體讓を要せずといふや、誰れか辭讓を俗世界の事のみなりといふや。偏狹の徒何をか知らんや、文士の胸襟は濶、海の如くならざる可からず、寛々として迫らず。筆鋒をとつて相争ふも猶其の間綽然たる餘裕あり、故によく謙りよく讓る。今の文士往々にして驕傲自尊、輕蔑の語を放ち、侮慢の言を挾み、事の理を論せずして、先づ其論する者を擠倒せんとす、或は自己の博識を衒ひ、或は自己の強記を慢し、揚々としてか山の大将己れ獨りなると信せるなり。嗚呼此の如きは寧ろ憐むべし、彼等は自らの量を識る能はざるなり。よく自らを識るものは、自らの長所を知ると共にまた、自らの短所を知る。其長を知れりと雖もまた其短を知るが故に、よく謙りよく讓る。自ら負ふ者は、自らの長をみて短をみず、既に短をみず故に其長をみると大に過ぐ、山鳥のをろの水鏡、溺れて死なすんば幸のみ。傲慢の言、自負の語、一時を瞞して世の愚

衆を威嚇するはあらむ、而かも此の如くにして世の嘖々を博し得たりとするも、虚名何の用ぞ。謙讓は怯懦に近しといふ莫れ、謙讓はよく自らを識る、既に自らを識る故によく自ら信ず、世を擧げて之を誹るも憂ふる所なきなり。世を擧げて之を譽むるも喜ぶ所なきなり。世の毀譽を以て一毫これを其心に加へず、自ら其信する所をなして悔みず。以て千百年一人の知己を待たば則はち可なり、何ぞ一時を瞞着し一時の虚名を貪ることをこれなさんや。嗚呼謙讓は文士の美德なり、謙讓は輸するあるにあらざるなり、自信の極のみ。他に輸するあるが如くにして、而かも自ら地歩を占め得て高し。讓なる哉、謙讓なる哉、文士は謙讓を要す。(廿九年一月稿)

九十二

書を讀めよ思を鍊れよ

吾人は小説家に必ず洗禮を受けよとはいはず。必ずカントの純理批判を繙とけよとはいはず。唯吾人は今の小説家が活ける宗教家となり、活ける哲學者たらんことを欲せずんばならず。今の小説家はあまりに淺薄なり、あまりに鄙猥なり、高遠なる理想なく、熱烈なる信仰なし。吾人は敢て理想と信仰とを以て、直ちに詩なりとはせずと雖ども、高遠なる理想なく、熱烈なる信仰なきが故に、其作る所、淺薄に、鄙猥に、徒

らに人の嘔吐を催すのみ。宗教の文學にあらざる我之を知る、哲學の文學にあらざる我之を知る。然れども小説家たる者は高尚脱俗の氣品を有せざる可らず。之を有せんと欲せば、彼等は哲學の乾燥なる理論を解せざるも、哲學者的高遠なる理想を有せざる可らず。宗教の繁雜なる儀式をなさざるも、宗教者の熱烈なる信念を有せざる可らず。吾人は小説に倂倂なる理窟を挾めといはず、又勃率なる教理を説けよといはず。唯此高遠なる理想を己に有して宇宙を觀よといふのみ。唯此熱烈なる信念を有して人事を觀よといふのみ。既に此の如きの理想と、此の如きの信念とあり、假令寫す所汚濁の境醜陋の地にありと雖も、其汚濁醜陋は醇化せられ粹化せられて、水晶の瑩々中に裏まれたる雜草の如けん。所謂大詩人なる者は、系統なき哲學者なり、神に祈らざる宗教家のみ。彼の哲學觀、彼の宗教觀は彼の詩に活現す。論理と祈禱とを假らずして、直下に人を感化す。嗚呼今の淺薄なる皮相なる醜陋なる鄙猥なる小説家。汝が爲す所何ぞ、汝が爲さんとする所何ぞ、汝等が得んとする所は、一頁幾何の稿料か、雜誌新聞の好評か。陋也醜也、更に退て書を讀むと三年、思を鍊ると三年。而して再び出で來れ。

天才と狂熱

九十三

天才は一種の狂氣のみ。狂者が神経の作用に異状あるが如く、天才者も亦其神経の活動一方に偏傾す。狂者が理性に缺けたるが如く、天才者は感情にのみ富む。既に其神経の活動一方に偏して而して感情に富む、感情は熱する者、天才者が一種の狂熱を有する蓋し已むを得むや。天才と狂氣と相去る一髪、天才者が往々にして狂氣する亦是が爲めのみ。既に天才者は狂熱を有す、故に能く其渾身の心血を注ぎて同情す、彼は常に熱す、冷かならむと欲するも得ず。情の激する所彼は哭し彼は憤る、常識の者に有つては些少の刺激を與へざるにも、彼は則ち大に之に感じ、之にうたる。彼の感するや大、うたる、や大、故に之に向つて激するとも亦大、血燃ゆる情熱す、發して詩となり文となる、其文其詩、一種の狂熱を帯びずんばならず。天才者の詩と文との生氣なるもの、皆此狂熱なるのみ。

顧みて今日の文界をみる、果して能く此狂熱あるものあるか、吾人は唯露伴にこれあるを認むるのみにして、諸他の所謂小説家の如きは唯器用を以て之をなすのみ、眞に天才あるものには非ず。器用のもの爲す所は矯め、飾り、僞る。彼等は眞に同情せずして或は泣き或は怒る、怒り且つ泣くと雖も、而かも一點眞情の人を動かすに足るものなし。彼等は狂熱なし、故に感情なし、感情なし故に情熱なし、情熱なし故に活

氣なし、彼等の文字は絢爛なるも而かも死せるの文字なり、彼等の想は如何に奇なるも而かも死したるの想なり。天才者は之に異り、飾らず、僞らず、感ずる所をとつてありのまゝに之を言ふ、自家の感情を發露して作爲を須めず、渾身の血をふるひ渾身の涙を揮ひて哭し且憤る。故に其文其詩、情熱あり、活氣あり、靈火燃ゆる異采煌耀す、假令其文字は杜撰に、其想は荒唐なるも、猶よく人の同情を喚起し、惻然としてかなしみ惕然として畏れしむるものあり。嗚呼今日器用なるの文學者は蠢々として世間に滿つ、然れども此の如きの輩は斗筭の徒、豈にいふに足らむや。狂熱燃ゆるが如き天才者、眞詩人出でずむば、明治の世は小説の反古籠たりしのみとしてやまむ、何人か不朽の名を垂れ、不朽の名をなすべき、噫。(二十八年十月稿)

今の文士を海に放たん哉

沓々漫々極目際涯なし、大なる哉海や。境はよく氣をうつす。吾人は悉く今の文士を放つて海に浮はしめんことを思ふ、或はこれ洋々朗濶の境、よく局促たる文士の心胸を化せしむるを得ん歟、狺々相吠ゆ、溽暑の節彼が咆哮の聲しきに堪へず。(二十九年八月稿)

人身攻撃

人身攻撃必ずしも非ならず、必ずしも不徳ならず、文士事によつて相争ふに當て漫りに私行を許くは固より不可なり。然れども吾人は其相争ふの問題に關聯せるの限りに於ては人身攻撃必ずしも不可ならざるを信す。且つや人身攻撃なるものは一己の私行を許くの謂、彼の其人の特性品格を云々する、何ぞこれを人身攻撃といはんや。(二十年八月稿)

田舎の氣風

眞に都門の風塵を厭は、直ちに去て無跡の山中に入れ、荒漠の海邊に去れ、風塵を厭ふて猶無人の境にいる能はず、彷徨して田舎安逸の氣を吸ふは人をして死せしむるなり。人は奮勵の氣あるか故に活く、而して人は安逸に忤れ易し、田舎の安逸に忤るれば、即ち奮勵の氣なきに至る、刺撃なし、故に氣燄なく、活火燃ゆる、無能無爲にして則ち終らんのみ。詩人文士、時に江湖に放浪するはよし、境の變するは氣を蘇せしむるあり、然れども田舎に住ましむる可らず。既に老いて野心なき、熱血湧かざる

に至りては、田園の閑寂冲澹の間に處るを妨げず。青年をして空しく田野に置くは、これ青年を殺すなり。情火燃ゆる熱血わく、青年の意氣こゝに在り。安逸は此意氣を銷耗せしむ。田舎を以て詩人の好栖處なりと信するは誤れり。田舎は詩人の好詩料たらん。然かも田舎は詩人の好栖處に非ず。(二十九年十二月稿)

今の新聞紙

甚しい哉、黨異の弊や。各其合する所に黨して、異を其合はざるに樹つ。黨異なるもの必ず偏する所あり、既に偏す、其觀察必ずや公平なるを得ず。互に我醜を匿して、他の醜を摘し、他の美を貶して、自らの美を揚ぐ。此の如くにして互に相闘ぎ、相罵る。紛々擾々、窮已する所を知らず。而して今日黨異の弊の、最も甚だしく見られたるを新聞紙となす。抑も新聞紙の職とする所は公平に、迅速に、社會の事實を報道するにありとす。而るに今日吾邦の新聞紙各其黨する所に従うて、筆を曲げ、文を舞はして、己を利し他を傷けんことをのみこれ計る。於是乎、黨を異にする二個の新聞紙をとり來つて相對照せば、一事にして二様の記事あり。何れをか取り、何れをか捨てん。讀者をして茫々として其真相を知るに迷はしむ。此の如きもの豈に眞によく新聞

紙の職任を忠實にせるものといふを得んや。二様の記事あり、其着眼に二様ありて然りしものならしめば猶恕すべし。故らに私を挾みて、爲めにせんとするの念ありて、其事を曲げたるあるに至りては之を何とかいはんや。糊塗曖昧人をして五里霧中に彷徨せしむるが如きは、寧ろなきに若かず。況んやまた動もすれば其公黨の争たるべきものを以て、私行の上に及ばし、筆端往々にして人身上の攻撃に涉るが如き、吾人をして轉た黨異の弊を嘆せしめずんばあらず。吾人は國家一日も、天地の正理公道に則り、國利民福を増進せしめんとするの政黨のなかる可らざるを信ず。而かも徒に政權の攘奪を以て、其主義とし、大臣の椅子を以て其目的とする、所謂今日の政黨なるもの。在て何の益するあるを知らず、なきも以て國勢の隆替に害なきもの、吾人は寧ろ此れなきの勝れるに若かざるを知る。政黨だも猶然り、政黨に偏私する新聞紙、吾人は新聞紙として何の益なきを知る。それ新聞の、主義によりて立つ、主義を以て相争はんとせば、これが爲めに設けられたる社説の欄あり。堂々として旗幟を鮮明にして此所に相見ゆべし。事實は事實なり、事實を曲ぐるの則ち世を欺くなり、事實の報道は、其傳聞せしまゝをとり來つて、ありのまゝに其事實の真相を以てすべし。何ぞ筆を弄して爲めにするをなす可けんや。嗚呼今の政黨や、今の新聞紙が黨異の弊、此の如き

ものある所以のものは、畢竟するに、當世吾國人民の局量狭小にして、光風霽月の襟度なく、拘々促々常に猜疑と、嫉妬との眼を以て相對するによらずんばあらず。今の我國民之を鼓吹するに、濶天廣地の大思想を以てするにあらざれば、到底島國的規模を免るゝ能はざる歟。噫。(二十九年十月稿)

青年の意氣

青年の意氣唯だ猪進あるのみ。左顧右眄せず、逡巡猶豫せず、一氣呵成直ちに希望を捉へんとす。其見得る所唯希望の光あるのみ、關門をみず、荆棘をみず。荆棘は之を披かんのみ、關門は之を破らんのみ、利害と成敗と、すべてその顧みる所にあらず。得ずといふことを知らず、唯爲さんといふ事を知るのみ。渾身是野心、滿肚唯霸業。而して直ちに爲さんと欲する所を爲す。青年の鋒鏘、青年の活火、實に此にありて、燃やし盡くさずんばやまず、斫り盡くさずんばやまず。故に青年は破壊的なり、革命的なり。客氣なりといふ莫れ、遠慮なしといふ莫れ。斡天旋地の大業は所謂老成の徒の能くする所に非ず。所謂老成なるものは多く世故を経たるなり、世故を経ると多きものは事に當て計較の念多し、故に狐疑あり、猶豫あり。猶豫あり、狐疑あり、勇往

する能はず、直進する能はず。故に蹉跎少しと雖とも、破綻少しと雖とも、而かも遂に業を創め難を首むるの勇あるなきあり。首めすんば成らず、往かすんば進まず。青年をくれば終に進取なきなり、活動なきなり。活動なくんば腐敗す、進取なくんば沈滞す。新陳代謝は萬物の法なり、進化開展は宇宙の則なり。故に天下青年を少く可らず、少く可らざるは意氣あればなり、青年にして青年の意氣なくんば、天下竟に青年なきなり、青年は即ち青年の天職あり、破壊のみ、革命のみ、革命せよ、破壊せよ、爾の天職は唯是のみ、爾は敢て遠慮を街ふを須めず、沈重を粧ふを須めず。沈重と遠慮は爾の事に非ず。唯破壊せよ、革命せよ。破壊し革命すれば爾が事畢る。而して今の世、果して破壊を要するとなき歟、革命を要する事なき歟。政治界は知らず。宗教界は如何、文界は如何。文界は沈滞せずといふ歟、宗教界は腐敗せずといふ歟。今の状を以てして猶腐敗せずとする歟、沈滞せずとする歟。沈滞あり。腐敗ありて革命何が故に來らざる、破壊何が故に來らざる。來らざるは人なき歟、青年なき歟。青年あつて、意氣なき歟。今の吾國の青年は終に青年の意氣なき歟。起てよ青年、起て革命の健兒たれよ。見よや烽烟既に颯れり、革命の機は熟す。彼の本願寺の改革運動を見すや、新進作家の歓迎せらるゝを見すや。文界に教界に、革命の機は既に熟せるを見

すや。方には青年の士鷄聲をきいて蹶起すへきの秋にあらずや。青年よ起てよ、革命の健兒よ起てよ。起つて現時の腐敗と沈滞に一刷新を興へよ、一激動を興へよ、此輩唯青年の士にまつべし、爾が意氣を奮ひ爾が勇を鼓して、而して爾が青年たる所以の天職を全うせよ。(三十年一月稿)

青年諸卿に檄す

所謂藩閥は青年の前途を遮ざる重關也。所謂元老は青年の進路を障ぐる荆棘也。吏閥は青年の登第を妨げ、學閥は青年の才能を壅ぐ。學閥は青年の敵也、吏閥も青年の敵也。元老も藩閥も青年の敵也。すべて閥閥は、青年の敵也。吾人は、必ずしも青年諸卿を嗾して政治に容喙せよとはいはず、又政界に狂奔せよとはいはず。然れども、今日閥閥を打破するは、壅塞鬱閉を擘開する所以也。諸卿をして、志を伸べしむる所以也、青年の時代を致す所以也。春老い易く、青年老い易し。閥閥をして永く其跳梁を擅まゝにせしめば、青年諸卿は、それ何の時に其志を伸べ、其材を盡さん。其材をつくし、其志を伸ぶるに機なくして、頽齡早く來らん。吾人敢て青年諸卿に寄語す。諸卿大同して閥閥に反抗するの大團を作れど。今日は封建の時に非ず、諸卿は等しく

明治の産兒也。明治維新の革命は、閥閥を打破せんがために起りたる也、明治の世閥閥ある可からざる也。諸卿は即ち平等自由の健兒として生れ來りたる也。明治の世は即ち諸卿の世たらざる可らざる也。而かも閥閥猶世に蔓延するものは、舊時代の遺物猶時を得たれば也。閥閥は時代の敵也、即ち青年諸卿の敵也。閥閥を打破するは、則ち諸卿の任也、明治健兒の任也、諸卿の時代を致す所以にして、即ち維新革命を大成する所以也。諸卿が明治の健兒として、維新革命の業を大成するは、上は以て 聖旨に答へ奉り、下は以て時代に貢獻する所以也。

諸卿學ぶ所同じからざらん、志す所同じからざらん、所志所學之を同ふせずと雖ども明治の産兒たるは一也、平等自由の健兒たるは一也、閥閥の敵たるは一也。諸卿何ぞそれ進んで反閥閥の大同團を作らざる。

所謂閥閥は、情弊の盤結なり、閥閥を打破する、洵に、易事にあらず。獨力空拳恐らくは功を收むると難し。夫れ團結は勢力也、團結大に且鞏なれば、勢力も亦偉大也。

是れ吾人の卿等青年に向つて反閥閥の大同團を起せよといふ所以也。庶幾くは以て閥閥打破の大勢力たるを得ん歟。

夫れ青年は高潔也、眞摯也、熱誠也、敢爲也、進取也、活大也、狂瀾也。彼の今日の

腐敗と沈滯とは、閥閥の餘弊にして、既に閥閥を倒して青年之に代らば、弊竇一掃齷齪紀自ら擧りて天下の面目を一新せん。此等の事唯諸卿に待つべく、又諸卿と共にすべきのみ。吾人不似と雖も、願くは諸卿の驥尾に附して、幹天旋地の大業を成すを得ば本懐何ぞ極まらん。

然れども、團結は中心を要す、況んや滿天下の青年諸卿、地相距り半面相識らず、而して大同して結ばむとせば、必ず脈絡貫通の中樞を缺く可からず。吾人幸に帝都に在り。而して筆を茲に執りて諸卿と接するの機を得ると最も多く、且或は齡に於て諸卿に一日の長たらん。吾人僭越と雖も、姑らく此擧の重さを荷はん、諸卿趨集の旗麾たらん。若し夫れ事既に成らば、自ら退きて諸卿の賢なるに譲らん。青年諸卿、吾人と志を同ふするあらば、願くは刺を以て吾人に投せよ。嗚呼滿天下同志の士、相糾合して起たん時、事を成す豈に難からんや。然れども、吾人の此擧豈に政黨的行動をなすものならんや、政社的行動を爲すものならんや。唯此心と心とを膠膝して、隱約の間に反閥閥の大勢力を養はんとする而已。故に別に綱領規定を設けず。閥閥打破を以て目的とし、社會の革新を以て自ら任ずるの志を同うするの士を招徠せんとする而已。(三十一年三月稿)

嗚呼新年

花は開き花は落ち、春は去り春は来る、一年又一年、年は節を追ふて新まり、人は年に従ふて老ゆ。老ゆるか故に人生限りあり、新まるか故に天地窮りなし、窮まりなきの天地に處るに限りあるの人生を以てす、仰げば長へに蒼々、俯すれば永く漠々、俯仰して天地に對すれば坐ろに人生の頼みなきを感じ、天地悠々たるかな、人生匆々なるかな、匆々ありと雖も長繩を以て日を繋ぎ難し。何ぞ悠々たる、古時の月また今時の人を照す。大觀すれば人生五十、一閃電、一石火。天地より之をいふ、大椿の壽もた蟬蛾の朝夕のみ。生を愛み壽を貪るも百歳倏忽朝の紅顔夕の白骨。生前の富といふ勿れ、死後の名をいふ勿れ、化して土となつて墓田の蔓草を肥やす時、赫々の名何の榮ぞ。北邙一片の煙三百の骨骸灰となつて飛ぶの時、百萬の黄金何の用ゆる所ぞ。富も望む所に非ず、名も願ふ所に非ず、況むやそれ三寸息絶へて五体空に歸するの時、我は初めて人生の匆々を辭して天地の悠々に合す。我天と共に長く、我地と共に久し。死や惡む可らず。生や愛しむ可らず。愛めども生は逝くべし。惡めども死は來るべし。出るとき之を如何、逝くとき之を如何ん。之を如何む之を如何む、我は寧ろ安然とし

て此勿々の生を辭して彼の悠々の天地に適かんのみ。

且生を愛する、生果して樂しむべき乎。死を惡む、死果して、苦しき乎。墓門苔封して死者再び還らず、何ぞ死の樂しくして然るに非らざるを知らむや。嬰兒胎を出つ其叫聲や悲む、何ぞ生の苦しくして然るに非らざるを知らむや。たゞ人の情、知るに執して知らざるに惑ひ、今に安むして當來に危む。死を惡むにあらず、死の後を怯るゝなり。生を愛するにあらず、ある所に安むするなり。生を愛するは儉安、死を惡くむは怯懦。

況むや人の生、悲にして而して苦、生れて我あれば即ち意欲動く、意欲動けば則ち神を勞して形を役す、紛々、擾々として窮已なし、何の樂事かあらむ。一死即ち萬事休す、死や虚なり、死や無なり、我なる者忽然として泯ふ、恬然として安く、杳然として靜。

且つや人生なるものは一の羈絆のみ、人生る、生れば輒ち因果法の密網に落つ、纏々繞々破れども破る能はず。人なるものは常に此因果法の制する所となりて、所謂自由なるものこれ痴人の説夢に過ぎざるのみ。爲さらんと欲するも爲さざる可らざるなり、爲さむと欲するも爲す可らざるなり。人生は畢竟繫縛のみ、唯死や解脱なり。無我の

界時なく、方なく、因果法なし、一死三世盡き十方空我は無窮となり我は無邊となる、世法の繫縛を脱して天地の悠々と合す、所謂自由なるもの死の界のみ。

何者の愚か敢て死を惡むへしとし生を愛すへしとする。死は平靜なり、生は紛擾なり。死は自由なり、生は羈束なり。誰か敢て平靜を惡むて、紛擾を愛し。自由を惡むて、羈束を愛すへしといふものぞ。

然れども上帝の惡童、漫りに希望なるものを人生の前面に繋けて人をして其幻影に迷はしむ。而かも咄、希望なるもの何ぞ、一個の迷妄のみ。それ人生に實なる唯現在あるのみ、過去は夢を説くのみ、未來は風を捉へんとするのみ。希望なるものは此未來の幻影のみ、自心所作の迷妄のみ。有るが如くにして實は無し。憐むへし世上慣々の徒、此希望の幻影に誑されて、暫く人生の苦痛を忘る、此影を追ひ、此風を逐ひ、狂奔狂走、汗流れ氣絶ぬ、奄々として仆れすんばやまず。嗚呼過去追ふ可らず、未來確たり難し。此今の唯我に實なるを知て而る後吾は虚假の迷妄を脱して眞に人生を知得むのみ、此時生何をか愛まむ。

今や明治二十八年は逝て二十九年まさに來る、嬉々として屠蘇に酔ひ、雜煮の腹を鼓するものは無知いふに足らざるのみ。漫りに悟を裝ひ、正月を人生の一里塚として

戚々として憂ふるものまたいふに足らず。唯吾人は新年を以て人生の平靜なる自由なる死の門に一步を進め得たるものなりとして之を祝す。夜深く山空し、萬籟死して星斗ひとり爛々。ヒ首をとつて空を仰いて長嘯、満身の汚氣を吐き盡し呵々として大笑すれば、山響き谷應へて蒼天傾欹、星珠翻れんとす。紫電一闪、血大空に迸つて、此時我は天地の寥廓と合せん。

筆を焚くの記

嶺雲子愚憨、願貴に資縁して祿を得るを解せず。不遜、權門に叩頭して哀を求むるをなさず。疎懶、簿書堆裡に埋頭して生きたる機器たる能はず。淺學、文字の師となりて兒童に傲るに足らず。徒に疎大の志を懐いて、空しく方丈の室に偃蹇す。食を得るの途、我に於て唯一枝の筆あるのみ、その檢束を受けず、自放自恣なるを得る頗むる我性に適するありと雖とも、而れども日夕の需の急なるや、やむを得ずして往々に筆を役すると多く、筆を役すること多ければ賣文の謗従て起る。我と雖とも賣文の賤しきを知るなり、然れども我に此口腹あり、食はざれば活さず、活さんか爲めには賣文またやむを得ざるに出づ。自らもまた食はんが爲めに往々此の如くなる

を愧つ、往々にして刃を執て萬事を休せんと思ふ。而かも怯懦猶未だ死する能はず、碌々として此口腹を養ふに忙はし。嗚呼賣文の謗姑く甘して之を受けざるを得ず。而かも我れ文を賣ると雖とも、未だ小心、今の所謂大家先生の如く其價を論して之を賣る大根燐寸の如くする能はざるなり。且つや我の克制なき、數夕を徹して草し得たるの文、之を賣て幾許の阿堵に換へ得るも入れは即ち手に從て空し、囊裡餘錢あれば、慊々として心に安むせざるを覺ゆ、酒家酔倒して毛厘を遺さざるに至らすむはやまず。日夕の需にこれ急にして、而かも錢あれば則ち散し盡す、散し盡せばまた之を賣らざるを得ず、文を賣ると多ければ從て文を草する多からざる能はず、文を草すること多ければ從て強て文を作らざる可らず。興到らざるの時も、神饒なたるの時も、枉げて筆を執り紙に蒞んで呻吟せざるを得ず。會心の文成ると彌く少にして、而して文の世に出つるもの彌く多し、文の世に出つること彌く多くして、我が名字のあらはるゝと漸く頻りに、於是、人は我を嘲て、虚名を買はんとすといふ、之れをいふは我の實の名に副はざるを咎むるのみ。我もまた實の名に副はざるを知る、然れども我豈敢て名を買はんか爲めに文を草せんや、寧ろ我が文の名を博し得らるべきを思はんや。實の名に副はざるは我と雖ともまた之を愧つ。然れども我未だ死する能はず、食はざ

るなき能はず、食ふか爲めには文を賣る多からざる能はず、賣ること多ければ名字の漸く人に知らるること多きを加へん歟、水到れば渠自ら成る、これもまた自然の勢辭して免るゝを得可からず。強て自ら免るゝを得可からずとするも、實の名に副はざるや其名や虚なり、人之を嘲て名を好むといふも、我何を以て乎其然らざるを辯せんや。やむぬる哉、已ぬる哉、賣文の誘、好名の嘲、嗚呼我甘して之を受けざる可らざる歟。是に於て乎我筆硯を焚て暫く世と絶んとを思はずんばあらず。

あらずゆる我書を賣り、あらずゆる我衣を典さば以て二月の糧を得べし。之を齎らし會心の書二三を袖にして深く山峯の中に入る、既に飢ゆるの急なくまた心をみたすの塵縁なし。境幽に人寂たるの處、靜坐默思、朝に流水を觀し、夕に天象に鑑む、宇宙無文の文を讀み、之に參するに古哲無言の語にさくを以てす。殫思研精、根抵既に牢く、素養既に充つるに及ばずんば人間に出でざらむ。此間また決して漫りに筆を弄して文を爲さじ、筆を世間に絶つと久しければ、賣文の誘以てやむべく、實を充たすと此の如くにして好名の嘲以て解くべし。二月にして我再び出でずんば、我志未だ成らざるなり我糧既に竭きなば我は山菓を拾ひ流泉を掬んで我志す所に猛進せん。一年にして我猶出でずんば、鴛質我は望を我に絶つの時なり、出で、再び賣文の誘、好名の嘲を受けん

よりは、我は寧ろ飢て此山中に死せんには若かず、菓をも食はじ泉をも飲まじ、體羸れ、神疲れ、奄々として、氣息絶へんとするの時、空山月黒きの夕我は我舌を嚙み、満口の血を含んで天を仰で彼の爛々たる星斗に向て噴かん。

山に入らんとして先づ筆を焚く、數十の秃筆をとつてまさに之を火中に投せんとす、その獨り筆を焚いて硯墨に及ばざるものは他日に期する所あればなり。我の墨を折り硯を碎くの時は我命も共に終るの時なり、筆をのみ焚くは我再び出でんとを思へばなり。既に之を火中に投す、祝して曰く我再び出で来るの時願くは吾文もまた炎々たること此猛火の如くなれよと。筆既に燃へ餘焰一道我に向て吹く、嗚呼汝我に恨むるある乎、將た我を憐める歟。

京 を 去 る の 辭

嶺雲子既に筆を焚て山に入る、山に入て遑々安を得ず、幾もなくしてまた山を出つ、山を出て、西都に遊ぶ、山紫水明の境猶安むして久しく處る能はず、促々として江都に歸り、復紅塵の裡に入る。紛囂を厭ふて山に入れども山に安むせず、而して紛囂に入ればまた山を思ふ。遑々たる哉、促々たる哉、我何の地にか安を得む。再び京を出て

作州に赴く、我果して安むして作州の山水に處るを得べき乎、山は翠に水は清し、而れども我果して安むして永く此間に處るを得べき乎。然れども此行處ると短くとも一歳ならざる可らず、長ければ則ち三四歳より四五歳に至るまた知る可らず。京を去るに臨んで悵々として情に禁ぬざるものなくんはあらず。

想記す我始めて京に入るの日、實に明治二十三年の正月にあり。爾來七裘衰、書劍都門に麴零す。迂愚にして時とともにするを知らず、疎狂世に背いて徒らに偃蹇。酒を被つて姑らく鬱懷を忘れ、筆を驅つて僅に不平を遣る。不平迸る、筆を驅れば、人は我を稱して漫罵すといふ、鬱塊開き難し、酒を被れば人我を稱して荒蕩なりといふ。荒蕩か漫罵か我之を知らず、我はたい我云はんと欲する所をいひ、爲さんと欲する所を爲す、文を賣て僅に日夕の需に當つるも、此筆未だ曲けて當世に阿らず。衣を典して時に酒錢に資するも、此腰未だ折て權門に媚ひず。世舉て我を謗るも我疚しからず、我を惡むも、我耻ちす。唯我は永く我狂愚を抱いて都門に老んことを欲せりき。我愚我狂、紛囂と雖ども唯都門ありてよく我狂と愚とを抱いて其紛囂の間に混するを得るのみ。紛囂を厭ふて時に沸然として都門を去るあるも、一片の意氣猶未だ全く銷せざるものあり、斷々として都門を去るに意あらざりき。

然れども我に垂白の堂にあるあり、慈愛其老を忘れて日夕唯我狂愚をこれ憂ふ、而して不幸の兒都門に流落して久しく膝下の奉養を欠く、罪甚た重し。且つや既に齡古稀に近し、哺育の鴻恩今にして早く酬ひすんば、風樹の恨永く我に従はん。嗚呼、我狂我愚、時に容れられず、世に背く我憂へす。唯我想ふて此に至る腸寸斷せすんはあらず。都門を去る我志にあらすと雖ども、我は我志を屈するも、永く不孝の兒たるに堪へず。志を屈してこゝに作に赴く、唯歡を膝下に奉するを得ば我願足る。何ぞ功名といはんや、意氣といはんや。

去らん哉、去らん哉、斷として我は都門を去らん。意既に決す、躊躇男兒の事に非らず、京を去ると非邪、留ると是邪、是と非とは我問ふ所に非らず、我は斷々として去らざる能はず。

去るに臨んで京地汝に謝す、汝の風塵は我惡みし所と雖ども、よく我五尺の狂軀を藏して、容れられざるの時、背きたるの世に立つを得せしめしもの詢に汝の恩あり。七星霜、短きに非ず、此間汝に負ふ所多し、我汝に謝す。我命あり再び京に入るを得ん時、嗚呼我は一村夫子たらん、一村學究たらん。而して汝の山水は依然東台は聳へ、墨水は清く、此時我汝に對して愧つると多からん。想來れい去らんと欲してまた去る

に忍びざるものあり。

京を去るの日、細雨蕭々。作に入るの日、また細雨蕭々、嗚呼皇天何の情ぞ、噫。

歸を懷ふ

嶺雲子、怏々憂を抱いて、京を去て作の山中に入る、目を擧ぐれば山川の異ありと雖とも、以て我心を慰むるに足らず、雨に、風に、歸思切りに動く、來つて二閱月、一たび去て京に歸る、京に在ると一月にして、再び作に來れるは、大海より移つりて汚池に入るの魚に似て、益々歸思の切なるを覺ゆ、山水のよからざるに非ず、風氣の厭ふべきあるにもあらず、唯我が疎狂、都門の大にして始めて容れらるゝを得べきのみ、容れらるゝに非ず、我の如き斗筭の徒、人の我を顧みるものなし、故によく此に於て人の爲めに怪しまれざるを得るのみ。地窄ければ人寡し、人寡し、故に一擧手、一投足、人の囑目を免れず。而かも我れ、性を矯めて温順恭良を粧ふ能はず、故にわが疎狂に愕き、且訝るもの彌々多し、且つや我が職、育英にあつて、而して育英の事の如きもと疎狂われの如きもの、任するを得べき所に非ず。徳の以て人の表たるべきなく、學の以て人に教ゆるに足るべきなし、われの如きは唯當に天地間一拘束なき浪

人を以て終ふべきのみ。年長け徳高く、人の儀表たるべきものにして、始めてよく人の子弟を薰陶滋養するを得べきのみ。所謂文明の化に浴し、太平の治に遊ぶものは、奇矯なる可からず。豪放なる可らず、故に今の人を教育するや、唯よく國法に遵ひ、國憲を重んずる、所謂圓滿の民をつくらんとするにあるのみ。疎狂我の如く、頑拗我の如きもの、豈に啻にこれを則らしむ可らざるのみならん、寧ろ之を今日に容るゝだも不可なり。聖世に遭遇して頼に今に頭を繫くを得るのみ。我豈に厚顔、人の師と稱するに堪へんや、豈にまた恬然として人の子弟を托せらるゝに忍びんや。

地の僻邊なる、用度の便を欠く、寧ろ我が堪へ得ざる所に非ず。然れども拘束、羈絆は我が決して忍び得る所に非ず、人或は之を放縱なりといはん、然り放縱ならん、恣肆ならん。然れども、我が疎狂たる所以實にこれにして、我は或外他の力に制せられて、自を檢束する能はず。我はわが爲さんと欲する所を爲し、行はんと欲する所を行ふ。而かも自ら毫も其間に私心を着けず、爲めにする所なきを信ず。我は自ら之れをなし、之を行ふて、自ら顧みて疚しき所あるを感せず。唯或は情の激する所、匪行に陥らざるを保せず。有之らば我甘んじて其咎に服せんのみ。

圓滑洒脫は處世の秘訣なり、髯を拂ひ履をとるもと仕進の上策あり。然れども父母の

我を生みしや、項徒らみ強く、人に向つて底頭するに堪へず。我は永く我疎狂を抱いて、此疎狂と共に老いんとす。我疎狂を以て五斗米の廉に易ふる能はず。

且つや、我れ生理の計に拙し、然れども黄金手に従ふて空しく、囊を傾けて一擲す、人間快心の事、寧ろ此裡にあり。入ると假令多きも、囊裡の満を得ず、少きもまた空。等しく空しければ、何ぞ數々として人前に折腰して錙銖の爲めにするを要せんや。口を糊すれば足る、食ふ能はずんば即ち自ら死せん。我は寧ろ仰天俯地、一繫縛なく一制抑なき、生涯を擇ばんのみ。

嗚呼都門の風塵を厭ふて山に入るも、山に安んずる能はず。山を出て、歸り、忽ちにしてまた作に来る、作に来つて未だ半歳ならず、都門に倦々として獨り自ら煩悶す。我心の定操なき、我自ら作づ、自ら作づると雖とも、猶忍んで此に留る能はず。東台の山、墨陀の水、豈に之を山間自然の秀麗に比するに足らんや。都門の俗塵は我之を厭ふ、而かも坐して田舎の安逸に慣れて意氣の銷沈に任す能はず。

肉体に安逸なれば精神に死す。我れ半生の苦學人後に落つと雖ともまた一片の霸氣存して胸に在り。野心猶ほ内に燃ゆ、熱血脈絡に沸く。半死の白頭は知らず、我は冲澹閑寂の清趣を味ふて、田舎の間に夢死する能はず。

我自ら思ふ、蒲柳の質、齡四十を出でずと。餘生幾許ぞ今に當つて須らく奮ふべし、一日を経るは則ち一日の成功を失ふなり、一月を経るは則ち一月の成功を失ふなり。而れども人生不如意我之を知る、我は今にして即ち此を知る能はざるものあり、去れば則ち言を人に食むの過あり。知らざれば此疎狂を如何せん、歸らん歟、嗚呼何の日か歸らん。

閑中適意(一)

丙申の歲三月、嶺雲子山に入らんと欲し既に行季を整ふ、事ありて果たさず、依然京城俗塵の裡に蠢々すること又一月。節、陽春に入りて滿都花將に開かむとす、群俗と共に醉笑して花神を瀆すに堪へず、忽々結束四月三日を以て程に上り函嶺に入る。意もと喧擾を避けて靜中に神を養はんとするにあり、故に湯本に行かず、塔の澤に行かず、宮の下に行かず、三里の險を踏むて蘆ノ湯に来る。先是笹川臨風三月十九日を以て京を發し、峽中に入り、甲より駿に出て、沼津より函嶺に来て予と會するの約あり、到れば既に在り、一浴し出て與に飲む、一腥膻の膳に上るなし、臨風頗る不平、而して予甚た肉を嗜まず寧ろ蔬菜の淡を愛す、故に敢て之れを意とせず、唯當時農間に際

し、來り浴するもの甚た多く、深夜尙高語放笑ためにわか夢の攪さるゝと屢なるを憂ふ。静を山中に求めて終に静を得ず、人生爲樂の地終に之れ寂滅歟。

湯本より此地に來る、人を傭ふて行李を擔はしむ。途上之と相語る、問ふ汝輩何事か最も樂しきと。曰く賭博と、飲酒と、漁色とこれのみと。彼又曰く我等役々として劬勞す唯樂まんが爲めのみ、樂まんことを欲せずんば逸座何事をもなさざらんには如かずと。嗚呼人生畢竟此の如き而已、此の如き而已。四日臨風と箱根の古驛を訪ふ、古關の跡蔓草徒に茂り春風恨を吹く。湖畔の三景樓に飲む、此の日風軟にして湖水波起らず、滿江の綠倒まに富岳の白芙蓉を蘸して一片の帆影山の缺くる所に挂かる、眞に是好風光。然れども之を中禪寺湖に比す、温雅はあり、奇峭はなし、想ふ我れ中禪寺に遊ぶの日、節、初冬にあり、枯葉を踏んで湖畔に歩す。細徑僅に通し、人來らず、俯すれば深草藍の如く、仰けば山瘦せて寒樹二三あり。宛然として一幅寒山枯木の畫圖景象今猶目に睹るか如し。而して此地湖畔家あると僅に三四箱根の人烟に似す、且湖の水蹙つて崖に落つる所懸つて華巖の瀑となる、琴々遙に聞て猶身の粟するを覺ゆべし。函湖遂に此奇を見る可らず。我は寧ろ中禪寺湖をとらん哉。

旅舎、客の來ると彌々多くして喧擾彌々甚しく、唯午晝人なきを窺ふて浴す。四邊沈々

人語達せず、唯湧泉の沸々たると鳥語の間關たるを聞くのみ。槽側に仰臥し石を枕にして窓隙より行雲を觀る。世機一切忘々。此裡靜閑の趣いふ可らず。六日臨風去る俄に寂寞、獨坐悄然無聊甚だし。夜に入て雨ふり翌に至て晴れず、益々徒然偶、臨風と峽中の行を共にせし澁江氏、沼津より戸田に赴き歸京の途次、此日雨の爲めに滯つて此家にあり、來り訪はる。酒を喚ひて歡談、朝より午に至る、午後に至りて風加はり雨益々急、此夕また氏と飲む。此前夜臨風と飲みて此家調し得る限のあらゆる下物を啖盡して猶飽かざる色あり、此夜また然り。婢等其健啖に驚く、蓋し啖ふの健に非ず啖ふ者の少きなり。夜に入りて風益々暴れ雨益々急、三層樓搖蕩船の如く終宵眠を就さず。京都に在る金蹉跎の書を領す、書中いふ故都の花將さに咲て君を迎へんとす、江陵千里一日にして飛んで此地に下らば如何と。先是藤岡東圃も亦數々頻りに書を寄せて切に西下を促かし、いふ萬卷の書を讀ますんは、千里の途を踏破せんには若かずと。我意猶豫未だ決せずして茲に來る。意暫らく靜かに書を讀まんとするにありて、而して喧擾此の如く書を讀むを得ず、文を作るを得ず。心中焦悶金蹉跎の書を得るに及んで遊意勃發嵐山の曾遊を追懷し神遠く西都に飛ぶ、此夜夢魂嵐峽を遶る。

此日蘆湖産する所の鮠魚膳に上る土俗之を赤腹といふ、味鮎に似て更に淡、亦好下物

たり。惜むらくは臨風と共にするを得さりしを。

九日下樓に切々たる粒聲をきく、之をたゞけば瞽者の按摩を業とするもの、月琴を彈するなりといふ。喚來りて之と語る、細に彼等修業の狀をきくを得たり。其の師の其弟子を遇する酷を極め、弟子等雨雪の夜と雖ども外に行くを廢する能はず、不幸にして錢を得ざらん乎、彼等は終に内に歸るの期なく或は食を給せられざるとあり。嗚呼霜氷る夜半聲あはれに流し行く小按摩の上には、苛虐の笞の常に之に臨むあるなり。嗚呼天下飽食のものは多し暖衣のものは多し、一人の此等廢人の爲めに涙を灑くものなし、嗚呼一人の此等光を見ず色を辨せず闇黒の裡に一生をわたる彼等廢人の爲めに涙をそゞぐものなし、噫。

俗客與に語るべきものなし唯旅寓の門前常に數頭の狗あり、菓を與へてこれと相親む。我門を出つれば、皆尾を掉り、頭を俛れて我に來る。中に大なるものあり、予か逍遙に伴ふて或は前んじ或は後れ、予の行くと遅ければ顧みて待ち、予に後くるれば乃ち馳せて來る。而して歸り來れば門前のものまた尾を掉り頭を俛れて來り迎ふ。嗚呼人間由來邪惡あり、險詐あり、彼の狗や至て邪氣なし、我意を人間に得ずして而して無情に得、狗や犬や我一知己なり。

閑中適意 (二)

十二日山を下て宮の下に赴く。途、小涌谷の邊に到れば山漸く蒼く溪聲また激し、山櫻、鬱樹の間を點綴して亂れ開く。大に蘆ノ湯の山麓に、一點の紅を見ざるの殺風景に似ず。宮ノ下に到り、奈良屋に泊す、庭前桃櫻方に満開、紅白爛熳。都門の春色を想ふて歸歎の心や、動く。又電を發して東圍に京都の花期未だ遅れざるや否を問ふに今方に盛早來せよといふ。意終に京都に遊ぶに決す。此日午後に至て天曇る。雲霧屋上の山を遠つて朦々開かず。明日の天候を憂ひつゝ、寢に就けば枕頭の溪聲、雨聲の如く夢魂屢々驚く。翌日に至て天猶曇る、雨ふらざるに乗じて急に蘆の湯に歸る。意、明朝を以て京に向つて發せんとす。翌曉眠寤むれば雨聲風聲を交ゆ。被を擁してまた眠る。

十四、十五日を経、十六日に至て雨猶晴れず。京都の花期に遅れんとを憂ひて、意切りに悶々す。夢魂早く飛んで嵐峽を遶る。

十七日朝、眠僅に覺むれば旭光戸隙を射る。枕を蹴つて起ち、結束程に上る。連日の陰雨盡く霽れて晴天一塵の翳をつけず日暄に風寒からず、陽春の天氣實に行旅の好期

なり。蘆湖畔を過ぐれば路漸く下る、道石を整み、歩甚だ難まず。山中宿を經、笹原に少憩、函嶺將さに出盡さんとして途彌々平。路の兩側杉樹亭々其間遙に富士を望む。我は廣重畫中の人となつて行くなり。

十八

函嶺を出盡せば則ち三嶋驛、山中の閑適茲につき、また塵中惚忙の裡に入る。嗚呼我函嶺にあると二週に近し、書を讀まず、文を爲さず、徒らに閑を貪つて閑に飽く。初め我の閑を得んと欲せしや、神を養はんか爲めのみ、書を讀まんが爲めのみ、想を鍊らんか爲めのみ、而して閑を得て却つて閑ならず閑中思慮猶動く。無聊はあり、靜閑はなし。走屍行肉、食て眠り、覺めてまた食ふ、日課唯これあるのみ、却つて閑に厭て二旬に満たすして既にまた俗中に入る。嗚呼、我心猶俗我神猶塵なる哉。若し此處にして猶靜を得ずんば、更に深く山中に入るべし。何ぞ倉皇復俗中に入るを要せんや。聞道らく達者は己を除いて境を除かずと。我已を除くと既に能はず而してまた境を除くをだにも能はず。徒らに罪を境に歸せども、山靈我に辜負するに非ず、我山靈に辜負す。修練足らず、我罪なり、我大に山靈に耻つ。三嶋驛に至りて顧みれば層嶺巍然雲表に抜く。嗚呼我罪を名山に得たり。

嗚呼山靈今我再ひ塵中に入ると雖ども、幸に命あらは復相見るの期あらん歟。我此詩

塵俗に染められて益大俗の人とされる歟。卿もまた俗客の爲めに汚されて益々俗化せられたるへき歟。此時相見て可笑せんのみ。

而かも私に期す。我再ひ山に入るの時、無人の境に入り、此に窟宅し、此に游化し、世を遺れ、粒々絶ち、我形骸を捨て、我官能を泯ぼし、露を飲み、霞を餐ひ、白雲に乗して輕舉、千嶺の上に逍遙せん哉。而かも今日俗因未了せず、猶塵縁に繋がる纓絡を解て永く茲嶺に托する能はず。拘々として塵俗の役とならざる能はず噫。

三嶋驛に至て閑こゝに盡き、適こゝに盡き、閑中適意の稿こゝに終る。(完)

荒 灘 の 月

樂みに樂しみし都に歸るなるに、如何なればかく心の怪しくも惱むらん、四の袂に綾りもあへぬ別の涙の、空に通ひてや、雨とふりしきは猶暗けれど、夏の夜の明け易く、飽かぬ名残を覺めやらぬ夢にとゞめて、悲しき幻を車にゆられくつ。顧みれば、雲樹杳に隔りて見返れとも見ぬす、漸次に遠ざかりゆく心細さを、車の歩に刻みて、其日暮岡山に着けば、水の災ありて瀛車の通路とまれりと云ふ、誰か念の我を堰かんとやせる、岡山に幾夜の旅寝くりかへす夢はかはらねどかはる日敷に重なりて途も開

十九

けぬ、西に靡く煙の末に我念を留めて、汽車の歩みのつれなくも早く神戸につきぬ、其夜は愁への夢を幾度か汽笛の響に破られて、明けの日の四時といふに船にのる。吐出す煙のみは西に靡けど、身は東に〜と遠さかりゆくうら悲しさの、暮れ行く空とともに沈みて、紀州灘に日は全く落ち、折節十五夜の月代高く東にさしのぼる、月の鏡と名にはおへど、君の俤をうつしもやらで徒らに我に物思はする。夜はしだいに更けて、甲板の上には人散り盡し、獨り満天の清光を一身に浴ひ、吹き來る海風に袖を拂はせて、椅子に凭れたるまゝ、我をらす思ひ寢の夢に入れば、語らふる言葉も盡さぬ間を荒浪の音に、覺めて見れども外に人の影もなし、夜は靜かにして、大空の月のみ我を離れてまもり貌なるも、猶思の種なれや、月さへも心ありてや、君か栖む西の空さしてぞ落つる、いざことづてん、其夢の如き淡き光に、我胸の思をつゝみて、君に贈れよかし。明けの日は、終日涯なき大海の中を過ぎて、島山の微けき影をさへ認めぬば、目は迷ひて君かあたりを何處と指さんやうもなし、御前崎の燈台を左の方にみたる頃、其日もまた暮れぬ、立出て、より幾日經にけん、旅寢の數も重なりぬ、君と見ぬ日も久しくなりぬ、明日は都に入りなんに、遠さかりたる道の程を思へば、たゞいはん方なく心細くて、此船かへさまほしう思はるゝも愚なれや。

今日は晝よりくもりて、雲の脚たゝならず急なりければ、風とやならん、雨とやならんと心遣ひせしに、さしたることもなくて夜に入りたれど、空は猶晴れず、雲の絶間〜をきらめく星の光は思ふにあまる胸の思を口には得いはで目に通はする戀人の瞬かも、轟く浪の音に胸や冷さん、折々にそを掩ひ妨くる雲のちぎれの更に心憎しや、昨夜に似す月さへも暗ければ、慰む方もなくて、甲板にあるへき心地もせねは、我室に降りて臥す、爛燈光の暗くして相軋る汽關の響、船をかむ浪の音、耳に聒しければ眠るへくもあらず、目は閉ちたれど、さま〜の思に胸なやましければ、また起き出で、甲板に上るに、空名残なく晴れて拭へるか如く月は既に落ちて星疎に、東の方はの白み、微茫たる淡烟一面に立籠めて、見渡す限り輕紗につゝまれたるが如く、前面遙かに螢の如き幾個の燈影を認めぬ、曙けさらぬ間に船は横濱につきぬ、君を離れて遠くも來りけるかな、せめてはと見返れど、唯白雲の果もなし、都に歸れば遇ふ人毎に我を瘖せたりといふ、絶ぬ思の胸にあればとは誰れか知らん、旅のやつれといひまぎらせど、更にやつれゆくを人間は、何と答へん、都の紅塵もうるさし、一日留まらば、我は再び去るべきに、相見ぬ日數の長しといふにはあらず、されども、三十日、待ちて暮す一日〜の長さ事よ。

無常迅速の命を頼みて再び相會はん日を樂しむ、望の幻にたふらかさるゝ、我はかくまでに愚なりけるよ。

山百合

咄々、何者か人躰を美の極致なりといふ。外に天使の俤を粧ふて内に禽獸の心を藏するもの、即ち人なりと知らずや。天神其己身を摸し造りて、而かも惡鬼之に其魔氣をふきこみたるもの、即ち人たりと知らずや。人は活きんか爲めに生く、道といふ莫れ、徳といふ莫れ、羽毛を擺脫し盡さば、渾身唯是れ一塊の意慾のみ。人は己れが意慾を遂げんが爲めには、他を陷擠するも顧みず。道と徳とを以て姑く其身を粉飾するも、亦是れ、遂にその意慾を遂げんが爲めの方便にするのみ。意慾を遂げんか爲めには、智巧之が輔となる、智巧を弄して意慾を遂げんとす、人なるもの權詐と虚偽の肉團なるのみ。豊臉明眸を美なりといふ歟、美は則ち美なり、然れども豊臉の潮紅は毒血の脉絡を流るゝものなりと知らずや。明眸の秋波は誘惑の底知らずの湖のさわげると知らずや、戀といふ莫れ、愛といふ莫れ。畢竟これ相爲めにせんとして辭を托せるのみ、依て以て己れの意慾を相遂げんとするの名を美にせるのみ。慾を相遂ぐるを

得ば戀成れりといふなり、相爲めにするを得ば愛成れりといふなり、嬉々として夢幻の樂境に相戯る、彼等自ら識らすと雖ども、相詐はり相欺むくなり。戀といふもの何ぞ、愛といふもの何ぞ。戀といひ、愛といふ、好假托の下に己れか意慾を相なし、相遂ぐるのみ。

血に温まりあるは魔毒の内に熱するわれはなり、呼吸なるものは魔氣を吐納するあるのみ。五官意慾の爲めに感し、四肢意慾の爲めに動く、人の動くや、意慾の爲めに動くのみ。人の渾身これ權詐のみ、虚偽のみ。人心の顧み難き、人心の信す可らざる、己れに利われは就き、利をければ去る。頼む可らざるを頼み、信す可らざるを信して、戀といひ、愛といふ、内に各豺狼の心を藏するを相知らざるなり。生あるもの悉く意慾あり、意慾のこれ有る豺狼と人と何ぞ擇はん。纔に智巧あつて、人は豺狼に異かれりとなすのみ、而かも智巧ある所、人の心却て豺狼より惡なる所以なることを知らずや。人や頼む可らず、人や信す可らず。念あるものは欺き、よく言ふものは詐る。人間の戀と愛と、我何ぞこれに於てせんや。如かず、我は去て自然に觀んかな。

山川は言はず、草木は語らず。自然は無心あり、自然を愛するは寂靜なり。人間の愛は『我』を遂ぐるにあつて、自然を愛するは『我』を忘る。『我』あるか故に意慾あり、意慾

あれば、乃ち權詐あり、虚偽あり。「我」を忘る、恍惚として躰を天地に合す。主なく、客なく。此なく、彼なく。自なく、他なし。自他なく、彼此なく、主客なし、何の所にか私を挟み、何の所にか偽を着けん。虚偽權詐此に於て何の要ぞ。一念動かす、一心湛然。自然に於けるの愛や寂靜。自然なる哉、自然なる哉。

人間不平多し、缺陷の世界憤るも之を如何せん、怨も之を如何せん、之を逃れんには如何せん。乙未の夏鬱々憂を懷いて相の山中に入る。俗累脱し難く、塵縁絶ち難し。山に入て猶煩悶す、人を悪めども、猶人を思ひ、世を厭へども、猶世を思ふ。世に背かんとして得ず、人を避けんとして得ず、煩絶し、悶絶し、懊恨絶して、我心暫くも安を得ず。

一日眠らざるの夜を徹せるの曉、晨涼に乗して門を出て、小逕をたどりて露を踏む。行て鬱樹の蔭に息へは、冷風を吹いて、心氣爽、翛然として夜來の苦悶を忘る。忽ち樹下に一幹の山百合花を認め得。楚々として俗塵に染まず、亭亭として獨り秀づ。花瓣雪よりも白し、純潔未だ汚されず。花頭や、傾く、何の嬌羞をか含む。露を含んで何にか啼く、暈するものは涙痕か。花氣我に向つて吐く、何の情をか語らんとする。一枝綽約たる處女の態、無心無邪氣眞に憐むへし。

歩を留めて踟躕、去らんと欲して去る能はず。如かずもち去つて瓶に挿んで座臥に樂まんか、手を下して折らんと欲して、惻然として折るに忍ひす。すて、去らん乎、能はず。折りもち去らんか、忍ひす。我意惑ふ。去らざる能はず、折るに忍ひす。終に折る能はずして、悵然として去つて寓に歸る。

既に歸つて纏綿懷に忘る、能はず、爾來晨に夕に、閑あれば、必ず此に來つて、此花に對す。此無心の花に對すれば、暫く人間の不平を忘る。花に情ある乎、我に意ある乎。我に意あらず、花に情あらず。相共に無心、相共に無情、無情なり、何をか欺かん。無心なり、何をか詐らん。有情解語のもの、つひに一枝無情の花に如かず。

一日また一日、此の如きもの一日を怠らず。會、風雨急にして門を出つる能はざるもの二日、念は常に花に在て、意切りに焦悶す。天晴る、直にゆいて花を訪へば、花は在らず。われ其處を誤れる乎、右搜左索す。忽ち見る、花瓣散亂恨を留めて地にあり、嗚呼何者の狡兒にか抜き去られ、今移されて何の處にかある。我躰紙に非ず、風雨何の畏る所ぞ、來らざりしは我罪なり、花それ我情の薄さを怨みたらん歎。花神靈あらば我將た何の辭を以てか之に謝せん。痛恨、痛嗟、怏々として家に歸る。意甚た樂しまず。

此夕寓の主人、偶々百合花一枝を我か爲めに枕頭に挿む。満室の靈香脈々人を吹く、我を慰むるあるか如く然り。夜更け人定まつて、薰益々馥郁、夢に入て夢も亦香しく、夢か、幻か、夢幻の裡我は靄々たる花氣につゝまれて、渾身香霧の模糊中に融け去らんとす。

百合や百合や、無心却て是れ有情、解語の人間、終に不言の花に比するに足らず。噫。

曳船の聲

さらぬだに秋の夕は悲しきを、更に異郷にある身は風物何につけ斷腸の種とならぬはなし。中にも悲しきは、鶴水の流を、夕暮に和氣より上りつく曳船の聲あり。夕日も既に神南山かむなみに落ちて、残る茜色の、漸くうすれゆく邊より暮れ初めて、川の色も既に黒み、三日月の影細く缺けたるあたりを、客愁を帯ひて雁の鳴き過くる時、東の方遙かにたえ〜に聲の悠揚する聞ゆ、漸く近くして高低の節漸く明かに、長く清く、断えんとして續き、急なるが如くにして緩に、怨むが如く、訴ふるが如く、悽惋さくに禁へず。我鶴城に客となりてより、夕々に此聲を聞かぬとなく、聞く毎に何とも知らず不覺るにうら悲しくて、袂を絞らぬともなし。秋も早や暮れなんとして、唯さへ憂多

き身の、此頃更に物思ふとありて、一夜涙にあかしたる、朝より、空も同じ心にや、小雨ふりしきりて、さらぬだに結ほれし氣の、語るべき人もなければ、晴れんやうもなし。せめては都なる友に悲しき思をいひ送らんとて、筆はとりながら書き行くうちに昨夜の悲しさの今更のやうに想ひ起されて、情せまり胸塞がり、惱ましさに語も整はず、腕も重ければ、筆を捨てつ。昨夜の涙にひまなければ、いふへき事も語りも果てゝ別れたればと。日暮るゝをも待たで、鶴水河畔の旗亭にゆきつ遇へば又涙のみ。先立ちて雨や隠せる、眼やくもれる、河を隔てたる山々も、濛々と淡き霧につゝまれ、過ぎゆく雲の形につれて、峯の吐かれては吞まれ、隠れてはあらはるゝ、思なき身には閑けき眺ならんも、それさへよくも目にとまらず。涙見られじと面を背くれば、生憎に猶悲しき思の胸にせまりて、言葉さへ出でず。あたりも静かなれば、唯軒のたまだれ、細語くが如き瀬音に和して、更に沈みゆく夕暮の淋しさをますのみ。互に手とどり交せつ、言はんとしては、咽び唯顔を見つむるのみにて、握りしむる手に熱き涙ぞ落ちまさる。つひにこらへずして、手を執りたるまゝに膝に泣伏せしも、流石に聲もわたらず咽ひ入れば、慰めんやうもなく我も鼻うちかむのみ。日は既に全く暮れて、玉垂れの音も漸く急に、瀬音さへも添へまされるに、折節曳船の聲の、心ゆゑにや殊

に哀れにきゝつ。我は此時の此聲を身を終ふるまで忘れ得ざらん。想起せば、初めて相見たる折は、今夜には似て瀬々に碎くる月影涼しく、庭前の凌霄花盛に開きたる時なりき。夜も更けて瀬音のみ高し、月の影益々さへぬ。語れども盡さぬ情を、とりたる手に握りしめつ、共に月に對して相見て嫣然一笑せしとき、今ありとも知らず、今の悲しみありとも知らず、實にや人生の行路難、過ぎ行く一生の波瀾曲折、如何にや變し如何にや遷らん。更に行末の心細さよ。

夜 色

一夜外に歩す、更闌けて月なく、仰げば蒼澄みたる空の色、宇宙の幽玄を表するが如く、錯落燦爛たる満天の星は、天上の秘密を相瞬するに似たり。四顧沈々夜氣森然、獨り寥廓の間に立てば、覺ゆす此天地の大景にうたれて、瞿然として畏れ、肅然としてつゝしむ、美なる哉自然、大なる哉天地、夜は天地の至大を現し、自然の最美を示す、夜色なるものは、天地自然の光景の最も純なるものなり。毫も人間塵埃の氣を雜へず。夫れ人間は情欲の奴なり、名利の役なり、物と相刃かひ、相靡いて役々として勞生す。晝間の天地は、即ち此等人間の爲めに占斷せられ、其紛擾のためみだら

る。故に俗了し、故に汚れたり。光景夜色に至て全く人間を絶す。故に最純なり、故に天地其至大を現し、自然其最美を揮ふを得るなり、故に之に對して畏れ、且つ欽むの念を禁ずる能はざるなり。眞善美是に至つて別致なし、美の極致はそれ夜色にある歟。

然れども翻てまた之を思ふ、此大なる蒼晏の下、此美なる夜色の間、其の暗黒を利して、苞苴は行はれ、内謁は行はれ、賭博は行はれ、姦淫は行はる。黄白のために主義を賣るものも、此間に於てし、朱門を叩いて哀を乞ふものも、亦此間に於てす。あらゆる敗倫惡徳、多くは此間に行はる。今の所謂文明なるものは、外に飾りて内に腐る、なり。偽善の徒彌々多くして、夜色は徒らに彼等をして、暗黒を利せしむるのみ。耻ぢよ、偽善の徒、汝が多く其偽善を行はんとするの暮夜、俯仰して天地の大景に耻ぢよ。

盛代の賜歟

吾をして衰世に生れたらしめば、吾は謀叛人たりしならん。吾をして亂世に生れたらしめば、吾は篡奪者たりしならん。幸に治世に生れ、聖化に浴す。吾は只滿腔蒼莽の覇

心を抑へて斗酒痛飲、狂縦の態、聊か鬱憤の萬一を洩らすのみ、嗚呼、是も亦盛代の賜歟、是も亦盛代の賜歟。

波の雫

夕暉没する頃、舟に乗りて那珂河を下る、夜の平和と、沈静とを齎せる夕靄は、遠くよりする暮色と合して、淡く兩岸の竹樹を罩め、一切地上の醜惡と、人間の喧鬧とを、其内に裏みつ、仰げば空は秋の色に澄みて、右手に明星の唯一つ、天上の冷靜を護る神のやうに輝けり、舟は急灘を下つて、夢の如き黄昏より、沈黙の闇へと馳せ去るなり、一なりし星は、銀砂を撒きたらんやうに空にみたり、瞬の如き閃光は、此闇沈の黙を破らじと胸するにやあらん、いよく進めば、夜はいよく暗し、星の光を透して見ゆる鬱たる黒き影は、岸か森か、點々たる光の水に落つるは、家あるの邊歟。舟は一時計りを闇の裡に馳せて、相對せる兩岸に、螢のむれたるが如く、燈光や、繁き處に來りぬ、船は湊町に着きたるなり。

遙に轟く濤の音に胸先づ躍りぬ、都會の塵中に醒醒して、自然の風光に渴したりし吾は、別れて久しき故き友に會ふらんやうに、懐かしく又喜ばしかりしなり。

夜は暗し、出てたりとて何か見ゆべき、吾は堪へ難き情を抑へて、海を見ずして、其夜は寝ねんとしたり。されども絶えず打よする濤の音に、情を牽かれて、寝たれども眠られず。庭に出つれば、利鎌の如き二十日あまりの缺月纔に出で、すみて高き東の空にかゝれり。堪へずして、吾は濤の音を聴るべに海の方に進めり。銀蛇の匍匐ふらんやうに、渚に寄せ來る濤の響、凄しければ、翻れん許りに星のきらめき、搖ぐかど覺えて、さびしげに照る月の光は、纔に海の一角を射て、果てもなき海原の夜を護らんと、覺束なけに見ゆ。微なる光にすがりて、吾も生きゆく身なりけるよ。荒灘の月に、樂しき思を托せて、うたひし戀も、果敢なく終れり。揚子江上片帆を長風に孕ませて、峨嵋の山月に、半輪の秋を詠めん望も、空となりぬ、世は吾の愚を容れず、友は吾の狂をすてたり。吾は獨り吾心の傷を懷て、限りなき苦痛に煩悶ゆ、哀號して何にか慰むん、星は吾の薄志を冷笑ひ、濤は吾の無力を嘲る。今此の寥廓のうち立てば、坐るに天地の森嚴にうたれ、更に眇然たる吾の身の頼るなきを感じ、黯然として佇立すれば、月とともにさす潮聲急に、我を誘うらんやうに、寄せては返す、いざ吾は、吾が望にも似たる果敢なき星の光の落ちぬ間に、此憂多き世と距てる、此海原の濤を踏まなん。

冷たさに心づけば、吾しらす吾は水際に立ちて、波、脚を洗へり、遽然として驚き、身を引けは、夜も更けぬらし、海吹く風肌にしみて、骨顫ひぬ。

三十二

魔言鬼語

嗚呼吾れ志を當世に得ずんば、輒ち身を捨ててふ饑寒の窟に投じ、天下幾十万無告の窮民の爲めに呼號せむ歟、寧ろ彼淫祠の張本たる天理教に入て、大に天下の愚氓を惑はさむ歟。

我れ元、家を成すに意なし、唯二四より二六に至る無邪氣、可憐、雪の如く、花蕾の如き小髪美人を蓄へて、我か願使に任して机席の間に踞蹠せしめむ歟。

我錢を積むに意なし、然れども錢を愛す、其之を愛するは、散せんか爲に之を愛す、積まんか爲に是を愛せず鉅万の財、手に在り、意の欲する所に従ひて散す、是亦人間一大快心の事。

我は欲す、一日、彼觀音境内の百戯場に於ける、球乗りや、輕業やに苦使せらるゝ、あらゆる小童小女に安息を與へて、之を率ゐて、到る處に汁粉や、天麩羅や、鮎や、蕎麥や、彼等の欲する所に飽かしめむ。

我は欲す、八百八街中のあらゆる丐兒を招致して、之を彼の今の所謂、紳士紳商が宴游歌舞するあらゆる酒樓歌臺に饗し、滿都のあらゆる雪兒吳姬をつとへて、靚粧して此の垢面襤褸の間に周旋せしめて、肉堆く酒湧くのうちに、彼等をして牛飲馬食を逞ふせしめん歟。

更に欲す。年盡くるの夜、陋巷窮衢を巡つて一々に黄金を彼等窮民の債鬼に迫まらるゝ者に與て、之を以て此等債鬼の面に抛たしめん歟。寧ろ歳改まるの日、鶴に騎て揚州に入り、あらゆる彼等不幸なる賣笑の者を買収して、悉く其門戸を鎖さしむると三日、滿都のあらゆる嫖客治郎の呆然として門外に彷徨するものを笑殺せんか。

之に利を啗はしめて、あらゆる代議士の節を買ふて従容指呼の間に天下を左右せん乎。若しくはそれ、滿場一致して政府の不信任の議を決せしめん乎。

浮浪の壯士を小金ヶ原に嘯集して、盡く劍をとつて日本刀の歌を舞はしむると一番、終て帝國萬歳を三呼せしめん乎。

一死もとより易し、死の法また多し。毒を仰くも可なり、劍に伏するも可なり、縊るゝもよし、短銃もよし、水に死するもよし。我はそれ何をか擇はん。大丈夫骨を馬革に裹む能はさるも、豈に徒爲にして死す可んや。

三十三

空山夜更けて、天黒く、萬籟沈み、星斗獨り爛々たるの時。紫電一閃と首をとつて喉に貫ぬき、満口の血を啣んで彼の大虚に向つて仰き吐かん歟。

雲急に、雨暴れ電閃めき、雷震ふの夕。狂風空に吼へ、怒濤脚下に噛むの處、獨り巖上に立ち天を仰いで大笑、一躍身を轉して、飛んで海に入らん歟。

遠州灘の上、天澄み月明かなるの夜、三更。甲板上、人散し盡し、舷を打つて潮聲急なるの時。満天の清光を浴ひて獨り鐵欄に倚り、笛をとつて吹奏一番。奏し歇むて餘響散して猶空にあり。此時身は洵然として水に没せん歟。

原野曠莫の間、金氣蕭森の夜。幕天席地、一蓋の穹張中、草を焚いて濁醪を温め、丐兒數人を側に喚來つて、之に其世界觀を聞かんか。寧ろ風清く月白きの夕、高樓に置酒して所謂當世の詩人を招徠し盛んに乃公を謳歌せしめん歟。

我れ幸にして、壽を保つを得ると猶二十年あるを得ば、齡便ち知命に近からん。衰餘、時に益なきの身、何をか爲さん。世を遯れ山に入り、鬱蒼たる綠樹の蔭、淙淩たる清溪の上、ハモック樹枝に繋けて草を結び、樹果を拾ひ、湖流に飲み數頭の龍犬を隨從して、其間に栖まん哉。

古へ東羅馬帝城のありし處、弦月の旗高く空中に翻つて、韃靼民族の雄圖猶みるへ

し。往日の匈奴、今何くにある、當年の蒙古今何くに在る。東亞民族が西歐蹂躪の遺蹤、今日に見るべきもの唯土耳其の一帝國あるのみ。今や罷憊、却て碧眼スラヴに凌侮せらる。もし我に滿腹の經綸あらしめば、それ去つて土耳其に行かん哉。

海若怒つて海嘯を起し雨師怒つて水災を下す。人や至つて無能なる哉、能ふべくんば唯、一あり、烈風に乗して火を四方より放ち、八百八街を猛燄の裡につゝまん哉。

有始なるものは有終なり。宇宙の破滅、世界の末日、それ必ず來らん歟。我は欲す、頼に生を享けて此時にあり。雲低れ、風死し、日色黃ばみ、形象沈み、鳥聲を呑み、葉、戦がす、天地暗愴、腥氣陰森。忽ち聞く、轟然響あり、地、震ひ天、撼く一道の光芒、長鳴して空を横絶すれば、天傾むき、地裂け、烈焰卷き騰り、星斗亂落。萬口一齊。悲鳴の叫び未だ終らず。轟然一聲、大地粉塵。人間こゝに終り、地球こゝに終る。肅然危坐して我は天地と共に、潔く最終の運命をうけんのみ。

生ふる千草の露の中、嵯峨野あたりに庵を結び、顛を圓め、衣を染めて、暫く世と相忘れん乎。而かも經を讀まず、阿伽を汲まず、葦を茹ひ酒を喫するを禁せず。意の欲する所に従つて此裡に高臥せん哉。

花の下にてわれ死なんといひし西行は、元來大俗物のみ。然れども、花下醉倒、日の

既に暮れたるを覺ぬす。冷、肌に透りて、眼を開けば、七日ばかりの月眉の如く、斜に花枝に掛り、風靜かにして花片の落つると遅く、恍として月光の凝りて天外より來るものに似たり。滿身の花影身を起すに懶し、春も亦此靜寂の味あり。

嶺雲子狂せる歟、何ぞ其語の怪にして詭なる。而かも、寧ろ、嶺雲子の狂せる所以を知る歟。

草し終て筆を投して茫然自失す。時に、戸牖の外、呵々の哄笑を聞く。遽然として俄に覺ひるあるか如きを覺ゆ。戸を推して其者を見んとすれば、杳として形影なし。怪雲の外、猶笑聲あり。魔歟、鬼歟。嗚呼我は魅せられたる歟。

嶺雲搖曳終

明治三十三年三月廿八日發行	明治三十三年四月二十日再發行	明治三十三年六月二十日發行	明治三十三年九月十日發行	明治三十三年十月廿一日發行
---------------	----------------	---------------	--------------	---------------

定價貳拾錢

版權所有

著者 田岡佐代治
 發行者 佐藤儀助
 印刷者 大野喜六
 印刷所 成功堂

東京市神田區錦町二丁目六番地
 東京市麴町區飯田町四丁目三十一番地

發行所 東京市神田區錦町二丁目六番地
 新聲社



庚子年
 正月
 十三日
 丁未
 二月
 初十日
 丙午
 三月
 初八日
 乙巳
 四月
 初六日
 甲辰
 五月
 初四日
 癸卯
 六月
 初二日
 壬寅
 七月
 初二日
 辛丑
 八月
 初二日
 庚子
 九月
 初二日
 己亥
 十月
 初二日
 戊戌
 十一月
 初二日
 丁酉
 十二月
 初二日
 丙申